

〔研究ノート〕

神戸市街を造った影の主役について

—— 関戸由義と関戸慶治の仕事から ——

松 田 裕 之

はじめに

大阪湾内に巨大港を擁し、国際貿易と観光で栄える神戸の原型は、慶応3年12月7日〔西暦1868年1月1日〕の開港から明治10年頃までに粗方^{あらかた}ができあがった。その一翼を担ったのは、地生えの豪商や名士等もさることながら、むしろ一攫千金の夢を抱いて各地から群れ集った野心家たちである。

徳川幕府が造成に深く関与した横浜とは異なり、いわゆる旧幕時代を持たなかった神戸は、開港当初から文明開化が放つ眩い^{ひかり}光彩のなかで、国際貿易都市への歩みを力強く進めることができた。それを存分に浴びる人びともまた、旅回りの一座が手を携えて舞台作りに励むかのように、神戸という空間^{トポス}を各自の創意と工夫に依りながら、文字どおり手作りしていく。

筆者は『草莽の湊 神戸に名を刻んだ加納宗七伝』(以下、『宗七伝』)において、今日「フラワーロード」と呼ばれる豪宕な南北幹道^{こうどう}を敷いた加納宗七〔紀州和歌山城下出身〕を中心に、彼ら野心家たちの事績にも能う限り論及した¹⁾。その折、主役の加納宗七に匹敵するほど筆者の関心と興味を掻き立てたのが、関戸由義という人物である。

現在の神戸市街の原図を描いたのは、この人物ではなかったのか。にもかかわらず、これまでほとんど顕彰らしい顕彰が為されなかったのはいかなる理由からか —— そんな疑問が胸中芽生えて、『宗七伝』も出版間近になった頃から関戸由義の調査にも着手、その中間報告として本誌に「関戸由義事績考 —— 神戸市街造成の謎を追って —— 」(以下「事績考」)²⁾を²⁾発表した。

けれども、長らく謎に包まれたまま、神戸史の片隅に放置されてきた関戸の輪郭は掴みどころがなく、その実像を明瞭な線で描き出すために、なお新たな知見や史料の教示を各方面に請いたい気持ちがある。幸いにも『宗七伝』や「事績考」を御覧下さった方々からは親身な協力や貴重な助言を賜ることができ、歴史の闇に紛れた関戸由義の生涯に光をあ

てる新たな史料にも巡り会えた。

それらを介してようやく浮かびあがったのは、「従来、関戸由義ひとりの名で語られてきた事績は、じつのところ彼の親族と思しき関戸慶治との密接な連携をつうじて達成された」という驚くべき事実である。黎明期神戸の発展を扱った既存の諸文献は、どれひとつとしてこれに全くふれていない。筆者は『宗七伝』のなかで「関戸由義と関戸慶治は別人」と明記したものの、ふたりの関係については十分な論証を行うことができなかった³⁾。

そこで今回、この事実を導くこととなった調査結果をふたたび中間報告というかたちにまとめ、「関戸由義・慶治の連携による黎明期神戸の都市造成ならびに土地開発事業の実態」に迫りたい。この両名の生き方は、我々の祖たちが旧秩序の崩壊とそれにとまなう価値観の転換をいかにして自らの好機^{おや}に変え、新時代における足場を築こうとしたのかを物語る魅力的なモデルともなろう。

I わずかに判明した来歴

『宗七伝』と「事績考」において、筆者は関戸由義の出身地を越前福井藩と断定した。いま一度確認すると、福井藩が編纂した家格別人事記録『新番格以下 増補雑輩』の「せ」項には、「横濱也 関戸良平 輪違 一 明治二巳十二月四日民部省通商少佑申付候事 一 通商権大佑 一 同三年十二月五日通商少佑儀被免、本官候条此段相違候事」という記載がある⁴⁾。

「関戸良平」を任用した民部省は、明治2年7月8日に設置された地理・土木・駅通等を管轄する民政関係官庁であったが、同年8月11日に大蔵省から租税・監督・通商・鉱山の4司を移管された結果、大蔵省と事実上統合されるかたちになった。ゆえに、「民部大蔵省」と称されることもある。

そこで明治3年の『大蔵省官員録』を調べたところ、「通商司 少佑」欄に「福井(朱書) 関戸良平」の記載を確認できた。この「関戸良平」が関戸由義と同一人物であることは、『明治初期官員録・職員録集成』に採録された明治3年2, 4, 5, 6, 8, 10, 11各月の「大蔵省通商司少佑」欄にある「源 由義 関戸」という記載からも裏付けられる⁶⁾。

したがって、関戸由義のフルネームは「関戸 良平 由義」であり、「良平」が通称で、「由義」が諱となる。この「由義」の読みについては、典拠不明ながら「よしつぐ」も見られるが⁷⁾、筆者としては「せきど りょうへい よりよし」が妥当と考える。

『新番格以下 増補雑輩』・『大蔵省官員録』・『明治初期官員録・職員録集成』の記載を照合できたことで、明治維新後の神戸で摂津三田藩有志らと親密な協力関係にあった事実を以て「関戸由義は三田藩出身」とする、従来しばしば見られた説は誤りとなる⁸⁾。

この点については、兵庫・神戸史の発展に尽力されたロードス書房店主のおおやすしげみつ氏を介して、三田藩史研究の泰斗高田義久氏より「九鬼隆義〔三田藩主〕の神戸移住は明治5年11月であり、それ以前に神戸で活躍した三田藩士はなく、渡米した者もない。したがって、関戸由義を三田藩士と決めつける証拠はない」旨の回答も頂戴している。⁹⁾

それでは改めて、福井藩中で関戸由義は一体いかなる地位にあったのだろうか。残念ながら、藩政時代における彼の経歴は不明のままである。『新番格以下 増補雑輩』にあるのは、民部大蔵省に通商少佐として1年間出仕した記録のみ。『新番格以下 増補雑輩』以外の福井藩家臣団の家格別人事諸記録〔『剥札』・『士族』・『子弟輩』・『士族略履歴』・『新番格以下』・『諸役人并町在御扶持人姓名』等〕を眺めても、「関戸」姓の藩士に関する経歴記載は一件も見当たらない。¹⁰⁾

その理由としては、藩政期の関戸由義（良平）が上記人事諸記録に採録される身分の間人ではなかった、ということが考えられる。福井藩士は大別すると、士分〔上士・中士〕、卒〔下士〕、荒子・中間〔武家奉公人〕に分かれ、そのうちの半数を超える卒以下の身分の者は、さらに藩主の謁見を許される「目見以上」とそれが叶わぬ「目見以下」に分かれた。じつは家臣団の人事諸記録は、御用大工や目見身分の町医師・絵師等を採録する一方で、卒身分の大半を占める足軽や武家奉公人を排除している。¹¹⁾

福井藩家臣団人事諸記録に詳しい長野栄俊氏〔福井県立図書館主任司書〕からは「民部省に出仕した関戸良平の名が『新番格以下 増補雑輩』に収録されたのは、彼がもともと人事諸記録の採録対象となる身分ではなく、また、そうした身分の者の子弟にも該当しなかったにもかかわらず、新政府の役人＝官員となったために、藩として改めて彼の名を把握しておく必要が生じたためではないか」との御教示を得た。¹²⁾

そのうえで、明治維新後の活動実績に照らすと、関戸の前歴は「諸組」と称される足軽か、「荒子・中間」などの武家奉公人かのいずれか、と考えるのが妥当であろう。

前者の根拠は、神戸進出後に関戸は財政改革や都市造成計画に手腕を発揮するが、それを可能にしたのが「諸組」の働きで培った知識や技能ではなかったのか、と思えることだ。けだし、「諸組」と称された足軽は、元和偃武以来続く太平の世において官僚組織化した藩政の最下層にありながらも、実体としては行政事務の現業吏員として、土木普請に類する仕事〔灌漑土木・山林伐採・鉦山開鑿など〕や諸役所の庶務〔冠婚葬祭行事の差配や財務会計〕も遂行せねばならず、多方面にわたる高い実務能力を求められたからである。

ついで、関戸の前歴を武家奉公人とする根拠は、福井藩家老を務めた本多修理敬義しゅうりたかよしの日記に隠されている。そこに「良平」という名の家来が登場するのだ。さきにも述べたが、関戸由義の通称は「良平」である。それらを数件拾い上げよう。¹³⁾

- ◇慶応三年八月六日「今八ッ時より勝三郎・良平・万助・草り取老人ニ而馬ニ而伏見へ行、稲荷ニ而馬返ス」
- ◇慶応四年二月十一日「五ッ時頃良平・三郎来着」
- ◇同年六月十日「今夕セッ時以前、勝三郎、雄也、良平ト人足老人、両掛ト葛籠ナリ、淀川下リ之積リ」
- ◇同年十月八日「今朝加藤へ良平遣シ口上ニ而相頼」

文脈に照らせば、「良平」は敬義の長男本多勝三郎〔貴一〕の側^{そば}に仕えたと推測される。そこで、敬義の日記に記された「良平」が「関戸由義」であるか否かを、『松平文庫』収録の人事記録『元陪臣』乾・坤にて確認したが、「関戸」姓の陪臣は見当たらなかった。¹⁴⁾

ただし、明治2年以前に主家を離れた者は『元陪臣』に採録されなかったから、後述するように、慶応4年・明治元年頃には横浜かアメリカに在った関戸は、当然にも記載の対象外に置かれた。よって、『元陪臣』乾・坤に採録されなくとも、関戸由義の前歴が武家奉公人であった可能性は残る。

明治維新後も御附家老として旧藩主の春嶽^{しゅんがく}こと松平慶永^{よしなが}に仕えた敬義は、明治2年6月に家督を養子の源四郎に譲り、実子の勝三郎こと貴一に別家を興させ、自らは隠居の身となった。たしかに明治5年壬申戸籍には「足羽縣足羽郡第五區土居原町組土居原町千八十五番屋敷 戸主本多貴一」・「父隠居 波釣月^{あすわ}」と記載されている。¹⁵⁾「波釣月」は、隠居後に敬義がもちいた号である。なお、「足羽縣」は明治4年に旧越前国北部を管轄するために設置された県名であり、現在の福井県嶺北の大半に相当する。

やがて明治9年5月、本多家は神戸に移住、戸主の貴一は足羽県から兵庫県に貫属〔明治初年の戸籍制度の一環で、戸籍の存在する土地を指す〕替えした。じつはその背後に、同家と関戸由義との関係も見え隠れするのだが、この点は次節であきらかにしたい。

兎にも角にも、民部大蔵省出仕以前における関戸由義の経歴は、数件の状況証拠を組み合わせた推測の域を出ないのが現状である。引き続き、彼の出自ならびに越前福井における経歴、すなわち神戸進出に至るまでの約40年にわたる人生航路を確定できる文献史料の探索に全力をあげねばならない。

それにあたってはしかし、もうひとつ、関戸由義に関してこれまで伝承されてきた誤説を正しておく必要がある。彼の事績を最初に紹介した『神戸開港三十年史』乾・坤や『神戸市史 本編総説』・『同 本編各説』¹⁶⁾には、「関戸由義」のほか、「関戸慶次」・「関戸啓次」・「関戸敬次」という姓名も登場している。該当箇所を以下に引く。

- ◇『神戸開港三十年史』－乾－

- ・ 404頁「明治六年諏訪山温泉地を關戸由義に借り資本を三田藩主より得て開業し……」
- ・ 490頁「明治七年三月に至り、此郵便役所は参百五拾圓を以て關戸由義に賣下げ、栄町六丁目に於て、二百坪九合、外に其東隣の地四十二坪（此代金六百九拾圓）を關戸由義より買上げて此に移轉す」
- ・ 509頁「神戸上組地内和蘭領事コルトハウス永借地建物共賣拂候……關戸慶次持地二反八歩同所上組……」
- ・ 512頁「金参百九拾六圓八拾錢壹厘 神戸町關戸慶次所有地二口買上代」
- ・ 537頁「此當時専ら市街道路の開鑿に就て、設計監督の責に當りたる者を少属關戸由義と為す、彼は福井の産にして、頗る機慧の資質あり、慶應の末、……」
- ・ 556頁「明治三四年の頃より土地に着眼したる關戸由義は……」
- ◇『神戸開港三十年史』一坤一
 - ・ 507頁「従前關戸敬次が、私費を以て維持し來れる關山學校も、此年六月を以て廢校せり」
 - ・ 509頁「九鬼隆義、佐畑信之、關戸由義、野村致知等は、神戸元町四丁目へ神戸女子手藝學校を設け……」
 - ・ 545頁「故藤田積中、關戸由義の為に……」
- ◇『神戸市史 本編総説』
 - ・ 132頁「以上の道路市街の新設に関し専らその衝に當りしは縣官關戸由義なり」
- ◇『神戸市史 本編各説』
 - ・ 244頁「嘗て福澤諭吉に従ひ米國に遊び泰西の事情に通曉せる關戸由義」
 - ・ 328頁「兵庫縣廳は、關戸由義をして之を論しめ、纔に事なきを得しが、由義は尚ほ將來をも慮おもんばかり、五年四月許可を得て貿易商社を組織し、神戸大阪の貿易商以外に、新に京都の貿易商をも加盟せしめ、三井組・小野組を社長とし、橋本藤左衛門・長井金三郎・武田九右衛門を副社長に挙げ、其事務所をも神戸中組總會所に移し、此商社に附與するに五厘金の徴収并に貿易上取締の権能を以てしたれば紛紜ならびに落着を見たり」
 - ・ 446頁「栄町大道路は山手新道に次ぎて成る、將來の頻繁なる交通運輸の便に備へんがためには、神戸より兵庫に通ずる大道路の必要を認め、明治五年九月に實測に着手し、延長五百六十三間、幅を溝共十間と豫定し、南北三十八間を買収し、(中略)縣官町會所掛關戸由義をして新大道路開拓を兼ねしめ(中略)六年四月に着手、十一月竣工し、佳名を撰びて栄町通と名づく」
 - ・ 570頁「兵庫縣廳は、縣官關戸由義の建白いを納れ、洋學校を興こして(中略)鳥取藩が慶應年中(中略)神戸村に設け維新の際兵庫裁判所に寄附せる校舍(中略)を利用し、明治元年八月始めて洋学伝習所を開き、教師として東京より箕作貞一郎を聘して月俸百兩を給し」
 - ・ 788頁「北長狭通四丁目關戸慶治は神戸商人頭取として御前に進み祝辞を奏上し、兵庫居留地會議議長ナサン・ジェー・ニューイターは兵庫縣廳を経て祝詞を捧呈したりき」
 - ・ 934頁「金圓を寄附して窮民を救恤せる橋本藤左衛門、關戸慶次、彭城昌實及び三井銀行・貿易會社、志摩三商會には木盃の下賜あり」、「十二年夏期傳染病豫防の爲め硫酸鐵一万ガロンを寄附せる關戸由義」

赤松啓介はこれらに依拠して、『神戸財界開拓者列伝』(以下『列伝』)に「都市計画の先覚 関戸由義」(以下「先覚」)を取めたが、そこで「関戸由義また啓次、慶次とも書く」と紹介している。¹⁷⁾「慶治」・「慶次」・「敬次」は確かに左掲引用にも見られるが、「啓次」という表記は他の文献でも見出せなかった。

じつは「慶次」・「啓次」・「敬次」はいずれも当て字であり、「慶治」という表記が正しい。神戸大学附属図書館蔵『神戸開港文書』収録の『関戸慶治温泉開拓願之義ニ付伺』提出年月日不明、『関戸慶治所有地図面并隣地境界表』明治6年1月、『伏願』明治6年2月、『(無題) 建屋地所共貸渡約定書』明治8年5月8日、『(無題) 建屋地所共貸渡約定書英文』¹⁸⁾、あるいは『神戸誌』[一]採録「県庁」等の公文書類には、確かに「慶治」と表記されている。なお、『(無題) 建屋地所共貸渡約定書英文』には“^{ママ}Shekido Keiji”の記載があることから、「慶治」の読み方は「けいじ」で間違いなからう。

そして、さらに由々しき問題は、赤松が『列伝』執筆の作法として、^{いたづら}「徒に好奇を煽る」ことを戒めて戸籍的調査を忌避した結果、²⁰⁾「関戸由義と関戸慶治は同一人物」とする説が伝播したことだ。冒頭明記したとおり、この両名はまがうかたなき別人である。

ただし、泰斗赤松の名誉のために一言すれば、誤説自体は赤松の責任であったとしても、その定着は筆者も含めた後継の責任であり、また仮に赤松が「戸籍的調査」を実施していたとしても、神戸進出以前における関戸の経歴を『列伝』執筆時点で解明するのは甚だ難しかったと思える。

そのうえで、関戸由義と関戸慶治の関係を知る手掛かりを求めれば、神戸市追谷墓園第19区に関戸由義の墓所がある。これはもともと明治6年に市街各所の共葬墓地を統廃合して造営された城ヶ口墓地〔現神戸市中央区山本通3丁目城口山光尊寺・山手幼稚園一帯〕にあったが、同墓地が大正14年開設の神戸区追谷墓地〔その後、神戸市立追谷共葬墓地を経て、現在は神戸市追谷墓園〕へ全面移転するにともない、²¹⁾現在の場所に改葬されたものだ。

森林に面した角地から該区全体を睥睨するかのよう^{へいげい}に立つ墓石の表には「關戸由義之墓」、裏には「明治貳拾壹年八月十七日没」と刻まれている。²²⁾また、明治21年8月18日付『神戸又新日報』には「関戸由義氏死す。同氏は近来兔角病氣勝となりしが遂に昨日午前九時物故せるよし」との記事もある。²³⁾

『神戸開港三十年史』の編纂にも参加した川嶋右次^{ゆうじ}こと禾舟^{かしゅう}が昭和8(1933)年6月発行の『兵庫史談』に発表した「關戸由義氏事蹟一斑」(以下「一斑」)は、戦前唯一の関戸評伝であり、由義と親しかった安藤行敬〔福山藩出身。兵庫倉庫会社、神戸棧橋会社、神戸貯蓄銀行の重役を歴任〕の備忘録を下敷き²⁴⁾にしているが、そこには「享年六十歳」とある。これに従うならば、関戸由義の生年は文政11(1828)年頃と推定できる。

さて、由義墓の中台には親族と思しき人びとの姓名が列刻されている。その筆頭が「關戸慶治」であり、墓主本人＝由義の名が重複して刻まれるとは考えにくいから、「先覚」が同一人物と断じた關戸由義と關戸慶治は別人であったことを裏付ける。

だが、親族のひとりである限り、關戸慶治と關戸由義は全き赤の他人ではない。のちに詳論するが、この兩名は明治維新前夜より緊密な連携のもとで、来るべき新時代における立身の道を模索していることから、極めて近い血縁者であったと想定される。おそらくは年齢・容姿共に近く、いずれが年長かは定かでないが、兄弟ではなかったか。

開港後最初に編纂された神戸の通史『神戸開港三十年史』乾・坤が、由義と慶治の関係を示すことなく、兩名の事績を無造作に紹介したことは、以降同書を重要な典拠として編まれた『神戸市史』や『列伝』等の神戸関連史書類が由義と慶治を混同して語る大きな原因になった。

話を戻すと、勤王の象徴たる楠正成シンボルを祀る湊川神社の初代宮司を務めた折田年秀〔薩摩藩出身。砲術に優れ、幕末は国事に奔走。戊辰戦争では官軍参謀の一人となる〕の日記を読むと、東京出張中の明治13年12月29日に「關戸一平」なる人物が登場し、翌30日に「早朝關戸ト共ニ古道具店江參ル」との記載がある。さらに明治18年4月19日には「關戸一平并ニ本城新介来り閑話す、關戸ハ出雲へ銅山検査ノ為ニ參るニ付……」²⁵⁾との一文もある。

後述するが、關戸慶治は明治8年頃より摂津国川辺郡の多田銀銅山の開発に従事していたから、折田日記にある「關戸一平」が關戸慶治である可能性は高い。さすれば、關戸慶治の姓名フルネームは「關戸 一平 慶治（せきど いっぺい けいじ）」であり、「一平」が通称で、「慶治」は諱となろう。

さて、關戸慶治の来歴は、關戸由義と同じく、あるいはそれ以上に詳らかでない。由義のほうは、上掲の墓誌や『又新日報』記事によって没年月日を特定できる。かたや慶治のほうは生没年月日が共に不明。神戸進出に至るまでの足取りも全く掴めない。明治25（1892）年発刊『日本紳士録 第二版』の「せ」項に「關戸慶治 神戸市 三宮」とあり、この時点では健在であったのだろう。²⁶⁾また、由義と混同して語られてきたことから、さきに『神戸開港三十年史』や『神戸市史』より引いた事績については、改めて「仕分け」の作業を行う必要がある。

II 關戸家の人びと

ではつぎに、「關戸由義之墓」に刻まれた、由義に連なる一族の内実に向かう。墓の中台には「關戸慶治」を筆頭に、「關戸五三郎」、「關戸陽一」、「關戸房子」、「關戸左一郎」、「關戸雄治」、「村瀬春雄」が、また、左右2基の墓前灯籠には「關戸直子」が、それぞれ

刻名されている。これらのうち、現時点で由義との関係があきらかなのは、「左一郎」＝長男、「村瀬春雄」＝二男、「陽一」＝四男の3人である。

「左一郎」を長男とした根拠は、由義の葬儀において喪主を務めており、また「左」と「一」の字が第一子たることを表すと解釈できるからだ。明治21年8月18日と翌19日の両日『神戸又新日報』に掲載された由義の死亡広告は、「神戸穴門上ル 關戸左一郎」の名で出されている。²⁷⁾「穴門上ル」は、關戸邸の在った地所、すなわち鯉川筋の西沿道に面した北長狭一帯〔現在の北長狭通4丁目1～10〕を指す。同月22日・23日の『又新日報』にはやはり「關戸左一郎」の名で「會葬者へ御禮」が掲載されている。²⁸⁾後述するが、「左一郎」は關戸邸の隣接地に設けられた神戸第一区戸長役場の副戸長も務めており、由義亡き後の關戸家の長たる立場にあった。

二男とした「村瀬春雄」については、すでに『宗七伝』や「事績考」でもふれたが、本邦損害保険学の先駆であり、帝国海上火災〔現安田火災海上保険〕重役や東京高等商業学校〔現一橋大学〕教授を務めたこともあって、伝記や人名録の類いから比較的詳しい経歴を知ることができる。そのいずれもが「福井藩士關戸由義の次(二)男に生まれ、幼少期に村瀬家を継ぐ」と紹介している²⁹⁾ので、間違いはなからう。

「關戸陽一」が由義の四男であることは、筆者が關戸慶治による多田銀銅山の開鑿を調査した折、送籍證書等によって確認できた。なお、この證書類には「副戸長 關戸左一郎」との記載もあるが、いまだ非公開の私蔵文書なので、現時点ではこれ以上の論及は控えねばならない。³⁰⁾

「陽一」は、父の由義も創設に関与した神戸高等商業学校〔現神戸大学〕卒業後、金融業界で活躍する。『日本金融史資料 昭和編』第35巻にその名が見えるし、また外交官として著名な天羽英二とは神戸高商時代より親しく、『天羽英二日記』第3巻には「昭和11年2月16日(日)午後堀ノ内心月院(杉並区)關戸陽一母23回忌法会参列」、「昭和12年7月15日(見送人)關戸陽一 村瀬逸三 スイス公使拜命 出發時」と記されている。³¹⁾「關戸陽一母」は由義の妻に相違なく、墓誌に列刻された「關戸房子」か、墓前献灯に刻名された「關戸直子」のいずれかの可能性がある。「關戸陽一」と併記された「村瀬逸三」は村瀬春雄の次男であり、やはり神戸高商を卒業、大正海上火災〔現三井住友海上火災〕社長を務めた。³²⁾

「關戸五三郎」と「關戸雄治」については、由義との血縁がいかなるものであったのか判然としない。ちなみに、筆者は平成26(2014)年御盆の折に「關戸由義之墓」を数度訪ねてみたが、供え物や献花の形跡はなかった。また、平成27年早春に訪ねたときは、茂り放題の雑草は枯れて、芝台を囲む土は所々が抉られたように凸凹していた。回向に訪れる

子孫や縁者が最早いないのだろうか。³³⁾

さて、追谷墓園第19区には、もうひとり「関戸」姓の人物が眠っている。「関戸由義之墓」から10メートルほど離れたところに立つ「関戸恵津之墓」。墓誌には「明治十二年第六月廿九日歿」・「十四年第六月関戸氏建立」・「本多光訓・妻つね」とある。「関戸氏建立」という墓誌が、関戸家と恵津の血縁を覗わせる。

それにしても、奇妙なのは「関戸恵津之墓」の位置である。それは「明治十八年五月六日卒 享年満三十五」・「兵庫縣士族」との墓誌が刻まれた「本多貴一墓」に寄り添うように立つ。「貴一墓」の横には、「本多八千子墓」もある。そこには「明治廿三年十二月廿四日卒 満六十八」・「越前藩本多釣月妻 同藩松平鷗客姉」の墓誌がある。³⁴⁾

すでに紹介したが、本多貴一は「勝三郎」とも称し、福井藩家老を務めた本多敬義の長男にあたる。『松平文庫』にある福井藩士人事諸記録中の『士族 二』採録「本多勝三郎(消線) 貴一」によると、貴一は明治2年の敬義隠居に際し、家督相続した義兄源四郎より700石を分知され、父敬義の石高500石を加えた1,200石で本多別家を立てた。沼津兵学校の資業生及第者(員外生)として明治2年10月～3年5月まで在学した後、松平慶永の計らいで大学南校教頭グウイド・フルベッキに師事、英学修業に励む。³⁵⁾本多八千子は「也知」とも表記され、墓誌のとおり「本多釣月」こと敬義の妻にして貴一の実母である。つまり、関戸恵津なる女性は、関戸由義(良平)が仕えた可能性もある本多敬義の一族と同じ墓所に眠っているわけだ。

さらに奇妙なことに、この本多家の墓所には波釣月こと本多敬義の墓と本多貴一の正妻である本多登宇の墓がない。じつはこのふたりの墓は本多貴一と本多也知(八千子)が眠る城ヶ口墓地[現在は追谷墓園に改葬]から東南1キロメートルに設けられた市営春日野墓地に設けられた。現在、市営春日野墓地は廃され、本多敬義と本多登宇(歌子)は神戸市鶴^{ひよどりごえ}越墓園さざんか地区第2区に改葬されている。³⁶⁾

それでは、本多家の人びとが別々の墓所に眠る光景は、いったい何を意味しているのか。その背後にはいかなる事情が働いたのであろうか。この疑問を解く鍵が「関戸恵津之墓」に隠されている。

現在、追谷墓園内に立つ墓のうちで旧城ヶ口墓地より移設された墓群が、元々どのような配置になっていたのかは定かでない。が、「関戸恵津之墓」と「本多貴一墓」の並びは、生前のふたりが夫婦のような関係にあったことを想像させる。さすれば、「恵津之墓」背面に刻名された「本多光訓」は、彼女と本多貴一との間に生まれた子どもではなかろうか。

さきに本多敬義と関戸由義(良平)が主従であったと推理したが、そのことを裏付けるのは、松平家家務局の家扶・家従が日々の来訪者とその用件を記載した『御用日記』と松

平慶永自身がしたためた『礫川文藻』^{れきせんもんそう} 坐右日簿^{ざうにちぼ}。このふたつの日記は書き手こそ違え、いずれも松平家の日常を記録した文書であることから、内容的にはほぼ重複している。

『御用日記』「明治五壬申歳正月ヨリ十二月迄」の「明治五年正月二十八日」には「一唐筆 一箱 一 賀茂川千鳥 一箱 関戸良平 右献上致候事」と記載されている。おそらくこれが『御用日記』に「関戸」の名が記された最初の箇所³⁷⁾である。藩政期には「御目見」など到底叶わない身分であった「関戸良平」こと由義が、かつて雲上の存在であった旧藩主と接触する機会を得たのはいかなる^{てする}手蔓^{てする}によってなのか。それについては、『礫川文藻』坐右日簿に興味深い記載が2箇所³⁸⁾ある。

- ◇「明治十一年一月四日 微雨 1金 神戸関戸波釣月『本多修理』へ端書郵便祝詞差出」
- ◇「同年二月十四日 好晴 2木 関戸由義・波釣月・高村高・浅見岱輔へ以直書海苔一箱宛ヲ送ル、右ハ大野規周家来豊島竹蔵帰坂ニ付同人へ托ス」

両日共に関戸と波釣月＝本多敬義を併記していることから、当時、このふたりが神戸において近い関係にあったと推察できる。否、それどころか、明治9年5月の本多家の神戸移住には、関戸由義が関わっていた可能性が高い。

すでに明治4年7月14日、明治政府は廃藩置県令を発し、江戸期の大名領＝藩および天領に代えて3府302県〔年内には72県に整理統合〕を置く大規模構造改革を断行した。その結果、270大名家が消え去り、士・卒両族併せて全国40万世帯、およそ190万人の旧武士が身分によって保証されてきた生活の糧を失う。

明治3年末に福井藩の明新館に招かれた御雇外国人ウィリアム・グリフィスは、『明治日本体験記』に、この時の福井城下の混乱ぶりを記している。すなわち、「町の武士の家には激しい興奮が渦巻いている。(中略)町の老人のなかには心配で気が狂いそうな人がいるし、少数の乱暴者が天皇支持者〔勤王派の人びと〕を、『こんな状態にしたのは、お前らだ。殺してやる』と言っている³⁹⁾」と。

そして、明治9年3月28日に廃刀令が布告され、8月5日には華士族の家禄・賞典禄を廃止し、代わりに公債支給を充てる金禄公債證書発行条例が制定〔実施は翌年より〕される。「身分が収入＝禄を保証する」立場を長らく所与としてきた世襲制の上級武士層は、旧秩序が足許から音を立てて崩壊していく事態に直面し、自らの行く末に深い危機感を抱いたことであろう。本多家の人びともそれを共有していたに相違ない。

ここで関戸由義が本多敬義の日記に登場する「良平」であったと仮定すれば、明治維新後、旧主を経済的に支援することで藩政期の恩義に報いていたと考えてよからう。そして、その見返りとして、波釣月こと本多敬義がかつての家臣「良平」こと関戸由義に、松平慶

永と面会する名誉を与えたとしても不思議ではない。先掲『御用日記』「明治五年正月二十八日」の関戸由義と松平慶永の対面がそれにあたる。由義のほうもまた、賢君の誉れ高く、明治維新に尽力し、新政府要人たちにも一目置かれる慶永と誼よしみを通じることは、新時代における立身にとって大きな後ろ盾になると算段したはずだ。

このような関係が続くなか、関戸は家禄・賞典禄廃止に不安を抱いた本多敬義・貴一から身の振り方を相談され、開港地として発展の期待できる神戸で何らかの事業を起こして収入の道を確保するよう勧めた。敬義・貴一父子もそれに従い、福井を出でて、新天地に活路を求める道を選んだ——かような推測も十分に成り立つ。

ところが、ここで本多貴一と関戸恵津が道ならぬ関係に陥り、本多家の内部、さらには本多家と関戸家の間に確執が生じた。そこで本多家では、貴一の妹の「衣きぬ（幾奴）」を貴一・登宇夫婦の養子とし、衣が婿を迎えて本多家を継ぐこととした。それにともなって、敬義は登宇と衣を連れて北長狭4丁目の仮寓を去り、元町通で質商を開業したのち悠々自適する。⁴⁰⁾その資金の大方は関戸家からの融資によって賄われたと考えられる。おそらくは貴一と恵津の間に生まれた子を庶子とし、「本多」姓を許すという条件ではなかったか。その子が「本多光訓」であろう。恵津は明治12年6月29日に世を去ったから、その後は貴一が幼い光訓を養育したはずだ。

一人シングルファーザー親こうだとなった貴一が神戸政財界の有力者神田兵衛門に宛てた年不詳の書簡が2通残っている。ひとつは10月14日付で、封筒に「(表) 兵庫 神田様 神戸 本多貴一 乞御親展 (裏) 封 十月十四日」とある。添え状を現代文に改めて引こう。

「御多祥のこととお慶び申し上げます。さて、先日はご無理なお願いを申上げましたが、早々とお聞き届けいただき、感謝の念に堪えません。当方としてはすぐにでも抵当品を差し出さねばならないにもかかわらず、大変遅れましたこと平にご容赦ください。本日別紙の通り抵当品を差し出しますので、どうかご査収ください。證書につきましては、持参致す所存ですので、直接お会いして御礼申し上げたいと存じます。乱筆にて失礼申し上げます。十月十四日 貴一 拝 神田様」

あきらかに借金に関する内容である。証文には「記 琥珀織 二反 継入メクリ 大三枚 廣唐製高机 一脚 めて六点 右の通り持たせ差し出し候間正に御入手御預置く旨候也 十月十四日 本多貴一 神田様」と記載されている。

もうひとつは11月13日付で、抄訳すると「本日はご多忙の旨、大西（不明）より承りました。明朝お伺い致したく、つきましては是非ご在宅頂ければ幸甚です。蔬菜をお贈り申し上げますので、ご笑納ください」という内容である。債権者たる神田へのご機嫌伺いと

推察される。

他方、元町通で質商を営む波釣月は、貴一の妹の衣（幾奴）を貴一・登宇夫妻の養子としたうえで、衣に婿を迎えて本多家の嫡流を守ろうとした。衣の婿として本多家に入ったのは小柳津精二。安政4（1857）年5月、岡崎藩士小柳津宗和の二男に生れる。⁴²⁾7歳上の兄要人は岡崎藩西洋流大砲方として江戸詰を命じられ、戊辰戦争では榎本武揚率いる旧幕府艦隊に参加、五稜郭に立て籠もり、大鳥圭介や土方歳三等と共に新政府軍と闘う。明治3年3月に謹慎処分を解かれると、沼津兵学校で英学を修め、大学南校に学んだ後、慶応義塾に入った。郷里で英語教員を務め、明治6年1月に福澤門下の早矢仕有的が横浜に開設した丸屋の書籍部門を担当。大阪支店支配人を経て、明治13年に東京日本橋通の丸屋善七店が丸善本店になると、丸善商社東京本店支配人に就任している。⁴³⁾

本多衣と小柳津精二の縁組の背後にはしかし、貴一の働き掛けも覗える。小柳津要人の経歴に照らすと、彼と貴一は沼津兵学校か大学南校かで知己になっていたと考えられる。貴一は自らに代わって本多家を継ぐ人物として、要人に弟精二の本多家入りを請うたのではないか。そこに関戸由義も一枚噛んでいたかもしれない。「事績考」でも紹介し、このあとでもふれるところだが、関戸は要人の師福澤諭吉と懇意であった。また、横浜滞在時、由義は丸屋主人の早矢仕有的となんらかの接触を持っていた可能性もある。

いずれにせよ、小柳津精二が本多衣の婿となったことで、本多敬義の筋筋は残った。旧主家の安泰が図られたこともあり、恵津の死から2年を経た明治14年、関戸家は城ヶ口墓地に「関戸恵津之墓」を建立する。それからさらに4年後の明治18年5月6日、本多貴一が35歳の若さで帰幽した。その墓は、すでに述べたように、「関戸恵津之墓」の隣に建てられたと考えられる。

父母を亡くした幼い光訓を育てたのは、貴一と恵津を不憫に思った也知（八千子）であろう。明治23年12月24日に68歳で世を去った也知の墓は、本多貴一と関戸恵津の墓と並んで設けられた。也知亡き後ひとり残された光訓の世話をしたのは、本多家であったのか、関戸家であったのか ——

その後、本多光訓はつねを娶って一家を成す。「関戸恵津之墓」の背には「本多光訓・妻つね」と刻まれている。そして、現在、追谷墓園の本多家墓所には「関戸恵津之墓」「本多貴一墓」「本多八千子墓」と共に「本多家之墓」が立つ。そこに眠るのは、貴一・恵津の子孫にあたる方々であろう。

波釣月と号した本多敬義は明治39年に92歳で没した。『越前藩幕末維新公用日記』巻末「本多修理略年譜」には「晩年は、神戸市元町通り三丁目二六番屋敷に閑居して詩作に楽しみ、折にふれて青年将校に兵書を講義した」とあるが⁴⁴⁾、その心中は果たしていかなもの

であったのか。

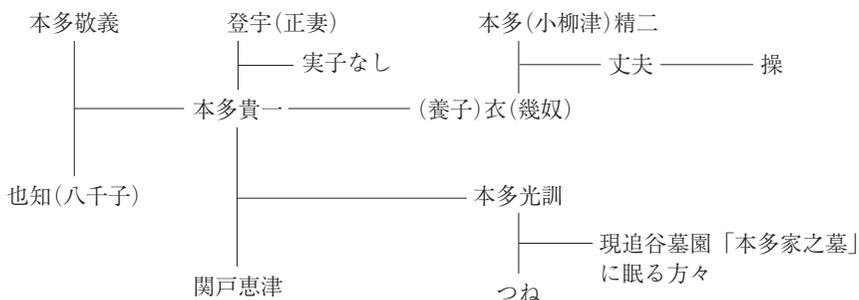
敬義の亡骸は息子と妻が眠る城ヶ口墓地ではなく、市営春日野墓地に葬られた。現在、鶴越墓園に立つ「従四位本多釣月之墓」には、「兵庫縣士族」・「明治三十九年五月廿五日卒」との墓誌が刻まれている。

登宇こと本多歌子は、大正3年3月10日に没したが、夫が眠る城ヶ口墓地ではなく、義父と共に市営春日野墓地に埋葬された。鶴越墓園の釣月墓の横にひっそりと立つ「本多歌子之墓」には、「兵庫縣 士族」・「大正三年三月十日卒」の墓誌がある。付言すれば、登宇の父は本多敬義より本多家家督を相続した義兄の源四郎正脩^{まさなが}である。そして、本多源四郎⁴⁵⁾の実父は、敬義の義兄にあたる本多方真。

敬義と登宇は、越前松平家の家臣中でも名流と謳われた本多家の筋目を通したのではないか。状況証拠に依りながら推測に推測を重ねるのは決して本意ではないが、本多家の人びとが故郷を離れた地で別々の墓所に眠るのは、かかる事情が手伝ったことなのかもしれない。

小柳津家から本多家に迎えられた精二は、「温厚謙讓克々勤儉の徳に富み夙に徳望あり」とその人柄を称され、「水道布設委員，市會議員，商業會議所議員，破産管財人，船組組合取締，神戸取引所監査役等公私名誉職に選ばれ教育の普及に尽力」，その功により港都神戸の名士のひとりに数えられた⁴⁶⁾。大正12年2月7日逝去。その妻にして貴一の妹であった衣は，昭和16年1月12日に世を去る。ふたりは釣月と歌子の墓と並んで立つ「本多家累代墓」に眠るが，衣の墓誌には「兵庫縣士族 元福井藩士」と刻まれている。

以上を系図に描くと，次のようになろう。



ここまで紹介した断片的な史料を繋ぎ合わせると，新たな世で成功を掴み始めた元家来とその人脈を，内心忸怩たる思いに煩悶しつつ，「寄るべき樹」として頼らねばならなかった本多家の人びとの姿が浮かびあがる。

だが、いかに四民平等の世が到来したとはいえ、大方の人びとの心^{メンタリテイ}性はいまだ封建遺制のうちにあり、旧秩序の男女規範を逸脱した恋愛は認め難いものであったはず。ために、由義をはじめ関戸家の人びともまた、亡霊の如き身分秩序の前には新たな時代における経済的成功とて無力であるという不条理に泣いたのではなかろうか。

III 明治維新前後の由義と慶治

黎明期神戸の発展に論及した諸文献から関戸由義の事績を拾いあげ、それらを時系列的に並べていく過程(巻末資料「関戸由義・慶治略年表」参照)で、幾度となく「ひとりの人間が同じ時空に存在しては実行が不可能」と思える場面に遭遇した。

だが、取材に伺った方々からの貴重な御教示のお陰で、従来は「関戸由義による」とされてきた広範な事業活動の一部もしくは特定活動の大部が、じつは関戸慶治という近親者の手になる事実を確認し、上記の矛盾をかなりの程度解消できた。

それでもなお「かなりの」という限定を付さざるをえないのは、関戸由義と関戸慶治の血縁や藩政期における活動の解明に結びつく史料を、いまだ発見できていないためである。

とはいえ、筆者が新たに得た知見は公表しておかねばならない。そうした行為の積み重ねがさらに新たな事実の発掘をもたらす呼び水になり、やがては関戸由義と関戸慶治が神戸近代史の中で演じた役割の全貌を解明できると考えるからだ。

ここでは、明治維新の前後における関戸由義ならびに関戸慶治の活動を、サンフランシスコへの渡航と開港地横浜での猟官活動に焦点を絞って描き出したい。

(1) サンフランシスコへの商用渡航について

これまで関戸由義の事績に関連して必ず取り上げられてきたのは、明治維新前夜における海外渡航である。『神戸開港三十年史』乾には「慶應の末、諸大名より拂はれたる巻繪の箱類、其他日本美術の器具と紙鳶とを携へて、横濱より米國桑港に赴き……」、『神戸市史本編総説』には「由義嘗て米國桑港に赴き、西洋都市の一斑を伺ひ知る」、『神戸市史本編各説』には「嘗て福澤諭吉に従ひ米國に遊び泰西の事情に通暁せる関戸由義」、同前「関戸由義夙に米國に遊びて視察する所ありし」といった記載が見られる。

要するに、アメリカで修得した経験と知識が神戸に進出した由義の活躍を支える屋台骨になったと考えられてきたわけだが、最大の謎は彼が果たしたとされる渡米の実態にある。「事績考」でも推理してみたが、サンフランシスコでの活動実態どころか、渡米時期すら明確に特定できず、不本意ながら「裏付けとなる史料の発掘を、今後とも続けていくしかなかろう」との逃げを打つよりほかなかった⁴⁷⁾。

ところが昨年末、長野栄俊氏の御協力により、この手詰まりを打開する史料を発見できた。それは *The Hawaiian Gazette*, May 13, May 27, June 17, 1868 である。そこに “Dr. Sekido” の名が登場している⁴⁸⁾ので、まずはこの3件の記事を以下に全文訳出しておく。

① 1868年5月13日 [慶応4年戊辰4月21日] 「日本からの訪問者 (“Japanese Visitors”)

「アイダホ号の到着以来、我が駐在員たちは、事業目的の視察旅行で本島を訪れている4人の日本人紳士の一団に注目してきた。丁重さ、快活な陽気さ、そして情報獲得に向けた熱意のお陰で、彼らは歓迎すべき訪問者となっており、我々は誰もが敬意と配慮を以て彼らに接すると信じている。彼らの訪問は、日本と我が国の未来における事業上の関係と直結しており、彼らが自国に我々に関する良き報告を持ち帰ってくれることを願う。

横浜駐在のハワイ領事は、日本団の長 “Dr. Sekido” について、『まことに当を得た人選であり、ハワイにおける日本人の良き代表となろう。彼は自国品の海外輸出に投資した最初の日本人であり、私にハワイとそこの人々について訊き、自ら視察することを決めた。彼が帰国した暁には、我が国は日本政府の質問ことごとくに答える信頼すべき人材を得ることになろう』と述べている。

“Dr. Sekido はハワイを訪れ、我国の工芸、労働システム、そして日本との交易において我々が提供できる商売上の利点を視察するであろう。“Ogata Tegiro” なる商人は、以前ハワイに居り、日本より持ち込まれる製品の責任者であった。学徒であり通訳でもある “Zangimoto” は、最近合衆国から戻り、英語のみならず、我々の習慣や生活様式などにも些か通じている。学徒の “Zeguich” は数カ月当地に滞在して学校に通い、英語を習得して商人として自立することを目指している。

思うに、彼らの訪問は日本においてハワイが好ましい印象を持たれていることの最も興味深い証左であり、より良い貿易ならびに国交を今後築いていけることを予感させるものである」

② 1868年5月27日 [慶応4年戊辰閏4月6日] 「商業関連 (“Commercial”)

「土曜の夕刻、“Mr. Bartow” は、当地ホノルルに滞在する “Dr. Sekido” を介して、和服を中心とした日本商品を大量に購入した。何人もが取引に立ち会い、価格は公正なものであった」

③ 1868年6月17日 [慶応4年戊辰閏4月27日] 「旅行者 (“Passengers”)

「6月15日アイダホ号でサンフランシスコに到着 Dr. Sekido, Yeguich Yangimotu, Ogata Tegero」

付言すると、同じ時期、仙台藩留学生としてサンフランシスコに滞在していた16歳の高橋和喜次 [のちに是清^{これきよ}と改名し、大蔵大臣、内閣首班を務めるも、二・二六事件で暗殺] は、のちに「この時、ちょうど越前の医者某というのが、維新の騒ぎに、いろいろの品物を二束三文に買倒して、それをアメリカに持って来て一儲けしようとかかった」と回想している⁴⁹⁾。“Sekido” に冠せられた “Dr.” に照らすと、じつに興味深い。

仮に “Dr. Sekido” を関戸由義とするなら、*The Hawaiian Gazette* 掲載の3記事と高橋の

回想は、先掲の『神戸開港三十年史』乾、『神戸市史本編総説』、『神戸市史本編各説』の記載と整合するが、『神戸市史本編各説』にある「嘗て福澤諭吉に従ひ米国に遊び泰西の事情に通曉せる関戸由義」には一致しない。そもそも福澤の渡米歴は幕臣時代の2回であり、1回目は安政7(1860)年1～9月の万延元年遣米使節団の一員として、2回目は慶応3(1867)年1月～6月の幕府軍艦受取委員一行の翻訳方としてのことだ。どちらの場合も、随行員の中に「関戸」姓は見当たらない。⁵⁰⁾

関戸由義と思しき“Dr.Sekido”が渡米したとされる慶応4年春頃、福澤は新政府軍東下で混乱する江戸市中にあって、鉄砲洲に構えていた英学塾を芝新銭座へ移転、時の元号にちなんで慶応義塾と命名している。このふたりの間に交流があった事実は後述するとして、関戸由義の渡米をめぐることは、ほかにも幾つかの謎を指摘できる。

まず、商用渡米が事実であるとしても、由義はいかにして必要経費を調達し、どのようなルートを通じてハワイ経由でサンフランシスコに渡ることができたのか、という問題である。

仮に関戸由義の身分を足軽や武家奉公人とすれば、自身の蓄財だけでは商用渡米に要する莫大な費用の調達が甚だ困難に思える。また、*The Hawaiian Gazette* 記事と高橋の回想からは、関戸が医師であった可能性も浮上するが、「御目見町医師」も含む『新番格以下増補雑輩』採録の「関戸良平」欄にそれに該当する記載はない。つまり、「町医師」であったとしても、多額の蓄財が可能な身分ではなかったはずである。

さすれば、「一体如何なる方法によって」ということであるが、貴重な手掛かりを宇佐美雅樹氏〔福井県文書館主任〕より頂いた。それは『松平文庫』収録の『御本丸一橋紀州田安京都江戸大坂大津柏崎〕〔福井藩領内で扶持米を支給されている藩士以外の町医、御用達商人、大庄屋など、さらには領外の全国各地(京都、江戸、大坂、大津、柏崎)で扶持米を支給される町人や浪人の帳簿〕にある「鈴木三右衛門養子 関戸左一郎 一 三人扶持 慶応三卯年三月九日三右衛門病氣罷在家名相続難致候付養子 関戸左一郎与申者へ是迄之通御扶持持方三人扶持被下置候様相願候」という記載だ。⁵²⁾

また、さきに引いた高橋自伝の一節には、「その〔越前の医者某の〕通弁として来たのが城山静一という宇和島の藩士であった」と続く。⁵³⁾ 明治維新後にジャーナリストの草分けとして声望を高めた城山静一は、この時、江戸商人扇屋久次郎の手代の通訳としてサンフランシスコに渡航したとされる。すると、扇屋の手代が“Dr.Sekido”であり、記事③に登場する学徒の“Zeguich”が「せいいち」、つまり城山であったという推理も成り立つ。

徒手空拳の関戸は養子縁組を介して商家との関係を築き、人一倍目端が利くことを武器として先見性のある商談を持ち掛け、資金援助を得ていた可能性が高い。後述するところ

だが、明治維新後に神戸進出を果たした関戸はその才覚にものを言わせて、小野組、三井家、三田九鬼家などから融資を受けた。

ついで、関戸はどのようなルートで渡米し、サンフランシスコで商取引を開始できたのかという謎が浮上するが、そこには少なくとも4人の人物が関わったと推察される。

ひとりとは開港地横浜において福井藩商館の石川屋を差配していた岡倉勘右衛門〔初め寛右衛門、さらに金右衛門、喜右衛門、潜右衛門と称し、晩年勘右衛門に復す〕。もうひとは、やはり横浜にあって石川屋と親密に交流していた外商ユージン・ヴァン・リード。

徳川幕府が列強5カ国と締結した修好通商条約に則って神奈川〔横浜〕が開港する直前の安政6（1859）年晩夏、松平慶永は領内産業の振興を意図して、横浜本町五丁目〔現神奈川県横浜市本町1丁目〕に生糸・羽二重の売込商店を開設する決定を下した。

これにともない、売込商店、つまり福井藩商館の管理運営を担当する人材が必要となる。福井藩はその役目を、算盤勘定に長じ、御納戸役に就いていた岡倉勘右衛門に命じた。復命した岡倉は、福井藩横浜警備方陣屋の普請出役として横浜入りし、同年12月から同店＝石川屋の勘定方を兼務する。そして、安政7年3月に上司の命で脱籍、町人身分に転じたうえで名も金右衛門と改め、名実共に石川屋支配人となる⁵⁴⁾。

かたやヴァン・リードは安政6（1859）年2月に来日したオランダ系アメリカ人で、ウェンリード、ウェンルイド、ウィンリウ、ベンリウ、弁隣などとも称された。オーガスティン・ハード商会に勤務しながら、文久元年11月には『商用会話』なる日英会話読本を出版、横浜と江戸の間を頻繁に往復し、アメリカ公使館や領事館にも我が物顔で出入りする居留地の名物男であった⁵⁵⁾。

じつは石川屋支配人の岡倉は福井藩探索方も務めており、彼にとって内外の事情に通じたヴァン・リードは大切な情報源となっていた。リードからの聞き取りのほかに横浜で入手可能な新聞〔『ジャパン・コマーシャル・ニュース』翻訳版、英人バックワース・ペーリー発行『万国新聞紙』、ジョゼフ・ヒコ・岸田吟香発行『海外新聞（新聞誌）』等〕や『阿蘭陀風説書』が、岡倉を介して江戸藩邸や国許に送られたようだ⁵⁶⁾。

さらに、本多敬義の日記には、慶応4年2月下旬、「石川屋善右衛門」こと岡倉が江戸滞在中の敬義のもとに純金時計、純金鎖、時計台、小望遠鏡、水平器などの舶来品を持ち込んだ旨記載されているが、これらはヴァン・リードの勤めるハード商会を介して調達したのもかもしれない⁵⁷⁾。

ヴァン・リードは開国後日も浅い極東の島国に一攫千金を夢見て渡来した冒険商人^{ベンチャー・ビジネスマン}の典型であり、汽船売買の仲介、諸藩への武器売込み、外米輸入、金銀取引等あらゆる儲け話に手を染め、短期間に巨額の財を成した。

その功名心と営利欲は止む処を知らず、やがて政治的な権力にも手を伸ばし、慶応元(1865)年4月に駐日〔横浜〕ハワイ国総領事を拝命する。翌年1月ホノルルに立ち寄ったヴァン・リードは、ハワイ政府に対して日本との通商条約締結と日本人移民の受入れにつき進言。慶応3年4月には『万国新聞紙』に「アメリカへ学問修業交易又は見物遊歴にとかいなされたき渡海被成度ものは随分御世話可もうすべくそうろう申候 横濱九十三番 ウェンリート」なる広告を掲載している。⁵⁸⁾

ここで想起すべきは、さきに訳出した *The Hawaiian Gazette* の記事。その①に横浜駐在のハワイ領事と“Dr.Sekido”の関係を示唆する「彼(“Dr.Sekido”)は自国品の海外輸出に投資した最初の日本人であり、私にハワイとそこの人々について訊き、自ら視察することを決めた」という一節がある。この「私」は横浜駐在のハワイ総領事、すなわちヴァン・リードであり、“Dr.Sekido”が関戸由義であるとすれば、その渡米はヴァン・リードの周旋を受けてのものと考えてよかろう。その際、関戸とヴァン・リードの仲立ちを、石川屋が務めたということも大いにありうる。

ただし、手塚晃編『幕末 明治 海外渡航者総覧』を眺めても、この時期に留学または視察のために海外渡航した人物約4,200名中に「関戸」姓の者は見当たらない。また、幕末から明治初期にかけて留学以外の目的で、いわゆる旅パスポート券申請を伴う正規ルートによって海外渡航した越前人についても同様である。

じつはハワイ総領事の肩書を持つヴァン・リードは、日本人労働力のハワイ輸出事業を策謀し、慶応3年4月22日より2回にわたって、神奈川奉行所から計350人分もの旅券発行を受けていた。海外渡航の希望者からすると、ヴァン・リードに依頼すれば、煩瑣な申請手続きを経ずとも横浜発のチャーター船に乗り込むことができる。⁵⁹⁾

The Hawaiian Gazette 記事の①と③にある「アイダホ号」は、おそらくアメリカ船籍のフリゲート型帆船である。当時、横浜からハワイへは40日前後、ハワイからサンフランシスコへは10日前後を、航海に要したと推定される。

これを *The Hawaiian Gazette* の記事①に照らして逆算すれば、“Dr.Sekido”一行が横浜を出発したのは慶応4年3月上旬。すでに江戸では討幕を掲げる薩摩藩が市中攪乱を盛んにし、強盗殺人など凶悪な犯罪が横行、新政府軍の東下と江戸総攻撃の噂が拡がるなか、治安の悪化や不景気から商家の閉店や庶民の引越しが相次いでいた。

江戸の人心が動揺するのに乗じて書画骨董を買い叩き、それらの人気が高いハワイやアメリカで売り捌けば、渡航費を差し引いても莫大な利益が懐に転がり込む——江戸藩邸にあった関戸は、そんな情報を石川屋より入手したのであろう。石川屋にかような入れ知恵をしたのは、移民斡旋事業でひと儲けを企むヴァン・リードではなかったか。

そこで関戸由義は長男左一郎の養子先鈴木屋を介して、自分と同様に一攫千金の機会を覗く商人 —— これが扇屋久次郎かもしれない —— と手を組むと、ヴァン・リードの手引きで書画骨董の山をアイダホ号に積み込み、横浜を出航したと考えられる。なお、荷の積み込みと出航準備が完了するまでの間、関戸一行は石川屋を根城にしていた可能性が高い。

かたやヴァン・リードのほうは、狡猾にも関戸一行を「日本国の視察団」に仕立て上げることで、自分に対するハワイ政府の信頼を高めようとした。おそらくは関戸たちに渡航の便宜を図ることと引き換えに、移民斡旋事業の利益を説いて協力を求めたはずだ。

のちに「元年者」と呼ばれる最初のハワイ移民150名が、ヴァン・リードの斡旋でサイオト号に乗り込み、明治新政府の許可を得ないまま横浜からハワイへと旅立つのが、慶応4年4月25日〔西暦1868年5月17日〕のこと。⁶⁰⁾ *The Hawaiian Gazette* の記事①を読む限り、関戸一行はヴァン・リードが密かに期待した「露払い」の役割を見事に果たしている。

関戸一行は *The Hawaiian Gazette* の記事②にあるような幸先の良い成功を収めたあと、記事③のようにアイダホ号でハワイからサンフランシスコに渡った。だが、またまた疑問が生じる。右も左もわからぬ異郷の地で、彼らは一体いかにして商取引に着手できたのだろうか。これについては、ふたりの先着者が手助けしたと考えられる。ひとりには柳本直太郎、もうひとりには佐藤百太郎^{ももたろう}である。

『松平文庫』収録の『新番格以下諸下代迄』に記された経歴によると、柳本直太郎は下士柳本久兵衛の長男に生まれ、小坊主・表坊主を務めた後、その学才を認められて江戸就学を命ぜられ、蕃書調所を経て横浜で英語修業に励む。慶応2年2月福澤諭吉が主宰する慶応義塾に入塾、慶応3年4月にアメリカへ留学した。⁶¹⁾ *The Hawaiian Gazette* の記事①に「学徒であり通訳でもある“Zangimoto”」、同②に「Yangimotu」と記載された人物が、ことによると柳本直太郎ではなかったか。

もしそうだとすると、福井藩営商館である石川屋か、サンフランシスコに邸宅を持つヴァン・リードのどちらかが、あるいはその両方が、ハワイ経由で関戸の渡米することを前以て柳本に通知し、現地で協力するように依頼したということなろう。

後者の佐藤百太郎は当時わずか13歳であったが、慶応3年に私費を以て単身アメリカに留学、最新の商取引の知識や技能を修得しようとサンフランシスコの雑貨商店に勤務していた。なんともし早熟な少年であるが、それもそのはず、百太郎の父は佐倉順天堂の創始者で当時屈指の蘭方医佐藤泰然^{たいぜん}の養子となり、第二代堂主として順天堂病院の初代院長を務めた佐藤尚中^{たかなか}なのだから。百太郎は佐倉藩校の成徳館を経て、留学前には横浜在住のアメリカ人宣教医ジェームズ・カーティス・ヘボンの塾〔現明治学院高校の前身〕でヘボン夫

人クララより入念な英語指導を受けていた。⁶²⁾

高橋の回想によると、佐藤は「日本茶や日本の雑貨を売るアメリカ人の店で働いていた」という。⁶³⁾ また、『米国日系人百年史』にも「わが在来日本人活躍の端緒は、桑港を振り出しに展開されて居る。初期時代の在住日本人の中に米人雑貨商店に勤務していた佐藤百太郎が当時渡米しても西も東も分からない新米者に対し、種々な便宜を与え、働口の周旋をしており……」⁶⁴⁾ とある。おそらく関戸も骨董品の販売経路を開拓するに際して、佐藤百太郎の支援と協力を仰いだはずである。

(2) 横浜を拠点とした獵官運動について

以上が関戸由義のサンフランシスコ渡航について、新たに入手した史料に依りながら立て直した推論である。「事績考」では掴めなかった関戸渡米の実相に、多少なりとも明確な輪郭を与えることができたのではなかろうか。

けれども、ここまでの推論にはじつのところ重大な矛盾が含まれている。それは関戸由義が横浜を発ち、ハワイを経由してサンフランシスコに上陸、同地で日本骨董品の販売に着手して巨富を得たとされる時期、あろうことか由義本人が日本に居た形跡のあることだ。

さきに紹介したが、本多敬義の日記には関戸由義と思しき「良平」なる家来がしばしば登場、慶応4年10月8日には「今朝加藤へ良平遣シ口上ニ而相頼」という記載も見られる。仮に関戸由義が本多家の奉公人であったならば、非公式の商用渡航など不可能であろう。

また、たとえ関戸由義が本多家奉公人の「良平」とは別人であったとしても、明治維新前夜に海外渡航した可能性はやはり低い。けだし、前記した『神戸市史本編各説』には「明治元年8月に開設された神戸洋学伝習所は関戸由義の建議にもとづく」という伝聞の記載も見られるからだ。⁶⁵⁾

また、明治2年初頭に関戸は「横濱本町四丁目小西屋伝蔵厄介 関戸良平」として、「同弁天通五丁目門屋幸之助」と連名で、新政府下での貨幣制度の在り方に関する建白書『貨幣之儀ニ付奉申上候書付』(以下、『貨幣之儀』)⁶⁶⁾を民部省に提出している。

これらはいずれも「事績考」で紹介したが、渡米時期が特定できなかったために、「サンフランシスコから帰国後」のこととしてしまった。⁶⁷⁾ だが、さきに関戸一行の横浜出航時期を慶応4年3月頃とし、その根拠として「6月15日アイダホ号でサンフランシスコに到着 Dr.Sekido, Yeguich Yangimotu, Ogata Tegero」という *The Hawaiian Gazette* 記事を紹介した。この“Dr.Sekido”を関戸由義とすれば、驚異的な短期間で積荷の書画骨董品を全て売り捌き、莫大な利益を手に入れた文字どおり「トンボ返り」で帰国したことになる。

サンフランシスコから横浜までの航海日数をハワイ経由で40日前後とすれば、神戸洋学

伝習所の開設は明治元年8月なので、それに関する建言は少なくとも数カ月以前に為されていなければならない。当然、この日程を前提にサンフランシスコ滞在日数を算出すれば、せいぜい数日程度となり、この間に莫大な儲けを生む商取引を異国の地で行うのは「不可能」と言い切れないまでも、まことに以て現実性に乏しい。

赤松「先覚」には「[サンフランシスコより] 帰るときには鉄砲を買込んできたらしい。だが、明治三年になっていたので……」という典拠不明の記載もあるが、おそらくこれは『神戸市史本編各説』にある「明治3年6月に関戸が兵庫県外務局勸業課少属として貿易歩合金の事務を担当した」旨の記載から逆算したものと推定される。⁶⁸⁾

関戸渡米に関する公式記録がないことから、サンフランシスコ滞在の期間は特定できないが、それなりの金銭的利益に加えて、帰国後の立身に活かせる知識の修得には、どれほど短く見積もっても数カ月の滞在は必要と考えられる。関戸由義が上記時期にサンフランシスコに在ったならば、神戸洋学伝習所開設の建議は甚だ難しい。

また、「関戸良平」の名で行った『貨幣之儀』提出についても同様である。「関戸良平」こと関戸由義が「厄介」となった小西屋伝蔵は、横浜商人名鑑の類いを眺めると、明治元年9月～2年3月には「横浜本町5丁目蚕糸商」、明治3年5月には「南仲町5丁目両替商」と記載されている。「厄介」とは「他家に寄宿する居候や食客」の外に「家長の傍系親族で扶養されている者」を意味することから、小西屋と関戸が何らかの親戚関係にあったとも考えられる。⁶⁹⁾

「小西屋伝蔵厄介」という身分で関戸が提出した『貨幣之儀』は、明治新政府が慶応4年5月に発行した金札という不換紙幣の不備による商取引の混乱を指摘し、その是正方法[貨幣を国内通用と国際通用に分化し、前者については10年を期して正貨に換え、その際に利子を付与することを条件に紙幣流通を図り、これを一種の国債とすれば、年月の経過とともに紙幣はその価値を増す]⁷⁰⁾を提示したものである。

明治元年12月に金札の時価通用を公認し、商取引の混乱を加速させた新政府が、居留地貿易に従事する日本人商人の轟々たる批判を受けて金札兌換布告を発するのは明治2年5月のことであり、さすれば『貨幣之儀』の提出はどんなに遅くとも明治2年3月頃までには行われていたはずである。

けだし『貨幣之儀』には、外国人相手の商取引に政府発行の金札が通用しないという問題に苦慮する横浜商人の実情[諸制改革にもかかわらず、貨幣だけが旧態依然である結果、金札の価値が日々高下を繰り返す、挙句に賭博的な相場投機を招来して、真っ当な商取引の実施に大きな障害となっている]⁷¹⁾も綴られているからだ。

よって、その作成の前提となる経験を積むには開港地横浜での滞在が一定期間必要とな

ろう。さすれば、関戸由義が慶応4年3月に日本を出立、4月末よりサンフランシスコで書画骨董販売を開始したとすると、新政府の通貨政策下で居留地貿易を実体験すべく横浜に戻るには、極端な短期滞在で帰国の途に就かねばならず、現実性においてやはり疑問が残る。

付言すれば、関戸と連名で『貨幣之儀』を作成した「弁天通五丁目門屋幸之助」は、天保5(1834)年8月15日に生まれ、慶応4年5月横浜太田町に呉服店「門屋」を開いた新興商人である。

この人物はしかし、本来が商人ではない。本名は伊東哲之助信保、「門屋」開店前は幕府出仕の経験もある。じつは彼の実父は將軍主治医となり、江戸に種痘所を創設した蘭方医の伊東玄朴^{げんぼく}。その次男で、幸之助の弟繁次郎も同じく横浜で「門屋」を名乗り、横浜商人として活躍したあとは、外務書記官に転じてワシントンにも駐在した。⁷²⁾

のちに三井物産総帥となる益田孝は、幕府瓦解後しばらく横浜で商業活動に従事していたが、玄朴父子について「下谷御徒歩町に伊東玄朴と云ふ蘭法醫の豪傑があった(中略)山師ではあったが、千代田城の大奥に始めて蘭法の醫術を入れたのは全く此の伊東玄朴である。此の醫者の息子が二人、維新後横濱に来て商買をして居った。兄は門屋幸助^{ママ}、弟は浅野と云ふたが、私は其の相談相手になって居った」と述べている。⁷³⁾

「医師でありながら、財に長じた数量的な人間で、理路不徹底な処へは刃を向けられても一文の金も出さぬ⁷⁴⁾」と評された玄朴は、現実的合理主義者でもあった。ゆえに、その息子ふたりが、時代の転換に際して、家業の医を継がず横浜に出て商人となったことは、ある意味、驚くにあたらない。

関戸由義が門屋幸之助の知己となった経緯^{いきさつ}は定かでない。幕末期の福井藩は、松平慶永の指導下、「他国修行」と称して、藩士の子弟に各地の著名私塾への遊学を奨励していた。慶永の侍医であり、福井藩における種痘の普及に力を尽くした半井玄^{なからいげん}(元)沖^{ちゅう}は、伊東玄朴⁷⁵⁾の門下生である。ただし、伊東玄朴の406名の門弟名簿中に「関戸」姓の者はいない。⁷⁶⁾

他方、慶応年間の横浜日本人街の区画地図を眺めると、福井藩商館の石川屋、関戸寄留先の小西屋、伊東玄朴の長男が営む門屋、さらには佐藤百太郎の祖父で順天堂創始者の佐藤泰然の隠居宅は、南仲町通と弁天通を挟んで背中合わせか、むこう隣りの位置にあったことが確認できる。⁷⁷⁾この位置関係と福井藩での玄沖の活躍等を考え合わせると、石川屋、小西屋、門屋の間に「何らの交渉もなかった」と考えるほうがむしろ不自然な気はする。

『新番格以下 増補雜輩』採録「関戸良平」にある「明治二巳十二月四日民部省通商少佑申付候事」という履歴には、この『貨幣之儀』が与って大いに力のあったはずだ。そもそも「通商少佑」の任命権を持つのが通商権大佑であり、この時期の担当は肥前佐賀藩の

俊英官僚大隈重信。そのためであろうか、『貨幣ノ儀』原本は現在、早稲田大学図書館所蔵『大隈文書』に収められている。

民部省への『貨幣之儀』提出は、公式記録のない神戸洋学伝習所開設の建議と併せて、新政府内に座を得るための獵官運動と捉えて差支えないだろう。なお、関戸由義が拝命した「少佑」は、正八位に該当する判任官〔現在の国家第二種公務員に該当するノンキャリアの下級官吏職〕である。

さて、改めて関戸由義が同時期に横浜とサンフランシスコという異空間で活動していた謎について考えねばならない。重複を恐れずに言う。関戸由義がすこぶる短期のうちに横浜とサンフランシスコを往来するのは「全く不可能」とは断定できないが、そうした行為の現実性を考えると、「甚だ不可解」というにやぶさかない、と。

だが、一方で *Hawaiian Gazette* 記事が関戸の渡米を伝え、他方で本人署名の建白書が関戸の獵官活動を伝える。果たして関戸由義はいずれに在ったのか。サンフランシスコか、それとも横浜か —— 残された史料の信憑性を勘案すれば、関戸由義は横浜に在って、建白による獵官活動を行っていた、とするのが妥当であろう。

それでは、関戸由義がサンフランシスコに渡航したというのは虚報なのか。否、神戸進出後の事績に照らせば、関戸はサンフランシスコで将来の活動資金と先端知識を獲得したと考えるよりほかない。*Hawaiian Gazette* 記事に登場した“Dr.Sekido”は、我らが関戸と見做して間違いなかろう。ただし、「関戸良平由義」とは別の関戸である。このもうひとりの関戸こそが、「関戸一平慶治」ではなかったか。

すでに述べたように、関戸慶治は関戸由義に極めて近い血縁者、おそらくは兄弟であったと思われる。それを前提に明治維新前後における商用渡米と獵官運動の関連を推理してみれば ——

関戸由義と関戸慶治は幕府瓦解にともなう新たな社会秩序の到来を予感し、「文明の窓口」として重要性を帯びる開港地を基盤に事業を行う計画を立てた。その際、実務能力に長けた由義は官側に身を置き、商才に恵まれた慶治は民側にあって商取引を担当、互いに密接な連携を保ちながら、新時代において関戸一族の地位を高めるという申し合せを行った。そして、由義は横浜の小西屋伝蔵のもとで獵官活動を行って民部省通商少佑を拝命、慶治は石川屋とヴァン・リードの手引きでサンフランシスコに渡り、柳本直太郎や佐藤百太郎の支援を受けながら書画骨董売込商として事業原資を蓄えた ——

という構図を描くことができよう。

神戸への進出も、ふたりにとっては予定の行動だったはずだ。すでに安政6年6月の開港に先立って徳川幕府の手で外国人居留地並びに日本商人街の造成が入念に進められ、江

戸を中心とする関東甲信越地方より進出した有力商人が地歩を固めていた横浜では、関戸一族の資力を以て獲得できる利益は多寡が知れていた。

これに対して、慶応3年12月幕府終焉の直前に港を開いた神戸では、北風家、生島家、嘉納家といった兵庫や灘の地生えの豪商たちが伝来の家業に精を出しているだけにすぎない。また、神戸は横浜と比較すると、海外事情に通じた人材も少なかったことから、渡航経験者は何かと重宝される可能性が高かった。要するに、時代の過渡期に徒手空拳で一攫千金を狙う関戸一族にとって、新興の神戸は老舗の横浜に比して、ハンディが少なくアドバンテージが多い開港地だったのである。

なお、通商少佑として新政府の末端に席を得た関戸由義の働きについては、新潟知県事の平松時厚〔公家出身〕より通商少輔の伊藤俊輔〔のちの博文〕宛の明治3年9月25日付書簡に「關戸通商少佑」の名前が見える。英国書記官の新潟県訪問に際して、民部省より派遣されてきた関戸ほか1名の通商少佑が、為替商社に関する書類授受に齟齬⁷⁸⁾を来したとの内容である。

かたやサンフランシスコに渡った関戸慶治の消息は、「骨董販売で莫大な儲けを得た」という伝聞のほかは不明。帰国時期については「明治3年」との説もあるが、それを裏打ちする史料は見当たらない。ただし、「事績考」にも紹介したが、この頃に関戸由義が鯉川筋の西沿道一帯の土地を買い取り、自邸敷地内に木造二階建て洋風校舎と運動場を備えた関山小学校を創設したと伝えられる⁷⁹⁾。

しかし、由義が通商少佑免官の辞令を受けるのは明治3年12月25日のことであり、それ以前の在任期間中に神戸で土地を入手し、本格的な小学校を邸内に開くことなど困難である。さすれば、これは事業資金を携えてサンフランシスコより帰国した関戸慶治の事業と考えれば辻褄が合う。

地租改正を受けて明治10年に作成された『摂津国八部郡神戸港下山手通三丁目地図(朱字ニテ)第三拾四號』および『攝津国八部郡神戸港下山手通四丁目地図(朱字ニテ)第三拾五號』を眺めると、たしかに前者では北長狭三丁目の広大な地所に「四十四 宅千三百九十一坪壹夕 関戸慶治」・「三十 宅三百四坪二合壹夕 セキド慶治」の記載を、また後者でも北長狭四丁目に「十四 宅二百七十三坪二合九夕 関戸慶治」・「十九 宅 四十九坪九合八夕 関戸慶治」の記載を、それぞれ確認できる⁸⁰⁾。思えば、いまだ寺子屋が幅を利かす時代に、校庭付きの洋風校舎を自邸敷地内に建て、授業科目に英語を置くというのは、それを実見した人間だからこそできたのではなかろうか。

関戸由義の神戸入りは、通商少佑免官以降のこと。兵庫津の豪商北風家の大番頭喜多文七郎の日記にも「明治四年三月廿四日 晴 曇 四字前 県外務局 関戸良平様 少属

右出頭二而」⁸¹⁾とある。兵庫県外務局勸業課少属を拝命した関戸由義が東京を出発する直前の3月21日、次男の春雄が誕生する。

こうして明治4年春、関戸由義と関戸慶治はいまだ市街整備も途上にある西の開港地神戸で合流、鯉川筋西側に確保した地所に建てた邸宅を拠点として、官民相異なる立場を巧妙に利用した循環商法型の同族事業^{ファミリービジネス}に乗り出していく。

以上、神戸進出に至るまでの関戸由義・慶治の動向について、現時点で筆者の得た知見をもとに組み立てが可能な推論を示してみた。

IV ふたりの関戸を取り巻く人物群

それでは、『宗七伝』、『事績考』、そして本稿のこれまでの分析との重複を恐れず、関戸由義・慶治が同時代の如何なる人物たちと、どのような結びつきを持ったのかについて考えたい。

「人は環境の子である」という。「環境」とは何か。それは詰まるところ、他人との交わりであろう。さすれば、いかなる他人と交流したのか、その在り方はどのようなものだったのかということを迎れば、その人間の実体を完全に解明できないまでも、ある程度まで明確な輪郭を描けるはずだ。

(1) 越前福井藩の人びと

関戸由義とその一族の出身地である福井藩の人びとについては、旧藩主松平慶永、家老本多敬義とその子貴一、石川屋こと岡倉覚右衛門、柳本直太郎との関係をすでに紹介している。そのうちで文書記録によって裏付けが可能なのは、春嶽の号で知られる松平慶永との交流である。

これについてはさきに、慶永の側近を務めた本多敬義が、明治維新後に慶永と対面する機会を関戸に与えたのではないかと推理した。その際、『御用日記』と『礫川文藻』坐右日簿の記載を一部紹介したが、両文書の史的な価値も考慮したうえで、改めて関戸由義が登場する箇所⁸²⁾を列記しておく。

- ① 『御用日記』明治五壬申歳正月ヨリ十二月迄
 - ・「明治五年正月二十八日
 - 一 唐筆 一箱
 - 一 賀茂川千鳥 一箱 関戸良平
 - 右献上致候事」
- ② 『礫川文藻』坐右日簿

- ・「明治十一年一月四日 微雨 1金
神戸関戸波釣月「本多修理」へ端書郵便祝詞差出」
- ・「同年二月十四日 好晴 2木
関戸由義・波釣月・高村高・浅見岱輔へ以直書海苔一箱宛ヲ送ル、右ハ大野規周家来豊島竹藏帰坂ニ付同人へ托ス」
- ③『礫川文藻』第二十三号
 - ・「明治十二年九月卅(三十)日 晴雨大風八十度半 5火
関戸由義部長局へ罷出」
- ④『礫川文藻』坐右日簿
 - ・「明治十二年十月二日 小雨六十九度 1木
関戸由義相招、吸物・酒肴・晚餐ヲ出ス、村田氏寿接伴トシテ罷出、同席談話ス」
 - ・「同年十一月廿五日 陰五十一度 4火
博多帯壺筋・江戸川製紙場製半切三メ・角干海苔ブリッキ入忒箱・羽織帯壺筋・錦絵数枚関戸由義へ過日出京之節之呈上物之挨拶トシテ、右之品以直書送ル」
- ⑤『礫川文藻』坐右日簿
 - ・「明治十三年十月十八日 半晴六十七度半 3月
関戸菓子二箱ヲ呈ス、福澤諭吉へ錦糸煙壺箱・雲丹三合、和田義郎へ雲丹三合、康莊之義ニ付過日配心之挨拶」
 - ・「同年十月廿八日 陰六十五度 4木
神戸関戸由義ヨリ、松茸壺籠ヲ呈ス」
 - ・「同年十一月一日 晴五十七度 1月
関戸由義今般上京ニ付、交肴壺籠ヲ呈ス」
 - ・「同年十一月十二日 陰雨五十三度 2金
関戸由義過日呈上物ノ挨拶トシテ、生菓子一箱・鴨壺羽武田正規ヨリ以テ書状贈之」
 - ・「同年十一月十六日 晴五十七度 3火
関戸由義来邸面会ス、牛肉罐詰二個ヲ呈ス」

いずれも関戸由義から松平慶永への進物贈呈と御機嫌伺い、そして慶永から由義への返礼に類するものであり、その時々にはいかなる動機が働いていたのかについては、文面から読み取ることができない。

最初の面会と目される①「明治五年正月二十八日」は、由義が兵庫県外務局勸業課少属を免官〔同年2月1日〕になる直前である。③「明治十二年九月三十日」には、由義が華族会館館長局に慶永を訪ねているが、その目的は定かでなく、たんなる御機嫌伺いかもしれない。その2日後の④「明治十二年十月二日」には、由義が松平邸の晚餐に招待されている。この年の6月29日、関戸恵津が死去したことから、本多敬義・貴一父子への対応を慶永に相談した可能性もあろう。最後に、⑤「明治十三年十一月一日」から「同月十六日」

の接触は、後述する諏訪山温泉地の払下げ問題をめぐって関係省庁への働き掛けを慶永に依頼したのか、小柳津精二が本多家に迎えられて同家の安泰が叶ったことを報告したのか、あるいはその両方なのか……。これ以降、由義が慶永を訪ねた記録は残されていない。

なお、⑤「明治十三年十一月一日」の由義の上京については、折田年秀の日記にも記載が見られる。明治天皇をはじめとして松方正義、渋澤栄一、高崎正風、山岡鉄舟、勝海舟、伊東巳代治等を訪ねようと神戸より横浜にむかう定期船に乗り込んだ折田は、偶然にも由義と同室になった。⁸³⁾

「明治十三年十月二十六日、晴、火、舊九月廿三日

一、午後三時より社務所人数ヲ召ヒ、留守中之次第、篤与申附ケ、(中略)五時三十分高砂丸ニ乗船す(中略)船中にてハ關戸由義氏乗込、同部屋なり、六時二十分ニ発船、風氣平穩なり、(中略)

十月二十八日、晴、木、舊九月廿五日、

一、荷物引渡上陸す、關戸氏も同林[林庄五郎のこと]氏江誘引す、(中略)

一、午前九時三十分之汽車にて上京す、新橋停車場にて關戸ニ別袖(中略)」

折田と東京新橋駅で別れた由義は手土産として持参した松茸一籠を松平邸に送った後、東京の何処かに滞在し、11月16日に慶永と面会した。なお、12月29日には関戸慶治こと「關戸一平」が折田の滞在する林庄五郎宅を訪ね、翌日の早朝ふたりで古道具屋に足を運んだことは、すでに紹介したとおりである。

松平慶永は家臣の才幹を重んじ、上士だけでなく下士にも文武医術修行の奨励と藩費支給による遊学の機会を与えた。明治維新後も福井藩は、藩士の子弟に藩費・私費を問わず他国への遊学を奨励し、帰藩した後は家格に拠らず実力を以て役職に就き、報酬を確保すべしとの方針を堅持した。ために、福井藩では、新たな時代に立身出世の夢を託そうとした下士の勉学熱と上昇志向が一層高まったのである。⁸⁴⁾

この点を考慮に入れると、関戸由義は慶永の眼に「好ましい存在」と映ったに相違ない。けだし、家格ではなく己の才幹によって成功を掴む人間の輩出は、慶永が推進した教育改革の成功も意味していたからだ。『御用日記』と『礫川文藻』に記された由義との交流をつうじて、慶永は藩主として行った自らの政策が正しかったことを、改めて実感したのではなかろうか。

慶永に由義を紹介したと推察される本多敬義とその息子貴一、そして関戸慶治の渡米に力を貸したと考えられる石川屋こと岡倉覚右衛門 —— 由義・慶治と彼らとの関係については、その内実を裏付ける文書記録が見当たらず、さきに行った状況証拠にもとづく推

論に止めるよりほかない。

The Hawaiian Gazette 記事に登場した“Zangimoto”, “Yangimotu”の可能性もある柳本直太郎についても同様であるが、彼は明治10~17年まで兵庫県属〔兵庫県御用掛として赴任, 兵庫県少書記官を経て, 兵庫県大書記官を拝命〕を務めたことから, 由義・慶治との間には浅からぬ関係があったはずだ。

明治元年10月にアメリカから帰国した柳本は, 明治2年9月横浜で英語修行に励んだ後, 明治3年3~7月まで大学南校少助教を務めた。華頂宮博経親王のアメリカ留学に際して御世話掛として随行, 帰国後の明治5年7月文部少教授として大学南校に復帰し, フルベッキや元福井藩御雇教師のウィリアム・グリフィスと共に, 第I~Ⅲ部に属する学生の教育にあたる。⁸⁵⁾南校在勤中には本多貴一を指導する機会もあったのではないかと推察される。

明治10年に兵庫県御用掛を拝命して神戸入りした柳本は, 同郷の本多敬義・貴一父子ならびに由義・慶治と親しく交際したであろう。ために, 明治13年, 小柳津精二が本多家に婿入りする件については, 本多家のために何らかの力を貸した可能性も指摘できる。

すでに紹介したところであるが, 柳本は福澤諭吉の門下であったことから, 精二の兄で同門の小柳津要人とは知らぬ仲ではなかった。関戸由義も, 本多家との問題をめぐって, 柳本に支援を求めたことは想像に難くない。あるいは, 柳本が本多家と小柳津家の仲介役を務めたのかもしれない。

関戸由義と福澤諭吉の交際についてはこのあとにふれるが, 明治13年1月に福澤は日本最初の知識人や実業家の社交クラブである交詢社を結成する。同社員を職業別に眺めると, 政府や県・郡の官吏, 教員・医師・新聞記者が約4割を占め, ほかに銀行役員などを兼ねる商業者, 中央や地方の知識人・名望家なども含まれる。

その設立にさきだつ明治12(1879)年12月19日付の福澤より小幡篤二郎宛書簡には, 「神戸の関戸由義も入社^{はず}の筈に御座候」の一節がある。⁸⁶⁾明治14年8月3日には, 兵庫・神戸およびその近傍に居住する交詢社員54名が鹿嶋秀麿・箕浦勝人を総代として兵庫支社の設置申請書を常議員会に提出, 同11日に認可を受けた。そこには由義のほかに, 森岡昌純, 安藤行敬, 村野山人, 九鬼隆義, 白洲退蔵, 北風正造, 藤田積中, 神田兵右衛門等の兵神名士が名を連ねている。⁸⁷⁾

(2) 洋学者たちとの繋がり

関戸由義・慶治は洋学者や洋学生とも浅からぬ縁を持つ。先述の如く, 由義は明治2年に伊東玄朴の長門門屋幸之助との連名で, 新政権下での通貨制度を論じた『貨幣之儀』を民部省に提出している。

また、伝聞の域を出ないが、由義の建議にもとづき、明治元年8月に神戸洋学伝習所〔神戸洋学校〕が開設された。その際、同所教授には箕作貞一郎こと麟祥^{りんしょう}が就任、その後釜となったのは福澤諭吉と同じく適塾に学んだ福井藩士の伊藤慎蔵⁸⁸⁾であった。

こうした洋学者たちとの繋がり^{コネクション}はいかにして築かれたのだろうか。この問いについても、明確な解答を与えてくれる史料は見当たらない。そもそも洋学とは、江戸期の海禁体制下でオランダを介して日本に入った西洋の学術・文化・技術、すなわち蘭学に根源を持つ。就中その核となったのは兵学と医学であった。つまりは、オランダ語を介して医学を学んだ蘭方医と砲術を会得した兵学者が洋学の先駆となる。

既述のように、彼らの中には私塾を開き、全国各地から募った門弟に西洋の医学や兵学を教授する人びともいた。やがて、幕府の対外政策が海禁から開国に転じると、洋学修得の主要媒介も従来のオランダ語から英語やフランス語に移行し、医学・兵学だけでなく人文社会科学分野に対する関心も高まっていく。

さきにふれたが、福井藩では松平慶永が上士・下士を問わず、他国の優秀な師の指導を仰ぎ、そこで得た知識や情報を藩に還元することを奨励した。実際、伊東玄朴の象先堂、緒方洪庵の適塾、佐久間象山の象山塾、大村益次郎の鳩居堂塾、佐藤泰然の佐倉順天堂、大槻玄澤の芝蘭堂、福澤諭吉の英学塾〔慶應義塾⁸⁹⁾〕等に多くの福井藩士が学んでいる。

記録に残る他国修行者中に関戸由義（良平）・関戸慶治（一平）の名は見当たらないが、全くの私費によって藩外遊学をしたり、洋学を修めて帰藩した者の指導を仰いだりした可能性は否定できない。とくに関戸慶治と思しき人物が *The Hawaiian Gazette* で “Dr. Sekido” と紹介されていることや、高橋是清の回想にある「越前医師某」がその “Dr. Sekido” と同じ人物を指したものと考えられること、さらには関戸由義が伊東玄朴の長男と連名で建白書を提出したことには、やはり留意しておくべきであろう。

さて、洋学者の中でも唯一、関戸由義との関係を文書記録に残しているのは福澤諭吉である。ふたりの親密さは『神戸市史本編各説』に「嘗て福澤諭吉に従ひ米国に遊び泰西の事情に通曉せる関戸由義」という誤説も載るほどであった。

この両者が知己となったきっかけを知る手掛かりは現時点で何ひとつない。筆者は、緒方洪庵主催の適塾で両者が出会ったか、福澤自身が主催する英学塾〔のちの慶應義塾〕に由義が入門したのかとも考えたが、いずれの塾生名簿にも「関戸」姓の人物は見当たらなかった。ただし、適塾については、その門弟数が膨大であり、かつ入塾に際して名簿に姓名を記さなかった者も相当な数に上ることから、その可能性を否定し去ることはできない⁹⁰⁾。

仮に明治維新前に適塾か福澤塾で邂逅した可能性を除いても、由義と福澤が明治5年11月以前に知己となっていたことは確かである。けだし、福澤が島津復生に宛てた明治5年

11月7日付書簡に「当秋同処〔神戸のこと〕通行之節、私知人関戸良平と申人に頼ミ、神戸之地所買入之為メ金子貳千六百兩預ケ置、其後楠社〔湊川神社のこと〕前ニ払地三千四百兩之もの有之、右地面買入ニ付、先之二千六百ト、米代之内八百足し、関戸氏に相渡ス手都合なり」と記されているからだ。⁹¹⁾

当時、旧主である中津藩奥平家の資産管理を任されていた福澤は、土地取引による増資をもくろみ、「知人関戸良平」に「神戸之地所買入」の仲介を依頼した。また、明治6～9年にかけての福澤家帳簿には「神戸地面」の記載があり、福澤自身も神戸に不動産を所有していたことがわかる。実際、前掲の『撰津国八部郡神戸港下山手通三丁目地図』には、関戸慶治宅地所より遠からぬ鯉川筋東側の下山手通三丁目の畑地に「十 畠 十七三ト 福澤諭吉」・「十一 畠 八ト 福澤諭吉」・「十四 畠 四セ六ト 福澤諭吉」・「十五 畠 五七十六ト 福澤諭吉」・「十八 畠 五畝十八ト 福澤諭吉」・「十九 畠 六畝十一ト 福澤諭吉」の記載ある。⁹²⁾

明治10年のこと、時の兵庫県令であった森岡昌純が開港10周年を迎える神戸に相応しい商業教育施設の必要を唱え、神戸商業講習所の創設にむけての支援を福澤に依頼する。これに応じて福澤は、慶應義塾より甲斐織衛・飯田平作・藤井清を派遣し、講習所の校則・教則の制定にあたらせた。講習所の開設に際して最も肝心な校舎は、由義が自邸地所内にある木造瓦葺ペンキ塗り二階建ての洋館を無償で提供している。⁹³⁾

なお、講習所の授業では、商業、物産、経済、法律、地理、歴史、和漢文、算術代数幾何、図画等のほかに、当時最新の商業知識「簿記」も教えられたが、そこに福澤の影響を覗うことができる。けだし、我が国簿記の嚆矢は、明治6（1873）年6月、福澤による日本初の簿記書『帳合之法』初編刊行に求められるからだ。「商売を貴き学問と思わざりし心得違（い）」を正そうと、福澤は *Bryant & Stratton's Common School Book-keeping*, 1871の翻訳を下敷きに『帳合之法』を著したが、従来商家の帳簿記入は「帳合」と称されていたことから、それを“Book-keeping”の訳語に充てたという。⁹⁴⁾

また、福澤は幕末日本を朝鮮に投影し、同国の近代化をめざす開化派に物心両面の支援を与えていた。明治14年、慶應義塾に2名の朝鮮人留学生を受け入れ、翌15年暮れには高弟の牛場卓蔵、井上角五郎、高橋正信を朝鮮視察に派遣している。牛場一行は途中神戸に上陸したが、その折に本山彦一や鹿島秀麿といった神戸市在住の福澤門下生と共に三人を接待にしたのが由義であった。⁹⁵⁾

それでは改めて、このように親密な間柄にある関戸由義と福澤諭吉はいつ、どのようなかたちで知己となったのか。さしあたり3つの場面を想定できる。

まず、明治2年1月1日横浜新浜町に輸入書籍店の丸屋を開業した早矢仕有的を介して

福澤の知遇を得たというもの。江戸で医師として名を馳せ、蘭学や英学にも造詣の深い早矢仕が福澤の門弟となったのは慶応3年のことである。丸屋開業当時、由義は「横濱本町四丁目小西屋伝蔵厄介」となり、新政府への建白による獵官運動を行っていた。学識高い早矢仕に教を乞ううち、その師福澤の知遇に与ったと考えられる。

ただし、横浜開港資料館架蔵『早矢仕有的関係資料（文書61）』採録の曾我直嗣編『故人交友帖』第1～15冊（釈文）曾我有壬所蔵ならびに『名刺帖』丸善株式会社所蔵のいずれにも、「関戸」姓の人物の書簡や名刺は採録されていない。⁹⁶⁾

つぎに、ハワイにおいて関戸慶治と思しき“Dr.Sekido”に合流した“Yangimotou”が福井藩士の柳本直太郎だとすれば、彼がアメリカから帰国した後に、関戸と福澤を引き合わせた可能性もある。柳本が慶応義塾に入ったのは慶応2年2月、そして翌3年4月アメリカに留学している。ハワイで関戸慶治らしき人物の通訳を務めたのがこの人物だとすると、渡米から1カ年を経た頃のこととなる。

なお、さきに述べたが、柳本は明治10～17年まで兵庫県官を務め、由義・慶治とも親しく交際している。もしもその間に柳本か慶治かのいずれかが、あるいは双方が、「維新の頃にアメリカで行動を共にしたことがある」と周囲に語ったとすれば、それが巡り巡って『神戸市史 本編各説』にある「嘗て福澤諭吉に従ひ米國に遊び泰西の事情に通曉せる関戸由義」という誤った一節に変じたのかもしれない。

最後に、由義が明治2年12月から翌3年12月まで民部大蔵省通商少佐の職にあったとき、福井藩士の久保村純介の紹介で福澤と知己になった可能性を指摘できる。『慶應義塾入社帳第一巻』によると、久保村は元治元年6月24日に福澤の英語塾に入塾している。⁹⁷⁾ただし、『松平文庫』収録『子弟輩』にある久保村の履歴に照らすと、福澤門下にあったのは1カ月程度にすぎない。⁹⁸⁾そんな久保村を福澤がはたして記憶していたかどうかは、いささか疑問である。

にもかかわらず、関戸と福澤を繋いだ人物として久保村をあげるのは、石河幹明『福澤諭吉傳』第4巻に収められた「米國で日本人を救う」と題する逸話による。^{エピソード}これは福澤が幕府軍艦受取委員の翻訳方として2度目の渡米を果たした慶応3年正月23日から同年6月26日までに起こった事件を紹介したものだ。⁹⁹⁾

「慶應三年先生再度の渡米のとき、ボストンの街上で不意に『福澤先生』と呼掛けられたので驚いて顧れば、見るからに憐れな風體の一日本人が追懸けて来るので、仔細を問へば、此者は越前福井の藩士で、時勢に感じ竊かに日本を失踪して渡米を企て、貨物に紛れて首尾よく外國船に忍込んだが、途中、洋上で発見され、種々尋問されたが言語も通じないので、危く生きながら洋中に投げられようとした、^{たまた}偶ま船中に居た基督教の牧師の情けにより命を助けられ、ボ

ストーンに連れ来られ、該宣教師の世話で殆ど乞食同然の下男奉公をして辛くも日々を過してゐるが、これでは到底目的を達すること思ひも寄らず、どうしようかと思案に暮れてゐたところ、今度日本の使節が當地へ来たと聞き、表面に名乗り出ては日本へ連れ戻されて殺されるかも知れず、竊かに面會し度くも先方の名を知らず、多分一行の中には日本で名高い福澤先生が居られるに相違ないと思ひ、其先生にどうかして會はうと苦心してゐたところへ、丁度日本人が通つたので思はず知らず『福澤先生』と呼びかけたのであるが、それが誠の先生であったとは有難い次第であると、細まゞと身の上話をしたので、先生はたゞ不思議な人間に會ふものであると一時は驚かれたが、其身の上を聞いて氣の毒に思ひ、所持の金子を分け與へられ、これを旅費として速かに歸國するやうにと懇々と話し聞かせ、其儘別れて歸國の後、内々此事を越前藩に通じ且つ無事に本國へ迎へ取るやうにと勸告したので、藩主松平春嶽は大いに先生の義侠に感じ、先生がボストンに於て恵まれた金子を倍額にして返却いたし度いと申込んで来たが、先生は脱走人を助けたのであるから其舊主人から金を受取る理由はないと、一向取合はれなかつた。此脱走人は其後歸朝して開拓使に仕へ權判官となつた久保村純介といふ人であつた」

『子弟輩』採録の久保村の履歴には、「英吉利江罷越候節達捨ニ致出奔 但右ニ付卯二月十五日兄勝次郎伺之上指控」とある。また『福井藩士履歴2 お〜く』収録「久保村勝次郎 [士族]」項に「一同 (慶應) 三卯二月十五日弟純助英吉利へ罷越候節達捨出奔ニ付恐入、遠慮伺之上指扣、同廿日御免¹⁰⁰⁾」との記載もある。

実際、慶応年間の海外渡航者名簿をつぶさに眺めても、「久保村」姓の者は見当たらないことから、上掲の『諭吉傳』および『子弟輩』・『福井藩士履歴』に記されたとおり、久保村純介が慶応3年2月に無許可渡航＝密航したことを確認できる。

とはいえ、おそらくは福澤本人やその周囲の人びとからの聞き取りにもとづく『諭吉傳』の逸話には、福澤の記憶違いによるものか、筆者石河の誤記によるものか、疑わしい点はかなり含まれている。

福澤が米国滞在中にしたためた『慶応三年日記』には、ボストンを訪れたという記載が見当たらない。当然、久保村という人物に出会つたという記載もない。ボストンに近いニューヨークには2度 [3月19～24日と5月4～10日] 滞在しているが、いずれも多忙であり、ボストンに足を延ばす余裕はなかつたはずだ。¹⁰¹⁾

しかし、久保村と思しき人物がサンフランシスコに居たとする記録もある。さきに登場した高橋是清は、慶応3年8月18日、サンフランシスコに到着した時の様子を以下のように回想している。¹⁰²⁾

「私たちは、前に仙台藩を脱走同様に留学してきている一條十次郎、越前藩の窪村純雄のいずれかが迎えに来て、その案内でヴァン・リードの家へ行く手筈になつてゐた。ところが、¹⁰²⁾ どういうわけか、その迎えが来ていない」

やがて一條だけが高橋等を迎えにくる。「窪村純雄」に関する高橋の回想はこれだけであるが、この「窪村純雄」が「久保村純介」である可能性は極めて高い。明治三年『大蔵省官員録』には「大蔵省監督司出仕 福井（朱字） 窪村純雄」の名が記載されている¹⁰³⁾。また、『子弟輩』にある久保村純介の履歴にも、明治3年10月16日に「大蔵省十一等出仕」との記載が見られる。同一人物と見做して間違いなからう。

とはいえ、高橋の回想に従えば、慶応3年2月15日に英国へ密航したはずの久保村純介が、同年8月アメリカのサンフランシスコに居たことになる。さすれば、福澤と久保村とのボストンにおける邂逅を、どのように解釈すればよいのであろうか？

ここで久保村純介と福澤が同時期に滞米していた可能性を考えると、久保村が品川から長崎を経てインド洋航路で渡英したなら、目的地イギリスにはごくわずかな期間しか滞在せず、ほとんど素通りに近いかたちでアメリカをめざしたことになる。まことに不可解な行動であるし、よしんばそうした場合でさえも、滞米中の福澤に出会うことは、当時の旅客輸送の実情に照らすと、時間的にも物理的にもまず不可能に近い。

だが、久保村が横浜から太平洋航路でサンフランシスコに上陸、北米大陸を横断してボストンに入り、そこからイギリスに渡航するルートを探っていたならどうだろうか？

横浜には福井物産館石川屋がある。そこには、海外渡航によって西洋の先進知識を修得したり、財力を蓄えたりしようともくろむ者たちが仮寓し、機会を覗いていたといわれる。あるいは、久保村も渡航に際して石川屋を頼り、ヴァン・リードを介して乗船の便宜を受けたのかもしれない。

この想定のもとでは、福澤からほぼ1カ月遅れでサンフランシスコに上陸した久保村が、ニューヨーク滞在中の福澤に会うか、サンフランシスコで帰国間際の福澤を訪ねることは、あながち不可能とは言い切れない。ましてや久保村は無許可渡航＝密航によってイギリスを目指したわけだから、旅程はおろか目的地の変更さえも自在の身である。滞米中に渡英費用が尽きたとも考えられる。

以下は筆者の推測による。使節団としての使命を終え、サンフランシスコで帰国を待つばかりの福澤は、元塾生であった久保村の訪問を受け、金銭援助を求められた。帰国後、福澤は久保村の件を福井藩出身の門下生門野隼雄^{かどのはやお}あたりにそれとなく伝えたところ、それが松平慶永の耳にも届き、律儀な慶永が福澤の温情に報いようと「思わぬ気遣い」をした——そんな経緯を耳にした石河が『論吉傳』の執筆にあたり、誤解したかたちで、逸話として収録したのではあるまいか。

先述のとおり、久保村が福澤のもとで学んだのは1カ月程度であったが、もしサンフランシスコで上記のような出会いがあったなら、福澤にとって久保村純介は何か特別な縁を

感じる門弟となったはず。したがって、明治3年10月大蔵省出仕となった久保村純介こと「窪村純雄」がそこで知己となった同郷人の「関戸良平」に、福澤の知遇を得るための機会を設けた可能性は残るのである。

(3) 港都神戸の有力者たち

神戸に進出した関戸由義・慶治の活動は、そこで知己となった人びとの日記や回想録、あるいは彼らと交わした書簡のなかに、断片的なかたちで記録されている。

まず、以前に紹介した北風家の大番頭喜多文七郎の日記がある。同家第66代当主の正造貞忠は、幕末期に勤王活動を支援した功により、慶応4年2月に兵庫県会計官・商法司判事を拝命、名主代表として切戸町の兵庫裁判所に出仕する。以降、藩閥政治に失望して官職を退く明治6年まで、通商司為替会社頭取、兵庫県権大属、廻漕会社頭取、兵庫米会所頭取、教部省検訓導を歴任した。由義の神戸赴任時、正造は県大属の地位にあったから、¹⁰⁴⁾文七郎の日記には関戸の名がたびたび登場する。

◇「五月廿四日

夜ニ入、右等之訳（豊橋藩が幸鷹丸を神戸管内の町人に売却）、主人へ申上ル、何レ明日岡村（兵庫県大参事）与関戸兩人（註 兵庫県権少属関戸由義）へ面談之上、取計よし」

◇「五月廿七日

今村、関戸（註 兵庫県属関戸由義）役宅へ出ル。留守中」

◇「五月廿八日

今村、関戸（註 兵庫県属関戸由義）役宅ニ出ル。豊橋藩、中村へ関戸名前を以、相断候段不当之よし」

◇「五月廿九日

主人と被召、岡村（註 兵庫県大参事、岡村義昌）関戸（註 兵庫県権少属、関戸由義）等之儀御咄有」

◇「五月晦日

早朝、関戸（兵庫県権少属関戸由義）役宅へ出ル」

◇「六月朔日

早朝、関戸（関戸由義）へ断書出ス」

◇「六月二日

主人へ関戸（由義）済口（和解）申上ル」

どうやら豊橋藩〔三河吉田藩松平家〕が所有する幸鷹丸の売買契約をめぐり、由義と正造の間にいささかの齟齬が生じたようだ。6月2日の「済口申上ル」は、下役の由義が上役の正造に謝罪したということであろうか。文七郎の日記は、明治5年2月の由義退官に

¹⁰⁵⁾
もふれている。

「二月朔日
今日御引^ら, 主人始メ磯田へ年酒之由。
招待御連書
(略)
是迄勸業課。
依願免本官, 少属, 関戸 (由義)。願之通職務差免之事。等外附属第一等, 川口」

翌明治6年には正造も官を辞して野に下った。兵庫新川開鑿事業掛, 米商会元締, 第七十三銀行頭取を務め, 神戸船橋会社や輸出製茶改良会社の創設にも関与するが, 幕末以来勤王勢力に惜しめない支援を続けてきた北風家の資産は, この頃に限界を迎えつつあった。喜多文七郎は斜陽の兆しが濃くなった北風家の行く末を憂いながら明治9年5月23日に死去したが, 前年の日記には関戸と北風の接触が書き留められている。¹⁰⁶⁾

- ◇「一月廿四日
関戸 (註 元兵庫県属, 関戸由義, 明治五年一月退官) ^ら 来状。会社 (為替会社) 分式百円為登方ノ添書也。并過日尋ニ遣し候県庁御用達, 歩一金百円ニ付老メ文ツ, 受取候由, 尤横町帳箱ニ帳面在之よし申來ル」
- ◇「二月十九日
関戸^ら (元兵庫県属関戸由義) 來状。大成丸残金掛合之訳, 与兵衛 (清川) 帰京之件, 并ニ貢納歩一 (金) 之件等尋状也。即日返書出ス。
- ◇「三月八日
昨日, 関戸 (元兵庫県属関戸由義) ^ら 会社分三百円登ルニ付川源 (川崎源八郎) へ差出ス」

明治7年11月, 三井組と共に新政府の為替方 [事実上の御用達] を務める小野組が閉店した。由義は県官を辞した後, 小野組の顧問格に招かれ, 多額の融資を受けていたから, 支援元の倒産は少なからぬ痛手となる。そこで, 地生えの豪商北風家に改めて接近を図ったのであろう。

ところで, 文七郎は日記に小野組閉店と同じ時期, 或る人物が北風家を訪れたことを書き留めている。「彦造唐人」と記されたこの人物は, 天保7年8月21日, 播磨国加古郡阿^あ閑^え村に生まれ, 13歳になった嘉永3年秋, 江戸からの帰途に乗船が遠州灘で遭難, 50日間の漂流を経てアメリカ商船に救出される。翌年2月サンフランシスコに上陸し, そのままアメリカで教育を受けて市民権を取得, 安政6年6月神奈川県領事館通訳として再び日本

の土を踏むという波瀾に富んだ青春を送った。幼名は彦太郎、アメリカで洗礼を受けてジョゼフ・ヒコと改名、日本に帰国後は「アメリカ彦蔵」とも渾名され、長じては浜田彦蔵を名乗る。横浜で岸田吟香と協力して『海外新聞』を発行したことから、「日本の新聞の父」とも称されてきた。¹⁰⁷⁾

「彦造唐人」ことジョゼフ・ヒコは、明治7年12月1日、鍛冶屋町の北風家屋敷に入来、当主の正造と大番頭の文七郎を説いて共同事業に乗り出すこととなった。翌年5月、北風家より1万円の融資を受けて、神戸栄町通に製茶輸出業の店舗を開設する。神戸に進出したヒコが住居を構えた中山手通6丁目は、慶治名義の地所に近かった。実際、ヒコの回想録には関戸由義・慶治¹⁰⁸⁾と思しき人物の逸話が綴られている。

「ひとまず(神戸に)着いたところで、家を建てるために山の手の地所を見てまわったが、なんと1868年に坪あたり半分か4分の3分で売られていた土地が、今は二分か三分の値を呼んでいた(中略)この驚くべき値上りは、おおむね土地の投機の結果であって、すでに消滅した小野銀行[小野組]と関係ある老男爵と、噂の高い豪商とが、その音頭を取ったものであった。[小野組倒産の]結果、例の商人が持っていた山の手の地所も、このたび売りに出されたのである。問題の男は土地を買おうと、それをみずから評価して地方当局に提出し、当局はそれを正当だと証明してくれたらしい。そこで彼は、その土地を隣県の県庁に抵当に入れ、こうしてこしらえた金をさらに不動産に投資し、このやり方を繰り返していたが、ついに前年における銀行[小野組]の倒産によって打切りとなってしまった。(中略)やがて、えらい投機師が或る県官と結託して、別の方面で策動していたことがわかった。連中は『春秋社』なるものを作って、神戸の外国人居留地区の裏山にある官有地の広大な地所を無料で、つまりロハで会社用として手に入れた。ここに彼らは火葬場を建設し、その一部は墓地としての地取りをして、ごく手近なところに寺を建てた。次に彼らの打った手は、公衆衛生に害があるとして、地方当局に旧来の墓地を閉鎖させ、こののちの埋葬はすべてこの真新しい墓地にせよ、と命令してもらうことであった。——官命が下るや、民衆の間で全般にわたって悲しげな、深刻なささやきと不平をまき起こした。というのも、その会社は自分の持ちものには途方もなく高い値段をつけるのが適当だとして、笑いごとではないが、四尺四方の土地を一坪と称し、その一坪に(場所によって異なるが)一円五十銭から七円を求めたからである。もちろん、自然の成行きにしたがって、彼らは大変な利益を手に入れた。一年か二年の後に、問題の県官は首都に呼び返されたが、投機師は神戸において自分の穏やかな人生航路を歩きつづけた。(中略)私も一度はこの投機師に会う機会があった。その折に彼は私に、『神戸で土地の横領[不動産取引のこと]をやって、ひともうけするという構想をいだいたのはサンフランシスコでのことであった』と語った。というのは、シスコは東洋と西洋の玄関口であるところから繁栄をもたらしたのだが、同じように神戸も日本の中央に位置するところから、必ず栄えてゆくに違いない、というのであった」

ジョゼフ・ヒコは明治8年から同21年まで神戸で暮らした。上の回想にある「土地の横

領」, すなわち官民一体となった土地投機は, 彼が神戸に入る以前の出来事であり, 周囲から聞いた噂話も加味されているだろう。

投機に関与した人物たちの姓名は記されていないが, 「小野銀行 [小野組] と関係ある老男爵」が元三田藩主の九鬼隆義, 「噂の高い豪商」・「例の商人」・「えらい投機師」がいずれも関戸慶治, 「或る県官」が関戸由義を指すと考えられる。「投機師」がヒコにサンフランシスコでの経験を語るくだりは, この「投機師」が関戸慶治であったことを強く示唆するものであろう。

神戸市街の造成をめぐるこれらの人びとの連関は後述するが, ヒコは関戸慶治の渡米にひと役買ったヴァン・リードとは, ふたりで一枚の写真に納まるほど親密な間柄であった¹⁰⁹⁾。よって, 神戸時代に一度しか慶治と言葉を交わさなかったというのは, いささか不自然な気もするが, 会話の内容からは, 慶治が神戸にサンフランシスコを重ね合わせ, 自身の野望を実現しようと考えていたことも覗える。

さて, 文七郎とヒコのほかに, 由義および慶治との交際を記録したのが, 湊川神社宮司の折田年秀である。すでに紹介済みの記載も含めて, 折田日記にふたりが登場する箇所を列記しておく¹¹⁰⁾。

◇「明治十三年

十月二十六日

一、午後三時より社務所人数ヲ召ヒ, 留守中之次第, 篤与申附ケ, 且ツ金圓七十圓, 鷺尾より相受取タリ, 又追々客來ニ付, 酒肴ヲ設ケ, 別盃ヲ汲ム, 五時三十分高砂丸ニ乗船す, 時ニ内より風呂敷包ミヲ送り参る, 此レハ銀作り之短刀なり, 船中迄送り人数岡田俊之介・大 中 (春愛)・佐藤・上野 (登)・來住 (景起) 等なり, 船中にてハ關戸由義乗込, 同部屋なり, 六時二十分時ニ發船, 風氣平穩なり,

十月二十八日

一、夜明ケ林庄五郎より迎人参る, 依而荷物引渡し上陸す, 關戸氏も同林氏 (庄五郎) 江誘引す, 午前九時三十分之汽車にて上京す, 新橋停車場にて關戸 (由義) ニ別袖,

十二月二十九日

一、林庄五郎方江稅所長蔵乗船之由にて止宿, 又關戸一平も参る,

十二月三十日

一、早朝關戸ト共ニ古道具店江参る」

◇「明治十八年

四月十九日

一、關戸一平并ニ本城新介來り閑話す, 關戸ハ出雲へ銅山検査ノ為ニ参るニ付, 千家 (尊福) 氏へ轉書ヲ乞フカ故ニ, 千家・北島 (修孝) ノ兩名へ宛テ書面ヲ送リタリ」

◇「明治二十一年

一月二十九日

一、關戸・刺賀・林之三名へ明卅日晚飯饗應之案内状ヲ出タス

一月三十日

一、關戸・刺賀・中島來り、洋食ノ馳走ヲ供ス、

八月十八日

一、昨十七日午前九時、關戸由義死去之報知有之、

八月十九日

一、午後三時ヨリ關戸由義ノ柩ヲ送ル、

九月五日

一、今朝宇田川(勤吾)來リテ、關戸由義地所一件ノ夏アリ、

九月十七日

一、工藤八郎來り、藤田積中・關戸由義之祭典一件ヲ協議す、

九月二十二日

一、明日藤田積中・關戸由義祭典ノトヲ治決ス、猶告文及ヒ歌ヲ作る、

九月二十三日

一、當日ハ藤田(積中)・關戸(由義)之靈祭ニ付、午前九時ヨリ出殿、各宗拝禮終る、

一、當日米人アツキンソン演舌ニ付、目加田駁論紛議ヲ生シタリ、仍而工藤并ニ村野(山人)へ書面ヲ投シタリ」

折田日記は明治6年より本人逝去の3カ月前まで30年にわたって綴られたが、「關戸」の登場は上掲「明治二十一年九月二十三日」が最後である。「明治十三年十月二十六日」から「同年十二月三十日」、「明治十八年四月十九日」についてはすでに紹介済みだ。その後、「明治二十一年一月三十日」の会食が記されているが、そこでの「關戸」が由義であったのか、慶治であったのかは判然としない。

興味深いのは、「明治二十一年八月十八日」の關戸由義逝去の報から1カ月後に企画された「藤田積中・關戸由義之祭典」の顛末に関する記載であろう。これは神戸近代史のひと齣として、しばしば取り上げられてきた事件である。さしあたり『神戸開港三十年史』¹¹¹⁾坤の記述を引こう。

「明治二十一年九月村野山人、小寺泰次郎等神兵両市の開進に尽力して遠逝したる故藤田積中、關戸由義の爲めに湊川神社内に於て神佛耶三教混合の追善零祭を行ひ、一場の紛議を生じたり、——此の祭典に於て米國宣教師アツキンソンは、人の靈を祭るは野蛮人の所業なりとの意を演説せしより、佛教の鼓吹者目賀田榮氏は此の演説を以て、死者を侮辱し國體を誹議せし者なりとして辯駁せり、此処に於て靜肅端嚴なるべき祭典は人々相顧みて作色せざるを得ざる光景を呈出したり」

藤田積中は文政12年6月25日に兵庫富屋町一番地で生まれたから、文政11年生まれと推察される関戸由義とはほぼ同い年。じつはこの両者、民部大蔵省通商司の同僚であった。明治3年『大蔵省官員録』「通商司 少佐」欄記載「福井（朱書） 関戸良平」の隣に「兵庫住民（朱書） 金生發一」の名が見える。¹¹²⁾これが藤田の別名であり、喜多文七郎の日記にも「金生」の名が頻繁に登場している。

「金生」こと藤田積中は、政府に9年間出仕した後、明治11年8月叔父の死去にともない、富屋町の酒造業を継ぐために帰郷した。以降、兵庫商法会議所会頭、兵庫県会議員、同県会副議長を歴任、明治15年北風正造と共に神戸製茶改良会社を創設、同16年に『神戸又新日報』発行元の五州社役員となり、同20年には北風、神田兵右衛門らと湊川流域改修事業に参画している。明治21年1月8日に富屋町自邸で逝去したが、生前にはかつて同僚であった由義とも親密に交際したであろう。¹¹³⁾

儒学者にして勤王家であった藤田は生前、南北朝の英雄楠正成を崇拝していたことから、明治21年9月23日湊川神社で開催された合同霊祭においては「神佛」つまり神道・仏教にて追善礼拝されたはずだ。これに対して、関戸由義は「耶蘇^{やそ}」、すなわちキリスト教による追善礼拝を受けたと考えられる。これが図らずも摂津第一公会宣教師ジョン・レイドロウ・アトキンソン（John Laidlaw Atkinson）の「人の霊を祀るは野蛮の所業」という批判を呼び、仏教鼓吹者の目賀田榮が「死者を侮辱し、我が国体を誹謗した」とアトキンソンを威嚇した結果、思わぬ宗教論争に発展した。

関戸由義がプロテスタント〔キリスト教新派〕に信仰心めいた感情を抱いていたことは確かである。ただし、いつ、いかなる契機で、彼がプロテスタントと結びついたかは定かでない。おそらくは渡米した慶治か、プロテスタントに入信した志摩三商会の面々か、いずれかの影響によるのではなかろうか。¹¹⁴⁾

追谷墓園にある「関戸由義之墓」は竿石に没年月日、中台に眷属名を刻んだだけの簡素な和型石碑であり、香炉や拝み石は付属せず、花立部には家紋さえ刻まれていない。本多家墓所に立てられた「関戸恵津之墓」も同様である。聖書のみによる信仰を求め、偶像崇拜を忌避して、勤労を善とするプロテスタントの合理精神がそこはかたく漂う気もする。

上掲折田日記の末尾に名の出た村野山人は、折田と同じ薩摩藩の出身で、明治9年^{しま}飾磨県五等警部となり、飾磨県・豊岡県・淡路島の兵庫県編入にともなって、兵庫県十三等出仕の身となった。12年1月の郡区再編で神戸町・坂本村が合併して新たに神戸区が成立、村野は13年6月に神戸区長心得を拝命、14年には^{やたべ}八部郡長を経て、神戸区専任区長となる。¹¹⁵⁾由義とは親しく交流し、『村野山人文書』には「関戸由義書翰」が3通収められている。いずれも年不詳であるが、村野が神戸区役所に勤めた明治13～19年の間にしたためられた

可能性が高い。¹¹⁶⁾

- ◇「昨日ハ御懇情之御回章ニて本日御招ニ預リ難有昇置可仕之処、昨日より俄ニ頭痛ヲ發シ水蛭ヲ付候処、夫か為メ面部江浮腫ヲ發し候間、甚失敬ニ候得共、今日御断申上候、猶委細使之者より奉申上候恐々不尽
一月八日 由義拝
村野様」
- ◇「此免并生雲丹国元より持帰り (中略)
三月三十日
関戸拝
村野様」
- ◇「御錦字致拝誦候、陳ハ本日御差支之趣致拝承候、然り夕景迄なれハ御來臨被下候趣過刻申上候通三宮御退庁より御來臨之程奉待候、県令閣下も御退庁より御來臨被下事ニ申上置候篠寄君ハ御先約之御用有之由ニて過刻御断ヲ受失望、此事書余筆縷讓拝誦候、不尽
四月十一日
關戸由義
村野君 奉拝」

最初の書簡は急な体調不良によって村野の招きに応じられなかったことへの詫び状。二番目は帰省の報告だが、「生雲丹国元より持ち帰り」という一節は、関戸が日本海に面した越前福井出身であることを裏付ける。三番目にある「県令閣下」は、明治9年9月から18年4月まで兵庫県令を務めた森岡昌純と考えられる。

森岡の股肱として活躍した村野は、森岡の県令退任から1年を経た明治19年に下野、山陽電鉄会社副社長に就任後、豊州鉄道、阪鶴鉄道、摂津鉄道、南海・京阪・神戸各電鉄会社でも要職を歴任、「鉄道翁」の異名をとる。晩年は日露戦争で旅順攻略を指揮した乃木希典に私淑、明治天皇崩御にともなう彼の殉死に感激して乃木神社建立に力を注ぎ、「額に汗を流す産業人育成」を謳った村野徒弟学校〔現村野工業高校〕の設立に私財を投じた。¹¹⁷⁾

神戸の有力者が残した関戸の記録として、川嶋「一斑」を最後に紹介したい。これを改めて取り上げる理由はふたつある。

まず、生前の由義と親しかった安藤行敬が由義の次男村瀬春雄の依頼に応じて綴った覚書を土台としていること。覚書部の末尾には「右は大正の初年頃、氏の二男商學博士村瀬春雄氏の請に依り余の記憶に存ずる一二を記して贈りし呻稿にして事實多少齟齬の點なきを保せず、請ふ諒せよ」との断りが付されている。¹¹⁸⁾

安藤は慶応義塾に学んだ後、兵庫県に一等属として出仕、交詢社兵庫支社には由義と共に加入している。居住地は関戸家と同じ鯉川筋西側の北長狭であり、両家は近所付き合いの間柄であったと推察される¹¹⁹⁾。

つぎに、安藤の覚書を下敷きに編まれた「一斑」には、これまで由義の事績とされてきた関山小学校の開設、不動産取引、諏訪山温泉地の開発、多田銀銅山開鑿が含まれていない。さきに論じた如く、これらはいずれも関戸慶治の手になる可能性が高い。その意味でも、安藤の覚書はかなり信頼の置けるものと考えてよからう。

「一斑」に記された由義の事績は、「榮町道路」、「山手道路」、「城ケ口墓地」、「賦金制度」、「五厘金及び貿易會所」、「三宮停車場」、「巡整の設置」の7件である。なかでも「榮町道路」と「五厘金及び貿易會所」は由義にふれた文献全てが取り上げており、前者については『兵庫県史料』収録の兵庫県史政治之部工業第七編「榮町市街設置」に「十一等出仕ヲ以テ神戸市中新大道取開掛并町會所懸兼務申付候事」として関戸由義の名が明記されている。

付言すれば、「一斑」が掲載された時期、『兵庫史談』は存続をいささか危ぶまれ、刊行形式も新旧転換の途上にあつたことから、発行部数が極めて少なかったようである。そのせいか、赤松「先覚」には、「一斑」を参照した形跡が全くない。実際、「先覚」に使用された文献一覧を眺めても、「一斑」の記載はなく、見落とされた可能性が高い¹²⁰⁾。

それにしても解せないのは、ここまで紹介してきた神戸の人物とが関戸由義との交際を語りながらも、関戸慶治については「不自然」と形容できるほどにふれていないことである。ただひとり折田年秀のみは、慶治と思しき「関戸一平」との交際を綴っているものの、この「一平」と由義とが一体どのような間柄であつたのかは一切記していない。

関戸由義と関戸慶治は、果たして何をしたのか、あるいは何をしなかったのか——これまでは由義ひとりの名を以て「神戸市街の陰の設計者」と評されてきた両関戸の事績を、互いが請け負った役割を明確に分けたかたちで見直さねばならない。

V 由義と慶治の事業仕分け

関戸由義と関戸慶治の事績を考える際、最も有益な枠組みを与えてくれるのは、いま紹介した「一斑」である。安藤行敬の覚書にある7件の事績は、いずれも由義が「官」の力を背景に達成したものだ。逆に、従来は由義の事績とされてきたにもかかわらず、7件に含まれていないものは、「民」の側にある慶治が己の才覚を以て実行したと考えられる。

とはいえ、「官」と「民」にそれぞれ身を置いたふたりは、開港地神戸で自らが抱く^{ビジョン}未来像を実現しようと、相互に密接な連携を保ちつつ動いた。それはあたかも一心同体の

如き関係であったかもしれない。けだし、慶治は由義の死後も数年間は神戸に居たはずであるが、その動向は全く不明なのだから。心身の半分が消え去った程の喪失感が慶治に重くのしかかり、事業への意欲と気力を萎えさせたのか ——

その推察はひとまず措き、ここでは従来「関戸由義ひとりの手になる」と誤解されてきた諸事績を、由義主導のそれと慶治主導のそれとに仕分けし、新たに得た史料や情報を織り交ぜながら、各々の実態をあきらかにしていきたい。

(1) 能吏としての関戸由義

すでに紹介したが、関戸由義は明治維新前夜に「横濱本町小西屋伝蔵」のもとに寄留し、建白による獵官運動を行った。そして、同弁天町門屋幸之助との連名で民部大蔵省に提出した『貨幣之儀』を認められ、明治2年12月同省通商司に少佑として出仕することが叶う。通商少佑免官後は明治4年3月～翌5年2月まで兵庫県外務局勸業課少属を務める。

先述の如く、通商少佑時代の関戸の活動は不明であるが、正八位の判任官身分なので、明治官僚機構の末端にあって庶務に日々明け暮れていたと想像するよりほかない。中央から兵庫県に転じた経緯については、開港地神戸で「事を成す」という意志を以て何らかの働き掛けを行ったと考えられるが、いかなる筋に、どのような働き掛けを行ったかはやはり不明である。

幾つかの推測が成り立つが、なかでも蓋然性が高いと思われるのは、慶治と連携した配属工作であろう。慶治はサンフランシスコにおける骨董品取引の利益を元手に、明治3年中頃、神戸に進出して鯉川筋沿いの土地を取得、敷地内に洋風校舎と運動場のある関山小学校を開設し、西洋知識に通じた人物との世評を得た。

その慶治が北風正造や神田兵右衛門ら兵神の有力者たちに「兵神の発展に資する人材」として由義の登用を推したとすればどうか。その際には、明治初年における神戸洋学伝習所の建議や『貨幣之儀』の建白を、由義の有能さを示す実績として大いに売り込んだことであろう。実際、民部大蔵省通商司から県外務局勸業課に配属されるのは、下級官吏のキャリア形成という視点から眺めても、自然且つ妥当な流れと思われる。

それでは、勸業課少属として由義が成した事績には何があるのだろうか。「一斑」が挙げる事績のうち、少なくとも「賦金制度」¹²¹⁾、「五厘金及び貿易會所」^{いわれる}、「巡整の設置」の3件には由義の関与が視える。

「賦金制度」とは、「大中小最小の四種の商業鑑札を下渡し、鑑札料を徴して之を賦金と称し、其地の公費に充つるの制」であり、「所謂神戸賦金、兵庫賦金」とも称された。『神戸開港三十年史』乾にも「明治四年關戸由義の勸告にて町會所を設け鑑札料參拾圓徴

収¹²²⁾とある。

これによって、商売仲間組合を結ぶ商業者は、県庁管轄の町会所に鑑札料を納めて、許可証の発行を受けねば営業ができなくなった。開港地に一攫千金を求める内外の野心家たちがもたらす商取引秩序の混乱を規制すると同時に、鑑札料収入で県財政を潤し、以て公共投資を盛んにして市街整備を推進するという意図がそこには見える。

「五厘金及び貿易會所」も同様である。貿易五厘金制度については、『神戸市史 本編各説』に「先づ貿易商二十一名を諭して元組商社なるものを組織せしめ、神戸港の内外貿易商人一同より売買金高の千分の五を出金蓄積せしむること、し、其総積金中、売込商人より出金せる五厘金全部をば之を神戸の公費に充て、引取商の出金に係かるものをば、其六割を公費とし、残餘を商社の経費に充て、尚ほ餘剩ある時は社中に配當すること、せり。商社事務所は初め東運上所内に設けられ、明治元年二月より五厘金の徴収に著手せしが、明治三年六月其事務を神戸町會所に委託すること、なり、町會所が（中略）新築せらるゝや、四年一月より同所にて厘金事務を取扱ひ、兵庫縣勸業課之を監督せり¹²³⁾」とあり、由義が実際の監督にあたったようだ¹²⁴⁾。

しかし、明治5年2月に由義が勸業課少属を依願免官となる頃、公費使用に偏った貿易五厘金の在り方に不満を感じた大阪商人、さらには神戸商人までもが神戸港を離れる動きを示していた。『神戸市史 本編各説』は「兵庫縣廳は、関戸由義をして之を諭しめ、纔に事なきを得しが、由義は尚ほ将来をも慮り、五年四月許可を得て貿易商社を組織し、神戸大阪の貿易商以外に、新に京都の貿易商をも加盟せしめ、三井組・小野組を社長とし、橋本藤左衛門・長井金三郎・武田九右衛門を副社長に挙げ、其事務所をも神戸中組總會所に移し、此商社に附與するに五厘金の徴収并に貿易上取締の権能を以てしたれば紛紜に¹²⁵⁾」と記す。

わずか1年程の任期中に、由義が黎明期神戸の振興に果たした役割は大きく、「一斑」も「(地方税施行に至るまでの)殆ど十年の久しき神戸市民が(中略)神戸賦金と此五厘金との仕拂を受け、自己頭上に係る著しき賦課を免れたるは少なからざる幸福なり¹²⁶⁾」との賛辞を呈している。

「巡整の設置」は貿易五厘金の成果であり、「一斑」は「外国におけるポリスの制に倣ひ、始めて神戸に巡整(今の巡查)を置き、五厘金を以て其費用に充つることになりしは氏(関戸由義)の建議に據て成立せしものなり¹²⁷⁾」としている。以下は兵庫県における近代警察制度の沿革を辿ったものである¹²⁸⁾。

慶応4(1868)年5月 兵庫裁判所に市中取締役を設置

	9月	市中捕亡方に改称
明治4 (1871)年	4月	巡整卒に改称
明治5年	11月	邏卒に改称
明治8年	10月	巡查に改称
	12月	兵庫巡查出張所を小物屋町、神戸巡查出張所を元町四丁目に開設
明治9年	10月	兵庫出張所を第二巡查屯所、神戸出張所を第一屯所に改称
明治10年	12月	橘通二丁目兵庫警察署管内の第一屯所を神戸分署、第二屯所を兵庫分署と改称
明治12年		兵庫・神戸合併し神戸区成立に伴い、2月兵庫県警察本署に改称 相生橋東詰に神戸警察署、戸場町に兵庫警察署を開設

近代警察制度の嚆矢に位置付けられる明治4年4月の巡整卒の設置は、まさに由義が貿易五厘金を差配できる立場にあった時期のことであり、五厘金制度の所期の目的に合う使途として警察行政の整備に充当したものと考えられる。

以上はまことに能吏の面目躍如たるものであるが、「一斑」は由義が兵庫県勧業課少属を退官した後に成した事績を4件挙げている。「榮町道路」、「山手道路」、「城ケ口墓地」、「三宮停車場」である。

これらのうち「三宮停車場」については、由義が時の鉄道局長井上勝〔長州藩出身。明治政府における鉄道行政の第一人者〕に「神戸は他日一大市街を為すの地、且居留地のあるあれば、(神戸停車場とは)別に今一ヶ所の市内停車場なかるべからず」と掛け合い、三宮停車場の設置を実現したとされるが¹²⁹⁾、残念ながら安藤の記憶を裏打ちする文献史料が見当たらない。

かたや「榮町道路」、「山手道路」の敷設と「城ケ口墓地」の開設は、由義畢生の事業として現在まで語り継がれている。とくに明治5年9月から6年11月にかけての榮町通造成をめぐっては、『兵庫県史料』31政治之部工業第7編「榮町市街設置」に、「關戸由義當分ノ内十一等出仕ヲ以テ神戸市中新大道取開懸并町會所懸兼務申付候事 壬申九月十六日 兵庫縣」との布達が採録されている。

ただし、『明治初期の官員録・職員録』収録の兵庫県官員名簿を眺めても、「神戸市中新大道取開懸并町會所懸 關戸由義(良平)」の記載は見出せない¹³⁰⁾。「一斑」には「退官の後も氏(關戸由義)が出廳する時は前官の待遇あり¹³¹⁾」とあることから、臨時の技官身分として招聘された可能性もある。

この時期、神戸は海外貿易の隆盛が見込まれ、阪神間鉄道開通も明治7年に予定されていたことから、居留地西側に拡がる在来の日本人街に商業拠点を整備すべく、兵庫県は居留地の旧西関門から鉄道駅開設予定地に至る東西幹線道＝「通」^{とおり}の造成に着手する。

もともこの一帯には、江戸期の旧道＝西国往還が走り、また開港にともなって敷設された沿岸道＝海岸通があったものの、前者は港から距離があるうえに幅員が狭く、後者は港に近い代わりに暴風雨の被害をまともに被った。よって、新道は西国往還と海岸通の間に通すことが望まれたが、如何せん日本人街は「街衝狭隘、溝洫汚穢、殆んど外国互市場の風致にあらず¹³²⁾」という状態にあった。

新道開発の実施にあたり、下級官吏にすぎない由義が事実上の遂行責任者を拝命できたのは、西の貿易拠点として繁栄が見込まれる神戸での利権を狙う小野組の後押しがあったためと考えられる。けだし、小野組は貿易五厘金をめぐる紛争の処理に関与して以来、由義と連携して神戸市街地の買占めに乗り出そうとしていたからだ。三井組と共に大蔵省御用達を務める政商小野組が、兵庫県に由義の起用を働き掛けたとしても不思議はない¹³³⁾。

あるいは、別の筋からの働き掛けも考えられる。時の兵庫県令神田孝平は、旧幕府の蕃書調所教授を務めた蘭学者であり、明治2年に「田地売買許可ノ議」で土地売買の自由化を、翌3年には「田租改革建議」で地租改正の根本理念を新政府に提起し、地租改正事業の骨子形成に大きな影響を与えたことで知られる¹³⁴⁾。

じつはこの神田、蘭学の総本山と謳われた幕府奥医師桂川家に入出入りした頃、福澤諭吉と知己の間柄になり、明治維新後も親交が続いた。さきに福澤が明治5年7月に神戸を訪問した折、「私知人関戸良平」＝由義へ不動産斡旋を依頼した件にふれたが、このタイミングに照らすならば、兵庫県が新道開掛に由義を起用した背後には、神田と由義の双方に縁のある福澤の関与も察せられる。

いずれにせよ、小野組・三井組の合資になる神戸為替会社が事業費全額を賄った東西幹線道の起工は明治6年4月であるが、関戸は新道開発を指揮する裏で、神戸市街の山手と海岸を結ぶ南北幹線道＝「筋」^{すじ}の造成にも密かに関与していた節がある。

神戸海岸通4丁目で回漕・土木普請を営む県庁御用達加納宗七は、明治4年3～6月に実施された生田川付替工事に関与、竣工から1年以上を経た明治5年9月末に生田神社で開催された旧川跡地の払下げ入札に参加し、女婿の有本明と共同で全17区画3万9,262坪を落札した¹³⁵⁾。

加納宗七は紀州和歌山城下で材木商を営むかたわら、幕末期に勤王活動家たちを支援し、自らも京都において坂本龍馬・中岡慎太郎の復仇戦に加担した。明治維新後、回天に尽力した功を称され、兵庫県の初代知事伊藤俊輔や第四代知事陸奥宗光といった志士上りの県官の愛顧を受け、神戸日本人街の顔役として羽振りを利用させる。加納は入札参加に際して、三井組からの資金援助を約束されたが、これはかねてから三井組と親しい関係にあった陸奥の手引きによるものであろう¹³⁶⁾。

旧川跡整地工事の施行者となった加納・有本両名は、「家作場」＝宅地として開発するという兵庫県側の方針にしたがい、付替工事で出た残土を使って旧川床を埋戻し、川土手を均し、幅員10間（約18メートル）に及ぶ未曾有の大型道路を敷設する。明治5年11月着工、翌6年5月に竣功した菟原郡熊内村字馬淵うはら くもち あざまぶちから同郡脇濱村地先字小野濱海岸へと続く南北1.6キロメートルに及ぶ道路こそ、今日のフラワーロードの原型となった「瀧道」である。沿道の町場には施行者の偉業を称えて「加納町」の名が冠せられた。

じつは旧街道には類例のない幅員を持つ幹道新設計画に対しては、当初より「無用の出費なり」という反対の声も多く、住民の感情は決して良好なものとはいえなかった。そこで、由義は開港場の顔役たる加納を抱き込むことを思いついたのではないか。胆力に恵まれ、志士の気質も多分に持つ加納であれば、「未曾有の大道開鑿によって湊の魁さきがけたらん」との誘いに乗るはず——そんな読みがあったに相違ない。

由義から旧川跡地払い下げ入札の誘いを受けた加納は、陸奥を介して三井組の支援を確保、女婿の有本明も参加させる念の入れよう、まんまと全面落札に成功した。「神戸発展の魁たらん」という意欲に燃えた加納は、由義の思惑どおり、「露払い」となって南北幹道の開鑿に猛進した、ということであろう。

これに呼応するかのよう、由義もまた鯉川筋から宇治川までの海岸通と西国往還の間に新たな東西幹道を敷設する。道路総延長距離563間、側溝を含めて道幅10間の計画で、南北38間に及ぶ1万6,900余坪を買収、工事予定地の家主には坪当たり7両の移転料を、借家人には手当20両をそれぞれ支払ったうえで、建物を取り払わせた。

神戸町の大塚良助が石垣築造費を含め総額17万7,000両で道路造成を請け負い、明治6年正月明けより着工、8月にはほぼ全通し、11月に外国人居留地より西進して東川崎町の神戸駅開設予定地〔明治3年7月6日阪神間鉄道敷設が起工、竣工は明治7年5月11日〕へと至る幹道が完成する。

加納宗七の瀧道竣功に後れること半年、「無用の長物」とする大方の反対を押し切ったの壮挙であった。「之を以て廣しと云ふか、試みに思へ、馬車幾臺の併行を為さしめ得べき、余は尚狭きを恐るゝものなり」——竣功後もなお住民の間に燻ぶる大道敷設への批判に対して、由義はそう反駁したとい¹³⁷⁾う。

前掲『兵庫県史料』31「榮町市街設置」には、明治6年11月に各町副戸長連署で「兵庫縣新道開掛 關戸由義殿 石川季遠殿 第一区区长 生島四郎殿」に呈した頌徳表が収められている。曰く、「初発ヨリノ御趣意貫徹仕、全ク御掛方ノ御勉力ニ依リ既ニ功ヲ成シ、随テ貿易ノ便利ハ勿論港内ノ美目ト一統難有奉存候。依テ衆ニ代リ右等具状申上候」と。

「初発ヨリノ御趣意貫徹」という一節は、由義がまさに万難を排する姿勢で工事進捗に

あたったことを、また、「貿易ノ便利ハ勿論港内ノ美目」については、由義が当初よりこの東西道を居留地西端から神戸駅に至る近代的で解放感溢れた商業街路として構想していたことを物語る。

明治7年、末永い繁栄を祈り、浜之町・札場町・松尾町・仲町・西之町・城下町・東本町・八幡町・市場町の一部を改めて「栄町通」と命名されたこの東西幹道は、幅員8間〔約14.4メートル〕で、加納の手になる瀧道よりも2間〔約4メートル〕程狭い。それでも、山手と海岸沿いを結ぶ南北幹道に続き、居留地と鉄道駅を結ぶ比類なき東西幹道が貫通したことは、それまで往々にして「兵庫津」を以て語られた神戸を、名実共に西の開港地として世間に知らしめた。

すでに明治5年6月からは、眺望が人気の山手雑居地一帯でも、縦横に走る新道の開発が進んでいる。その際、あらかじめ直行する街路割を決め、その左右に人家を配する計画が立てられ、それにしたがって東西路では山本通、上山手通、中山手通、鉄道両側の側道が、南北路として生田筋、三宮筋、城ケ口筋、前山筋、諏訪山筋、再度筋、宇治野西筋が、それぞれ造成された。¹³⁸⁾

これら山手新道の造成も、実質的な指揮は由義が執ったと考えられる。が、整備された幹道と支道を基盤の目状に敷く近代化市街の意義を説いたのは、かつてアメリカ西海岸の港湾都市サンフランシスコで暮らした慶治ではなかったか。さきに紹介したジョゼフ・ヒコの回想にある「神戸で土地の横領〔不動産取引のこと〕をやって、ひともうけするという構想をいだいたのはサンフランシスコでのことであった」という慶治のものと思いき言葉は、このことを裏付けている。

こうして街路整備を終えた神戸市街は、機を見るに敏な内外の事業家たちにとって、格好の投機対象となる。代表的な土地所有者となったのは、栄町通と加納町に広大な地所を得た三井組、山手雑居地の不動産を取得した旧三田藩主従の九鬼隆義＝志摩三商会と小寺泰次郎、そして関戸慶治である。

新道掛を御役御免となった由義が次に手掛けたのは、山手に新たな共同墓地を開設し、市街地の旧在所に点在する墓地をそこに統合する事業であった。『神戸市史 本編各説』はこれについて「明治二年居留地前町公園、即ち今の三宮郵便局敷地附近にありし墓地及び火葬場を廃止し、新に墓地を下山手通四丁目に設け、明治三年相生町所在火葬場及び栄町六丁目所在墓地を廃し、墳墓をば安養寺に改葬し、明治六年火葬の禁止せらるゝや宇治野山・山本通一丁目及び同六丁目所在の火葬場を廃し、新に城ケ口に墓地を設け、八年五月火葬の禁解かるゝに及び、火葬場をも同所に設け（中略）」¹³⁹⁾と記している。

やがて加納宗七や由義自身も眠ることとなる「城ケ口墓地」は、旧神戸村の一部、堂徳

山南側の傾斜面に位置する城ヶ口町の慶治所有地に開設された。現在の神戸市中央区山本通3丁目、浄土真宗本願寺派の城口山光尊寺と山手幼稚園の敷地に該当する。『攝津国八部郡神戸港山本通三丁目地図(朱字ニテ)第四拾九號』には「五十六 宅 千五百廿坪三合六夕 春秋社 名代 佐々木祐誓」の記載があり、これはさきに引いたジョゼフ・ヒコの回想「連中は『春秋社』なるものを作って……」にも明記されていた共同墓地の管理会社である。

新墓地造成について「一斑」は「今日にして審かに地形上より看察すれば、不適當地たる感なきにあらざれども……¹⁴¹⁾」という感想を挟む。また、ジョゼフ・ヒコも回想の中で「こののちの埋葬はすべてこの真新しい墓地にせよ、と(中略)官命が下るや、民衆の間で全般にわたって悲しげな、深刻なささやきと不平をまき起こした。というのも、(中略)四尺四方の土地を一坪と称し、(中略)一円五十銭から七円を求めたからである」という辛辣な評を加えている。

たしかに城ヶ口墓地は土地転売による利得を狙った策略であった可能性が高い。道路敷設を軸に整備を進めた市街地域の不動産価値を高めるべく、まず県庁の名によって旧墓地群を廃し、不動産価値が比較的低い山の斜面地を新たな共同墓地予定地として県に売却した、俗な表現をもちいれば、「土地を転がした」ということである。

ただし、これまで由義と慶治の事績が混同して語られてきたことを思えば、城ヶ口墓地の開設も含めた市街地整備を影で操りながら、それに便乗した狡猾な土地投機で蓄財したのは慶治であったと考えて間違いない。事実、明治10年作成の『摂津国八部郡神戸港地図』群に記載された関戸家所有地の名義は全て「關戸慶治」となっている。

由義も一時、栄町通6丁目に土地を所有していたようだが、これはおそらく栄町通敷設にあたり神戸為替会社の融資を受けて購入したものであろう。『兵庫県史料』16兵庫県史政治部駅通「郵便局設置」によると、明治7年3月に兵庫県は神戸元町通6丁目の郵便役所敷地43坪8合を建物共に350円で関戸由義に払下げ、10月30日に新たな郵便役所の開設地として栄町通6丁目の「關戸由義」所有地200坪9合と東隣地42坪を690円で買上げた。

その際、大蔵省駅通寮は「早急に外国郵便業務を開始せねばならないことから、通常の入札を行わず、身元が確かにして誠実な関戸良平に建築工事の段取りを一任する」旨の伺書を明治7年8月31日付で大蔵省に提出、9月13日に承認決議されている。¹⁴²⁾

阪神間鉄道開業が物流促進をもたらせば、狭小な元町郵便役所では心許ないと駅通寮が判断しての措置によって、由義は土地転売と突貫工事請負による相当額の利益を懐に納めたことになる。

さきに紹介した「退官の後も氏が出廳する時は特に前官の待遇ありし」という「一斑」

の一節からも、由義は兵庫県庁内において確たる信任を得ていたと考えてよからう。神田孝平の退任後、明治9年9月に兵庫県令を拝命した森岡昌純のもとでも、由義は一目置かれる存在であった。横浜を拠点とした建白による獵官運動に始まり、民部大蔵省通商少佐を拝命後、兵庫県外務局勸業課少属、神戸市中新大道取開掛、町会所掛を歴任した関戸由義は、文字どおり「能吏」として黎明期神戸の発展に尽したのである。

(2) 投機に生きた関戸慶治

以上の事績が関戸由義の手になるとすれば、これまで彼の名を以て語られてきた投機師的な仕事は別人によるものとなろう。その別人とは言うまでもなく、関戸慶治である。

慶治が由義に先行するかたちで神戸入りした経緯についてはすでに推理したところだが、サンフランシスコでの骨董取引から得た利益で、慶治はまず鯉川筋西側に広大な地所を購入、そこに自邸を構えると共に「関山」の名を冠した小学校を開設している。遅くとも明治3年秋頃のことであろうか。

これに先立つ明治2年2月5日、新政府は全国の府県庁に小学校の設置を奨励していたが、慶治が到着した当時の兵神一帯では、いまだ藩政期以来の寺子屋が幅を利かせていた。そのために、木造二階建て洋風校舎と前庭に運動場を設けた関山小学校の威容は、ひと際近隣住民たちの目を引いたに相違ない。

慶治はサンフランシスコ滞在時に、現地の初等^{グラマー・スクール}学校などを見学したであろう。自分の渡米中に由義が神戸洋学伝習所の設立を新政府に建言していたこともあり、新たな活動拠点で「関戸」の名を売るには洋風学校創立が効果的と考えた節もある。なお、関山小学校開設はこれまで由義の名を以て語られてきたが、これは由義と慶治を同一人物と見做したことによる。

由義も明治4年3月に兵庫県外務局勸業課少属として神戸入りし、ここに鯉川筋西の関戸邸は由義・慶治の事業基地として機能していく。由義が国際貿易や都市造成に関わる行政面で手腕を発揮したとき、その懐刀^{ブレイン}を務めたのは海外経験を持つ慶治であったと考えられる。そして、由義は官員たる立場を活かして、政商の三井組や小野組、あるいは北風正造や生島四郎太夫など地生えの豪商、さらには旧三田藩主従や兵庫県御用達の加納宗七等と誼を結ぶことで、主として慶治の領分である投機事業に必要な資金獲得^{たす}を扶けた。

慶治の真骨頂が神戸市街地における不動産売買、俗な言い方をすれば「土地転がし」にあったことは、さきに紹介したジョゼフ・ヒコの回想からも覗えよう。明治5年2月の土地永代売買解禁を受けて、慶治はサンフランシスコにおける骨董取引で得た資金を不動産買占めに投げ始めた。この頃の神戸は、外国人居留地付近にわずかな家が立っただけ

で、一般の人びとは外国人の来住を忌避し、所有する不動産を売り急いでいた。

それに乗じた慶治は自邸を構えた鯉川筋の地所を中心に、由義が造成に関与した山手に続く雑居地一帯および栄町通沿いの土地を入手し、造成後の地価上昇に乗じて貸与や転売を行った。由義の事績にある城ケ口共同墓地の開設や郵便所用地の売買も、慶治との連携で行った公算が高い。要するに、慶治は新興の地主型資本家となった。現在、慶治による土地取引の一端を示す、以下のような文書が閲覧可能である。

◇神戸大学附属図書館蔵『神戸開港文書』収録

- ・『関戸慶治温泉開拓願之義ニ付伺』提出出年月日不明
- ・『関戸慶治所有地図面并隣地境界表』明治6年1月
- ・『伏願』明治6年2月
- ・『(無題) 建屋地所共貸渡約定書』明治8年5月8日
- ・『同上英文』

◇神戸市立中央図書館蔵『神戸開港・居留地・神戸村文書』収録

英国人ジョーゼフに永代貸渡の土地 関戸慶治買受の一件

- ・『山手地所永代貸地の内 英人ジョーゼフ所有の地関戸慶治買受、ジョーゼフ地租前納にて上納済にて戻し方お伺い 地所掛』明治7年11月
- ・『外国人の貸地租下戻方伺』明治7年11月
- ・『仕訳書』明治7年11月
- ・『外国人へ永代貸地 内国人買請ニ付伺』
兵庫県令 神田孝平 内務卿 大久保利通
大蔵卿 大隈重信に伺い 明治8年2月
大久保利通の返書 朱書あり 明治8年3月15日
- ・『代価請取候儀実正也 然る上はレウエルス・ジョヨセフ商会所有の地面の通、地券并権理等書付関戸慶治に譲渡候也』明治7年11月24日
- ・『此書面奉願候』
第一区神戸関戸慶治 副戸長 関戸左一郎
兵庫県令 神田孝平殿 明治7年11月28日

これらのうち神戸大学附属図書館蔵『神戸開港文書』収録の『関戸慶治所有地図面并隣地境界表』は、旧生田川跡地に瀧道筋が竣功し、栄町通の造成も始まった明治6年時点で、関戸慶治が神戸市街に所有していた地所を特定できる図面である。

そこには「東城ケ口耕地并道限り 西諏訪奉表道筋上ノ方社地限り 南東ノ方城ケ口地類限り 中程英人アヘル、エ、ゼ、ガウール 西ノ方道限り 北艸山限り 西ノ方諏訪社地限り 右之通候也 明治六年第一月」との但し書きも添えられる。阪神間鉄道線路敷設予定地を挟んで山側の土地は升目状に取得し、のちに城ケ口墓地となる堂徳山南側の傾斜

面に位置する城ヶ口町一帯は大面積で取得したことがわかる。

由義が実質的な指揮を執った山手雑居地一帯の区画整備にともない、慶治は整備地区にある所有地を高値で兵庫県に売却したり、整備後に地価の上昇した土地を売却したり、外国人に高値で貸したりして巨利を得た。それを新たに地価上昇が見込める土地購入に再投資する循環取引＝土地転がしを繰り返したようだ。

『神戸開港文書』収録の『(無題) 建屋地所共貸渡約定書』明治8年5月8日と『同上英文』は、北長狭2丁目に所有する土地・家屋をエディ・メイフィールドに賃貸した契約書。また、神戸市立中央図書館蔵『神戸開港・居留地・神戸村文書』収録の文書類は、「英人ジョーセフ」から山手所有地440坪を買い取るにあたり兵庫県に提出したものである。

後者について付言すると、ジョセフ・ライドル・エリオットは明治2年4月より中山手通6丁目第15番地672坪8合を所有している。これが「英人ジョーセフ」と見て間違いなからう¹⁴³⁾。なお、『此書面奉願候』に記載された「副戸長 関戸左一郎」は由義の長男であることから、不動産売買は関戸家の同族事業であったことが判明する。

土地投機に絡む事業のなかでも、諏訪山温泉場の開鑿は、従来「関戸の代表的な事績」として語り伝えられてきた。ただし、多くの場合は由義の名で……。たとえば、『神戸開港三十年史』乾は「明治五六(5, 6)年の交、諏訪山^マ鉦泉の入湯場は開かれたり。諏訪山は中宮、花隈、宇治野、北野、二ツ茶屋六箇村〔「五箇村」の誤記か〕の共有抹地なり。其山麓^{あざしお}の字鹽の池と称する一区に鉦泉の湧出する所あり。明治三四(3, 4)年の頃より土地に着眼したる関戸由義は、早くも此鉦泉を以て温泉場を開かんと欲し、六箇村〔五箇村〕と交渉して一坪壹分貳朱の割合を以て其地を購う。已にして由義は之を前田又吉に貸地となし、又吉は資本を三田藩主に請ふて温泉の開業を為せり¹⁴⁴⁾」としている。

五箇村の入会地の購入資金は、由義の仲介で小野組より融通されたことから、同地での温泉場開鑿も由義の名で語られてきたが、じつはまがうかたなき慶治の事績である。その裏付けとなる史料が、『神戸開港文書』収録の『関戸慶治温泉開拓願之義ニ付伺』および『伏願』。明治6年2月提出の後者には「私所有地之内當港山麓別紙図面之場所より温泉湧出候に付凡七八尺堀穿候處地底一面之青巖硫黄氣を含湧出甚敷随て温度も増加候故當港在留之亜國醫師江試験を乞候處同人より別紙鑑定試験書差越候右は可貴有功之良泉に有之候間図面所有地内江土工を用ひ浴泉場并遊園地等開拓仕其余一圓建家造築仕度就ては市街之呼名無之候而者不都合に付関山町といたし度右御許容被下置度此段奉願候」と記載されている。

注目すべきは、「関山町」という地名だ。先述したように、明治3年神戸に進出した関戸慶治が最初に行った事業は、関山小学校の開設である。おそらくは、山手に拡がる广大

な土地に賭けた夢と野心を込めた命名であろう。それがいま、由義との連携によって着々と実現しつつある——そう実感したからこそ、神戸初の温泉地を擁する娯楽街に、かねてから温めてきた「関山」の名を冠そうと、兵庫県に申請したのではないかと。

いわゆる諏訪山温泉郷の造成に際しては、由義が花隈の割烹店常盤花壇主人の前田又吉に店舗開設を持ち掛けた。又吉もこれに応じて、同じく花隈に邸宅^{とさわ かなん}宜春園を構える九鬼隆義より融資を受けると、常盤花壇を諏訪山山麓の温泉場に移転、新たに温泉料亭常盤楼として営業を始める。明治15年に発刊された有力商家の絵入案内本『豪商神兵湊の魁』に描かれた「諏訪山温泉 常盤楼」を眺めれば、山麓の温泉郷に東・中・西の3店を構える威容を誇り、訪れる人びとも後を絶たぬ盛況ぶりとなっている。¹⁴⁵⁾

けれども、名亭常盤楼の誘致もあって、温泉郷としては大成功したが、慶治念願の「関山町」命名は実現しなかった。山麓地購入に融資した小野組が明治7 (1874)年11月に破産閉店したために、温泉郷を含む諏訪山山麓一帯約1万4,000坪の土地は大蔵省国債局の所有となる。すでに前年4月、小野組は「京都府への貢納金逃れ」とも噂された転籍事件を起こし、政府の心証を悪くしていた。¹⁴⁶⁾そんな小野組の支援を受けていた関戸一族の請願が兵庫県によって却下されたのも、ある意味、当然の結果といえる。

「関山町」が幻の町名に終わったことは、関戸由義・慶治の事績が今日に正しく伝承されないことの一因になった。仮に町名が残っていたなら、その由来となった人物の顕彰も行われるはずだ。ましてや由義が県官の立場で神戸市街造成に多大な貢献を果たしたのであれば……。それは旧生田川跡地に幅員10間の南北道を敷いた加納宗七の事績を称えた「加納町」の名が沿道の町場に冠され、顕彰のモニュメントも東遊園地に立つこととは余りに対照的と言わざるをえない。

話を戻すと、明治13 (1880)年に東京の製靴業者伊勢勝こと西村勝三が諏訪山温泉地の払下げを政府に申請した。これに対抗して、関戸由義・慶治、そして常盤楼を経営する前田又吉も、「この地を他郷人に取られてなるものか」と払下げを申請。結局、由義・慶治と親交の深い村野山人率いる兵庫・神戸区選出の議員団が陳情活動を行った結果、翌14年4月小野組から由義への融資額に1割5分の利子を付した金額で、国債局より温泉郷を含む諏訪山山麓一帯の払下げ認可を得る。¹⁴⁷⁾

ときの兵庫県令は由義と親しかった森岡昌純である。彼は区民代表と協議のうえ、貿易五厘金から支出した7,900円で諏訪山山麓地一帯を神戸市の公園〔現在の諏訪山公園と再度^{ふたたび}山公園^{やま}〕に再開発することを決定。その結果、諏訪山温泉郷も従前どおり神戸屈指の娯楽施設として庶民の人気を集め続けた。¹⁴⁸⁾

さきに折田年秀の日記と松平慶永の日記を紹介したが、いずれも明治13年10月末日から

同年末まで関戸由義（良平）・慶治（一平）が東京に滞在していた事実を記載している。ことによると、諏訪山麓地払下げの申請に関わる東上であったとも考えられる。

小野組の閉鎖後、関戸家の有力な資金元となったのは、栄町通に進出した三井組と旧三田藩主従である。前者は明治6年11月に小野組と共同で政府官金を扱う第一国立銀行を設立、栄町通4丁目に同行神戸支店を開設。小野組の倒産後は府県為替方も引き継ぎ、明治9年には栄町通3丁目に三井銀行神戸支店を開設している。また、後者は廃藩置県後に神戸進出を果たし、明治6年3月、栄町通3丁目に輸入商社志摩三商会¹⁴⁹⁾を設立した。

旧三田藩主の九鬼隆義は、幕末に家臣の川本幸民〔蘭学者で蕃書調所教授〕を介して福澤諭吉に師事し、維新後はその勧めに従って神戸進出と実業家への転身を果たす。この隆義の股肱である白洲退蔵^{たいぞう}と小寺泰次郎^{たいじろう}は、商会設立以前から神戸市街造成に便乗した不動産投資を手掛け、九鬼家の資産を殖やししながら自身も余禄に与った。加納宗七が敷いた瀧道沿いや由義が線引きした山手道路沿いの地所購入は、その名から「二タイ」と称された白洲・小寺の裁量によるものだ。彼らと由義・慶治を結びつけたのは、双方と親しい福澤¹⁵⁰⁾であったと考えて間違いない。

三井銀行や志摩三商会の存在によって、不動産売買に必要な資金は十分に賄える——そう計算した慶治は、新たな事業に関心をむけた。彼がかつてサンフランシスコで目にしたのは、貿易港の隆盛がもたらす市域拡張と市街整備によって地価が瞬く間に高騰する光景だけではない。

そもそも同地発展の契機は、1848年1月24日に始まるカリフォルニア・ゴールドラッシュ。その20年後に慶治がサンフランシスコの土を踏んだ時、ゴールドラッシュはすでに終わっていたが、一攫千金の夢を叶えた人びとがその財を元手に事業を展開、金鉱ブームの余韻はいまだその地を包んでいた。

そこで骨董品販売に従事した慶治が、短期間に空前の富を生み出した鉱山開鑿に密かな野心を抱いたとしても不思議はない。あまつさえ神戸港の背に屏風の如く連なる連峰では、江戸期に銀・銅・石炭等の採掘も行われていた。また、慶治の野心を叶える条件も整えられる。すなわち、明治5年3月20日に日本最初の鉱業法制「鉱山心得書」が、翌6年7月20日に民営鉱山に関する統一的鉱業法典「日本坑法」が制定され、民間鉱業権者に15年を年限とする借地によって請負稼業できることが認可されたのである。¹⁵¹⁾

由義に教唆されて旧生田川跡地に豪宕な南北道を敷いた加納宗七も、明治7年10月、八部郡^{おうぶ}小部村堂ノ前〔現在の鈴蘭台を含む神戸市北区山田町一帯〕で炭鉱開鑿に着手している。加納の試みは失敗に終わったが¹⁵²⁾、上記の法整備と舶来の開削技術の導入によって、全国各地で既存の荒廃した鉱山の再開発が急速に進んだ。

そのなかで、慶治は源平の古^{いにしへ}より隆盛を誇った多田銀銅山の開鑿に乗り出す。この鉦区は旧摂津国川辺郡・能勢郡・豊島郡、すなわち現在「北摂」と呼ばれる兵庫県川西市・川辺郡猪名川町および大阪府池田市・豊能郡の大部にわたり、東西・南北ともに10数キロメートルの範囲に¹⁵³⁾拡がる。慶治が北摂鉦山地域に食指を動かしたことは、従来の神戸実業史において全く顧みられなかった出来事である。

明治元年、日本初の政府直轄運営鉦山となった生野銀山〔現在の兵庫県朝来市生野町小野一帯〕は、御雇外国人技師ジャン・フランソワ・コワニエ指導のもとで、先進技術を導入して採掘方法の近代化が図られた。他方、政府支援を得られなかった多田銀銅山地域では、村落の衰退や荒廃を危惧した鉦山師^{やまし}たちが「日本坑法」制定を機に、阪神地域の資本家たちに投資を呼び掛けている¹⁵⁴⁾。慶治がただちにこれに応じたことは言うまでもない。

明治8年初春より慶治は兵庫県川辺郡民田村の鳴出・立鉦・厚朴、広根村字金懸間歩、銀山町の珍幸・櫻間歩、南田原の北浦・石金間歩を借区して採掘に着手、3月には民田村の字平井と山内を借地し、間歩絵図付の約定書を地元の鉦山師と取り交わしている。「^{まぶ}関戸慶治」の名が記載された公文書は以下のとおり¹⁵⁵⁾。

- ◇猪名川町ふるさと館保管『民田自治会文書』収録
 - ・「明治八年鉦山稼二付民田村字平井賃貸契約書」
 - ・「明治八年鉦山稼二付民田村山内地所賃貸契約書」
- ◇かわにし川西市史第六巻『国崎部落有文書』収録
 - ・「明治八年六月鉦山稼につき国崎村地所貸借契約書」

民田村字平井は東西300間南北500間、同村山内は東西500間南北700間に及ぶ鉦区であり、前者は15年間の借地料30円、更新は15年毎に30円、後者は年7円の15年契約で、更新時¹⁵⁶⁾も同様である。くわえて、『多田銀銅山遺跡（鉦山地区）詳細調査報告書』には、「¹⁵⁷⁾関戸陽一代理 関戸由義 印」と記載された土地借用関係文書が収録されている。さきに紹介したが、鉦山師であった旧家所蔵の證書類（未公開）にも、¹⁵⁷⁾関戸由義・左一郎・陽一の名が見える。どうやら多田銀銅山開鑿は関戸家を挙げての事業であったようだ。

慶治の鉦山開鑿事業は、当初すこぶる好調であった。『明治十年内国勸業博覧会出品解説』収録『金銀銅主要鉦業人一覧』には「¹⁵⁸⁾関戸慶治」の名が掲載され、以下の如き概要が示されている。

物名	府県名	産地	鑛脈	開坑年歴	産額	価額
銀銅鑛	兵庫県	摂津國川邊郡民田村字立鉦坑	根向南北	明治七年	拾萬貫	壹萬六千七百貳拾五圓
全	全	字鳴出	全	全	三拾貳萬五千貫	三萬九千七百七圓五拾錢
全	全	銀山町字柏梨	根向東西	全	三萬七千九百貫	九千五百拾圓九拾錢
全	全	字五着	全	全	六萬千貳百貫	壹萬四千六百三拾八圓

上記4鉦脈の生産額合計は、住友吉左衛門〔愛媛別子〕、五代友厚〔福島半田・滋賀蓬谷・奈良天明山・岡山和気山〕、岡田平太〔秋田尾去沢〕に次いで、堂々の第四位を占めた。『金銀銅主要鉦業人一覧』には、彼らのほかに「高知縣土族 岩崎彌太郎」の名も見え、採掘物名・産地は「銅鑛 岡山県 備中國川上郡吹屋村字吉岡 根向東西」とされている。¹⁵⁹⁾

既出の国崎部落有文書『鉦山稼につき国崎村地所貸借契約書』によると、明治8年6月、慶治は摂津国川辺郡国崎村総代理とも、同村一円の鉦山を借地料年間15円で無期限に借区する約定書を取り交わしている。そこは南が桐山坑から北が松が原坑に至る南北50町、東西20町に及ぶ大鉦区で、慶治は各種鉦物の採掘とそれに関連する精錬所・分析場の建造も認可された。¹⁶⁰⁾

けれども、明治16年12月31日に工部省鉦山課が刊行した『鉦山借区一覧表』掲載の主要鉦業人格付けを見ると、そこに関戸慶治の名前は見当たらない。¹⁶¹⁾ 明治18年に慶治は川辺郡広根村字櫻井坑の借区願を提出したが、鉦山調査官の齊藤精一が同年にまとめた『兵庫縣下鑛山概況』によると、慶治の管理運営する間歩はいずれも採掘規模が小さく、なかには稼働が断続的な間歩も数件あったとされる。『兵庫縣下鑛山概況』にある慶治関連箇所を以下に抄録しておく。¹⁶²⁾

- ◇摂津國川邊郡廣根村字金懸間歩 ⇒ 「明治八年以來関戸慶治借區開坑シ断続今日ニ至レリ」
- ◇櫻（櫻井）間歩 ⇒ 「明治某年関戸慶治借區開坑セシトモ採掘スルノ期ナク近年ハ休業同様ナリ」
- ◇北浦間歩と石金間歩 ⇒ 「坑内ハ湧水至ツテ寡ク排水ノ憂ナシ」
- ◇以上4件に川邊郡銀山町珍幸間歩を加えた5件の間歩 ⇒ 「共ニ關戸慶治ノ借區スル所ト雖モ目下（明治十八年三月）採鑛スルモノハ二ヶ山（北浦・石金間歩）ニ過キス餘ハ探鑛或ハ坑内普請ヲ事トス而シテ全山総費額貳百八圓貳拾五錢五厘ニシテ収入高貳百五拾壹圓八拾壹錢貳厘ナリ故ニ四拾三圓五拾六錢ノ益アリトス」
- ◇川邊郡猪瀬村字柳ヶ谷間歩 ⇒ 「稼主ハ同村平民上神源右衛門ナルモノニシテ農業ノ間隙ニ其業ヲ営ミ舊坑ヲ探ルモ未ダ製煉ニ耐ユヘキ鑛石ヲ得スト云該山ハ素ト關戸慶治ノ借區タリシカ后上神借區券ヲ握ルニ方リ互ニ争論ヲナシ終ニ郡役所ノ判決スル所トナリテヨリ殆ト四年間舊坑修繕ニ盡力シ目今（十八年三月）ニ至ルマテ費セシ金額五百圓内外ナリ（中略）稼行少ク休業多キ有態ニテハ舊坑ヲ全ク修繕スルハ前途尚ホ遠シト謂フ可シ因テ本人ニ論シテ

云ク今日ノ景況ヲ以テスレハ寧ロ断然廢業スルノ優レニ若カスト然レトモ彼之ヲ諾セス抑些少ノ資力ヲ有シ充分ノ業ヲ操ル能ハス寸進尺退失敗地ニ塗り始メテ臍ヲ嚙ムノ嘆ヲ招クモノナルカ」

◇川邊郡肝川村字樋ノ上千駄坑 ⇒「素ト關戸慶治ノ借區タリシモ會テ充分ノ業ヲ操ラス休業セリ明治十四年三月九日仲定助其借區券ヲ受ケテヨリ以後舊坑ヲ修繕スルニ齟齬タルモ未タ鑛石ヲ採取スルニ至ラス (中略) 休稼相半ハスルノ景況ナレハ老牛ノ進歩ニ劣レル亦宜ナルカナ」

このように慶治の借区地は、いずれも富鉱脈ではなく、早い時期に採掘量の限界に至ったと推測される。斉藤の調査時には投資額の回収も危うい状況ではなかったか。にもかかわらず、慶治は明治18年に川辺郡広根村字櫻井大金間歩を借区し、翌年には同郡銀山町、猪瀬、国崎でも鉱業権を取得する。上掲『鉱山概況』の記述に照らすと、慶治の動きはいささか合点がいかない。

しかも、さきに紹介した折田年秀の日記には、明治18年4月19日付で「關戸一平并ニ本城新介來り閑話す、關戸ハ出雲へ銅山検査ノ為ニ參ルニ付、千家(尊福)氏へ轉書ヲ乞フカ故ニ、千家・北島(脩孝)ノ兩名へ宛テ書面ヲ送リタリ」と記されている。ここに登場する「出雲(へ)銅山」とは、出雲大社いずものおおやしろの北方に広がる竜山(標高312メートル)のことであろう。けだし、この時期、「千家尊福」は第80代出雲大社こくそう国造を、また「北島脩孝」は神道出雲教初代教長を、それぞれ務めていたからだ。¹⁶⁴⁾

付言すると、竜山は西麓に鷺銅山、東麓に鵜峠銅山を擁していた。前者は石見銀山の先駆けをなした出雲最古の鉱山であるが、明治18年当時は閉山状態に置かれている。また、慶応4年に出雲郡坂田村の鉱山師勝部本右衛門が発見した後者もまた、明治11年に荒銅350トンを産出して最盛期を迎えるが、その後は下降線を辿りつつあった。¹⁶⁵⁾

慶治が貧鉱脈の間歩に執着したのは、一体いかなる理由によるものか。一か八かの逆転に賭けた、ということではあるまい。損失を回避するための精算があつてのことだろう。それにはおそらく、明治20年の三菱による多田銀銅山買収が絡んでいたと考えられる。

『三菱社誌』には、多田銀銅山買収に関する原史料が時系列に収められる。そのうちの買収先一覧には、南五着坑・北五着間歩をはじめ、慶治が一庫村、民田村、国崎村から借りた鉱区も含まれている。¹⁶⁶⁾

そもそも三菱が鉱山業に関与した背景には、福澤諭吉の姿が見え隠れする。三菱を創業した岩崎彌太郎の股肱には慶応義塾出身者が多く、また彌太郎の長男でのちに三菱総帥となる久彌は義塾幼稚舎に学んだ。福澤の助言を得た彌太郎が開設した三菱商業学校の講師陣は、義塾出身者が主力を占めたことから、福澤は「あたかも義塾分校である」と井上馨、

伊藤博文、大隈重信に宛てた書簡に記している¹⁶⁷⁾。

福澤は岩崎彌太郎に高島炭鉱の買収を勧めた経緯がある¹⁶⁸⁾。高島炭鉱は長崎港外の高島、中ノ島、端島にまたがる炭鉱で、熱量の高い良質炭を産出することで知られた。佐賀藩経営であり、グラバー商会、ついでボードイン商会との共同開発を経て、明治6年に一旦官有化された後、翌7年後藤象二郎〔土佐藩出身。大政奉還に尽力し、新政府の参議拜命〕に払下げられた。

しかし、後藤が放漫経営を行ったために利益が上がらず負債が累積、融資元のジャーディン・マセソン商会は返済訴訟を起こす。後藤の政治的才幹を惜しんだ福澤は、莫大な借財による後藤の破滅を憂慮すると同時に、高島炭鉱の経済的価値を十分に発揮させるためにも、その管理運営を三菱に委ねるのが良策と考えた。

そこで、明治11年11月、門下生で三菱幹部の石川七財を介して彌太郎の意向を打診したがまとまらない。翌12年10月、「いまならうまくいく見込みもあろうか」と判断した福澤は、やはり門下生で三菱幹部の荘田平五郎を介して「炭鉱の件につき面談を乞う」と持ち掛け、10月12日に彌太郎と会見。それが糸口となってようやく買収話が進み、明治13年7月5日に彌太郎は高島炭鉱の買い取りを決意する。実際の買収は翌14年4月であり、彌太郎は即金を払ってこれ入手、以降連年巨額の利益が三菱にもたらされる。

明治13年7月6日付岩崎彌太郎宛書簡「彼ノ一条遂ニ御断行との吉報、誠ニ近年之一大怪事、小生之喜悦ハ之を筆端ニ尽し難し」、同日付岩崎彌之助宛書簡「彼ノ一条も遂ニ好結果ニ至り、近年之一大快事」は、いずれも福澤が自身の高弟たちを介して三菱の鉱山事業に深く関与していたことを裏付ける¹⁶⁹⁾。

そして、福澤は関戸由義・慶治とも懇意であった。とすると、鉱山開鑿事業が重荷となったふたりより相談を受けた福澤が、彌太郎の死後に三菱を継いだ岩崎彌之助〔彌太郎の実弟〕を説いて、多田を含む川辺郡鉱山の「処理」を持ち掛けた可能性は高い。

この時期、関戸一族の権勢にはいささか翳りが見え始め、由義は健康を害していたと考えられる。由義が仲介した不動産投資によって旧主奥平家の資産を殖やすことが叶った福澤は、三菱に多田銀銅山の買収を勧めることで、かつての恩に報いようとしたのではなかろうか。

三菱もまた、長崎高島炭坑を傘下に収めるに際して、福澤の労を得ている。ひとまず、貧鉱脈の多田銀銅山を引き取り、その後本格的な稼業を為さないうまま、明治26年堀伴成〔藤十郎と通称。島根県津和野の鉱山師〕にこれを譲渡するという一見「無駄足」ともとれる順を踏んだのは、福澤への報恩も絡んでのことかもしれない¹⁷⁰⁾。

付言すれば、由義・慶治は加納宗七にも川辺郡の鉱山開鑿を持ち掛けた形跡がある。そ

れを示すのが、以下の『工部省告示』¹⁷¹⁾である。

「第拾六號」

- 一 兵庫縣攝津國川邊郡國崎村字鹽待間歩銀銅鑛借区假證券借第九百八拾五號
右ハ兵庫縣攝津國菟原郡葺合村平民加納宗七へ明治十一年十一月一日下渡今般引上ヘキ分
右證券何レモ所在不分明之旨届出候ニ付發見候者ハ速ニ管轄廳へ可届出尤該證券ハ無効ニ属
シ候條此旨告示候事

「第三拾六號」

- 一 兵庫縣攝津國川邊郡國崎村字鹽待間歩銀銅鑛借区假證券借第九百八拾五號
同國菟原郡葺合村平民加納宗七へ明治十一年十一月一日下渡置候分
(中 略)

右證券何レモ所在不明之旨本年四月第十六號ヲ以テ及告示候處今般發見ノ届出候條
此旨更ニ告示候事

明治十八年十一月二十八日

工部卿伯爵 佐々木高行

すでに加納は明治7年に堂ノ前炭鉱の開鑿に失敗していたが、鹽待間歩への投資は「名誉挽回」の機会と考えたのであろうか。同じ頃、紀伊国伊都郡御所村丸山銅山〔現在の和歌山県伊都郡かつらぎ町御所近郊〕の開鑿にも着手しているから、加納は鉱山開鑿にかなり野心を抱いていた節もある¹⁷²⁾。ことによると、加納のほうから慶治か由義かに、「川辺郡に何か良い物件はないものか」と照会を求めたのかもしれない。

ところが、鹽待間歩からは思ったほどの銀・銅を採掘できず、しかも丸山銅山の開鑿にも失敗したことから、加納は急速に鉱山事業への関心を失ったのであろう。ために、両関戸は加納より鹽待間歩の採掘権を譲り受け、三菱による多田銀銅山買収時に併せて処分したと考えられる。上掲『工部省告示』はおそらくその間の手続きに関わるものであろう。

関戸慶治が富鉱とは言えぬ多田銀銅山の開鑿に深入りしたのは、おそらく神戸市街の造成が一段落し、土地取引が当初ほどには利益をもたらさなくなったためではなかろうか。*THE HIOGO NEWS* December 23rd. 1887 には、「Osaka Nippo (大阪日報)」より転載した以下の記事が見られる¹⁷³⁾。

Mr. SEKIDO, of kobe, recently purchased in conjunction with some friends a mine in Nosegori, Osaka Fu, containing silver and copper. Permission to develop the property has just been requested ... (神戸の関戸氏は最近、大阪府下能勢郡の銀銅山を友人数人と共同で購入し、開鑿許可を申請中とのこと……)

“Mr. SEKIDO, of kobe (神戸の関戸氏)” が慶治なのか由義なのかは判然としないが、由義は翌21 (1888) 年8月に逝去するまで健康を害していたことから、おそらくは慶治を指すと考えてよかろう。彼は三菱による多田銀銅山買収のお陰で一旦窮地を脱してからも、新たな鉱山開鑿に性懲りもなく手を染めたことになる。¹⁷⁴⁾

ジョセフ・ヒコは回想録に「投機師は神戸において自分のおだやかな人生航路を歩きつづけた。『しかし』と、1882 (明治15) 年に事の次第を告げてくれる人があった。『あの男は今完全に落ちぶれて、いま破産の一步前というところなんです。まあ、死人に余計なせっかいをする者は栄えたためしがないというわけですな』¹⁷⁵⁾」と書き留めた。

「投機師」とは慶治のことであり、「死人に余計なせっかい」とは由義と結託して旧在所の墓地群を廃し、自身の所有地に設けた城ヶ口共同墓地に改葬した一件を指す。市街造成に乗じた土地投機で得意の絶頂にあった慶治を「破産の一步前」に追い込んだのは、多田銀銅山開鑿の蹉跌であったに相違ない。

神戸を日本のサンフランシスコに見立てた慶治は、北摂に広がる鉱山地帯にカリフォルニア・ゴールドラッシュの夢を追ったのだろうか。この夢が潰え始めた明治10年代半ば以降、関戸由義・慶治の影は神戸実業界で次第に薄くなっていく。

VI 黎明期神戸、謎の一族

関戸由義と関戸慶治は密接な連携を保ちながら、神戸市街造成に深く関与し、今日在る神戸の原型を作り上げることに大きな貢献を果たした。その際 ——

◇関戸由義＝官側にあつて都市造成・教育事業並びに資金獲得を担当

◇関戸慶治＝市井にあつて土地を原資とした利殖事業を担当

という役割分担が為されていたと考えられる。サンフランシスコでの見聞をもとに慶治が練った策は、由義の権勢を介して実現され、由義本人には名声を、慶治には利益をもたらし、関戸家は黎明期神戸の名士たる地位を確立する。

明治4年11月の廃藩置県を経て集権的統一国家への道を歩み始めた明治政府は、府県のもとに「区」という新しい行政単位を設定し、同年4月4日戸籍法 [太政官布告第170号] 「毎区戸長並二副ヲ置キ、長並二副ヲシテ其区域内戸数人員生死出入等ヲ詳ニスル事ヲ掌ラシムルヘシ」にもとづいて、戸籍事務を遂行する地方行政機関として戸長役場を置く。そして、これを管理する戸長・副戸長には当初、庄屋・名主・年寄が任命されたが、明治5年6月17日、「自今ハ必ズ当器人望コレ有ル者ヲ推挙致スベシ」との人材登用方針が県達110号にて明確に¹⁷⁶⁾された。

明治12年1月、兵庫県は従来の区制を廃止、新たに1区33郡を置くが、そのうちの1区

が神戸と兵庫とを空間的に連続させた「神戸区」であった。初代区長には武井正平が就任、そのあと明治14～18年は村野山人が同職を務める。同区内町村を管轄するために、3つの戸長役場が設けられ、そのうちの神戸北長狭通四丁目外五十ヶ町戸長役場は関戸邸の隣接地に置かれたが、由義の長男左一郎がこの戸長役場の副戸長に就任している。¹⁷⁷⁾

有力な資金元であった小野組の閉店後、由義・慶治の事業資金は不動産の転売益や三井銀行・志摩三商会の融資によって賄われたが、多田銀銅山開鑿は関戸家の資力になんかぬ打撃を与えた。そのせいであろうか、明治10年代に入ると、神戸実業史に由義・慶治が顔を出す頻度は次第に低下する。少なくとも市街造成と土地取引を組み合わせた循環利殖商法で巨利を得た往時の勢いは失せ、その代わりに地域社会の発展に尽くす地主型資本家の相貌を覗かせていく。そんな活動を数件拾うと ——

明治10年2月5日、神戸京都間の鉄道開業式が、明治天皇臨席のもとに挙行された。午前8時40分に京都御所を出た天皇は、七条停車場から御料車に乗り込み、梅田停車場に午前10時30分に到着、開通式典に臨む。終了後、11時10分の列車で梅田を去り、12時15分神戸停車場に到着、停泊中の艦船の祝砲に迎えられた。

『神戸市史 本編各説』には「北長狭通四丁目関戸慶治は神戸商人頭取として御前に進み祝辞を奏上し、兵庫居留地會議議長ナサン・ジェー・ニユウイター〔居留地35番地アメリカ領事館に駐在するアメリカ領事 Nathan J. Newwitter のこと〕は兵庫縣廳を経て祝詞を捧呈したりき」との記述がある。¹⁷⁸⁾ ここでの「頭取」は正式な役職名ではなく、「代表」という程度の意味であろうが、慶治が神戸実業界の重鎮であったことを示す逸話といえよう。

また、由義・慶治共に各方面への寄付を行っている。明治9年11月の栄町通火災に際して、慶治は罹災民を救済すべく金銭支援を実施した。同12年夏には、由義が伝染病予防のために硫酸鉄1万ポンドを無償供与している。¹⁷⁹⁾ 同14年、由義は兵庫県為替方に対してコレラ予防策として上水道を早急に整備すべきことを訴えた。¹⁸⁰⁾

教育への関心は、由義・慶治共に高かった。由義による神戸洋学伝習所設立の建議、慶治による関山小学校の創立、神戸商業講習所に対する自邸洋館の無償提供は、そのことを裏付ける。とくにプロテスタントに信仰を寄せる由義は、伝統的な男女観に批判的な福澤の感化を受けた志摩三商会の幹部と共に、神戸における女子教育の発展に尽力した。¹⁸¹⁾

明治10年、由義は志摩三の九鬼隆義、白洲退蔵等と連名で英和女学校〔現在の神戸学院大学の前身〕に600円という高額寄付を行っている。同校は米国伝導教会より派遣されたイライザ・タルコット (Eliza Talcott)、ジュリア・ダッドレイ (Julia Elizabeth Duddley) 両宣教師が明治6年花隈村に開いた私塾を前身とし、同8年山本通〔現在の神戸市中央区山本通4丁目神港学園高校敷地〕に移って寄宿制学校となった。¹⁸²⁾

明治20年7月27日付『神戸又新日報』には「日本婦人の地位向上を目指して九鬼隆義、野村致知、佐畑義之、関戸由義等が神戸元町4丁目122番地神戸小学校分校跡地に手藝学校を創設、8月1日より開校」との記事も見える。¹⁸³⁾

由義と福澤はおそらく、西洋型の合理的思考や進取の気質のほかに、新生国家の将来を担うべき次世代への期待感とその成長に献身する義務感を共有していたのであろう。明治13年1月25日に福澤の提唱で結成された交詢社に由義も加入したことはすでに紹介した。明治13年7月14日付福澤より白洲退蔵宛書簡の冒頭には「拝啓。過日関戸氏出府、何もかも能く相分り、何もかも小生之察したる処ニ違はず」との一節が見られる。どうやら由義は交詢社加入の挨拶をしがてら、当時、殿様商売に傾いていた九鬼隆義の近況を福澤に伝えたい¹⁸⁴⁾らしい。

このように福澤は由義に一目置き、親しく交際していたが、由義と直接交わした書簡等はいまだ発見されていない。また、福澤と慶治との間に親交があったかどうかも定かでない。そして、一通の奇妙な書簡に行き着く。

由義逝去から約1年を経た明治22年10月15日、福澤は駐仏公使の田中不二麿に、ベルギー留学を希望する村瀬春雄の世話を依頼している。曰く「(前略) 陳ハ此生ハ村瀬春雄と申、神戸故関戸由義氏之ニ男。今度白耳義之商法校へ入学之積ニ而、先ツ其御地まで罷越候(中略) 百事不案内之少年、何か之義ニ付御指図奉願候事も可有之、都而在留中之方向を誤らざる様、御添心之程奉願候。関戸由義ト申ハ御承知も可有御座哉、旧越前藩之人ニ而、多年神戸ニ居を占め、随分事を為したる人物。不幸にして四カ年前ニ物故、此生ハ他姓を名乗り候得共、実之次男ニ御座候(後略)」¹⁸⁵⁾と。

由義の没年月日は、墓誌と『神戸又新日報』掲載の死亡記事から、「明治21年8月17日」に相違ない。にもかかわらず、福澤が「四カ年前ニ物故」と記したのは、いったいどういうことなのか。仮に「四カ年前」ならば、明治18年頃に由義は死去したことになる。福澤ともあろう者が、昨年死去したばかりの知人の没年を間違うであろうか。ましてや書簡は、由義の次男村瀬春雄の行く末に関わるものなのだから……。

ジョゼフ・ヒコは回想録の中で「神戸の投機師」こと慶治にふれて、明治15年時点で「完全に落ちぶれて破産の一步前」、その数年後に「乞食同然の姿で死んでしまった」と記している。さすれば、明治18年頃に死去したのは関戸慶治であり、これが「(由義は) 四カ年前ニ物故」という福澤の思い違いを誘発したと考えられなくもない。

けれども、明治25年発刊『日本紳士録 第二版』「せ」項に「關戸慶治 神戸市 三宮」とあり、慶治はこの時点でまだ健在だった可能性が高い。やはり福澤の勘違いではなかろうか。さもなくば、書簡を読下す際に、筆耕者が「前年」と「四カ年」は誤読したとも考

えられる。

なお、慶治の居住地が「神戸市 三宮」となっていることに関連して、川嶋「一斑」に「関戸邸のあった北長狭通4丁目は佐野病院になった」旨の記載があるのは興味深い¹⁸⁶⁾。神戸医学校で教鞭をとる佐野誉が明治21年4月1日に同病院を開業した当初、その地所はオランダ人〔元オランダ領事コルトハウス〕の所有であったが¹⁸⁷⁾、明治27年の病院拡張に際して佐野が正式に買い取った。

佐野は神戸医学校に勤務した頃から兵庫県令内海忠勝、同県少書記官村野山人と親しく、また開業当初の病院は関戸邸に隣接していたことを考えると、当時体調が思わしくなかった由義の診察・診療を行っていたと推察される。折田日記にも佐野の名がしばしば登場し、折田の主治医を務めていたことが覗える。日記の明治28年6月22日には「一、佐野病院開院式ニ付、大鯛貳尾并ニ松之盆栽壹個、玉蓮ニ花ヲ送ル」とあり、佐野が1年前に買い取った北長狭通の地所に病院を改築し、開院式を催したことが伝えられている¹⁸⁹⁾。

由義死後の関戸一族については消息が定かでない。由義の遺族は、鉾山開鑿に深入りし、家財を傾けた慶治に対して複雑な思いを抱いていたかもしれない。由義亡き後、すっかり精彩を欠いた慶治は三宮に移り、手許に残った所有地所を切り売りして食いつないだのではないか。左一郎をはじめとする由義の子どもたちは、損害保険の発展に尽力した二男の村瀬春雄、金融業界で活躍した四男の関戸陽一を除くと、市井で静かな生涯を送ったと考えたい。

思えば260年もの治世を維持した江戸期は、身分と分際の支配する時代でもあった。この制約を克服する道は武術と学問であったが、封建秩序が崩壊を迎える頃、そこに実業が加わる。いわゆる立身出世に連なる梯子に群がったのは、これを登る以外に新たな世で陽の目を見ることが叶わないという焦燥感に駆られた農民や諸藩の下級武士である。そのうちの或る者たちは、我が身に授かった小石を才覚や技能に磨きあげることで、思わぬ世間歩きをさせられてしまう。

開港直後の神戸は、支配権力の不在地帯であったが故に、こうした類いの人間が「開化」のみを指針として自由闊達に振る舞える空気に満ち、これがまた磁石のように作用して、時勢の急転による価値観の変化に鋭く感應した人びとを各地から引き寄せた。言うまでもなく、我らが関戸由義・慶治もそうした類いの人間にほかならない。

ふたりの関戸は、港都神戸の開発史や実業史の中に、いかにも洋行帰りの切れ者として登場する。しかしその生い立ちもわからぬばかりか、同一人物として語られることも往々あった。そのときに主語を務めることの多かった由義はともかくとして、慶治のほうはどこでどう死んだのかについても現時点では定かでない。

瀧道〔現フラワーロード〕と栄町通の造成、山手地域を縦横に走る街路の整備、そして洋式学校の開設等は、神戸近代史に燦然と輝く事績というに値するが、神戸市が正式に誕生した明治22年以降、まるで市民が意識的に忘れようとしたのではないかと思えるほどに、由義と慶治の姿は歴史の表舞台から消えていく。

おそらくは官民癒着による土地投機が余りに狡猾であったがゆえに、由義・慶治の功罪は相半ばせず、「罪」の側面が世間に強く印象づけられたためではなかろうか。それでも、両名が隠然たる権勢を誇った間、表立った批判を寄せる者は少なかったであろう。が、由義の逝去を機に、関戸家に対する世間の風当たりは次第に強まる。そして、その功績が顕彰されることもなく、それどころか口にするのも憚られる出来事として、生前のふたりを知る人びとの記憶の中に封印された観もある¹⁹⁰⁾。

由義の知人安藤行敬からの聞取りにもとづく川嶋「一斑」が長らく放置される一方で、生い立ちに関する調査を忌避した赤松「先覚」の誤った解釈が流布し、神戸市街造成の影の立役者の生涯は、混乱と錯綜に彩られたまま、それでも辛うじて今日まで細々と伝えられてきた。とはいえ、近代神戸の発展をそれに寄与した人物群より紐解いた一坂太郎『ひょうご幕末維新列伝』に、関戸由義・慶治に関する記載は全くない。加納宗七、志摩三商会、ジョゼフ・ヒコには各1章を設けてふれているにもかかわらず¹⁹¹⁾、である。

このことはしかし、赤松や一坂の責任では決してない。『神戸財界開拓者列伝』も『ひょうご幕末維新列伝』もいずれ劣らぬ名著であり、神戸史の解明と深化に果たした貢献は測り知れない。逆に言うと、由義・慶治が両泰斗の目線を狂わせるほどに不可解な存在であった、ということだろう。

文明開化の眩い光彩が作った陰影の中を、由義と慶治が^{こもり}蝙蝠然として舞い飛び、やがて自らも陰に溶け込んで消え去るとするのは、夢幻の如き妖しさに彩られた原風景ではないだろうか。

港都神戸の近代的市街造成において黒子の役割を果たしたふたりの生涯は、本稿に示した新事実の発見と状況証拠による推理を以てしてもなお、その大部がいまだ闇の中に眠る。開港150年を間近に控える神戸、その原点に秘められた謎の解明を急がねばならない。

注

- 1) 松田裕之 (2014年) 『草莽の湊 神戸に名を刻んだ加納宗七伝』 朱鳥社。
- 2) 松田裕之 (2014年9月) 「関戸由義事績考 —— 神戸市街造成の謎を追って —— 」 『神戸学院大学経営学論集』 第11巻第1号, 217~233ページ。
- 3) 松田『宗七伝』 175ページ。
- 4) 福井県立図書館保管『松平家文庫』収録『新番格以下 増補雑輩』。

- 5) 早稲田大学図書館所蔵『大蔵省官員録』[明治三, 書写資料] 収録。
- 6) 朝倉治彦(1981年)『明治初期官員録・職員録集成』[第2~3巻] 柏書房記載。
- 7) ただし, これは三井系列の三井不動産レジデンシャルのホームページ“KOBE OLD & NEW / Kobe of Kobe”に掲載されており, 三井文庫は神戸の土地開発に関する史料も所蔵していることから, 「よしつぐ」という読み方を軽々に否定することはできない。
- 8) この説を採るのは, 慶應義塾(2001年)『福澤諭吉書簡集』[第3巻] 岩波書店, 13~14ページ「四九七 白洲退蔵 明治十三年七月十四日」註釈; 成田謙吉(1981年12月)「福澤諭吉と神戸」神戸市紀要『神戸の歴史』第5号, 30~36ページ; 鈴木正幸・布川清司・藤井讓治(1994年)『兵庫県の教育史』思文閣出版, 171ページ; 加藤詔士(2009年)「神戸商業講習所と慶應人脈」『福澤手帖』第142号, 20ページ等である。
- 9) 2014年7月28日午前10時49分付高田義久氏より大安榮見氏宛のファクス「お問い合わせの神戸由義について」。大安氏より筆者に転送。当時, 病の篤かった大安氏の温かい御協力に深謝すると共に, 心より御冥福をお祈り申し上げる。
- 10) 福井藩人事諸記録の全貌については, 吉田健「幕末維新期の福井藩人事関係資料(松平文庫)について」福井県文書館『福井藩士履歴 1 あ~え』(2013年2月)福井県文書館資料叢書9を参照。
- 11) 舟沢茂樹(1970年)「福井藩家臣団と藩士の昇進」『福井県地域史研究』創刊号によると, 嘉永5(1852)年の福井藩家臣団の家格別人数は, 武家奉公人にあたる荒子・中間等の小者973人を除くと2,700人であり, 諸組[足軽]はその内の1,341人を占める。のちに小者973人も藩士身分を主張し, 明治20年代まで争議が続いたという。
- 12) 2014年8月23日14時23分受信の長野氏より筆者宛てEメールによる。
- 13) 本多修理著/谷口初意校訂/大久保利謙解題(1974年)『越前藩幕末維新公用日記』福井県郷土史懇談会, ◇順に423, 502, 573, 639ページ。
- 14) 福井県文書館蔵『松平文庫』収録『元陪臣』乾・坤。なお, 明治2年以前に主家を辞した者が採録されていない点については, 2015年3月6日10時10分受信の長野氏より筆者宛てEメールで確認した。
- 15) 石橋重吉編(1942年)『幕末維新福井名流戸籍調』福井市立図書館, 62ページ。
- 16) 村田誠治編(1898年)『神戸開港三十年史』乾・坤神戸開港三十年紀念會; 神戸市役所編纂・発行(1924年)『神戸市史本編総説』/『神戸市史本編各説』。
- 17) 赤松啓介(1980年)『神戸財界開拓者伝』太陽出版, 519ページ。
- 18) 神戸大学附属図書館蔵『神戸開港文書』収録『(無題) 建屋地所共貸渡約定書』『同前英文』明治8年5月8日
- 19) 落合重信覆刻・解説(1977年)『明治十六年一月調 兵庫県八部郡地誌』後藤書店, 714ページ採録。
- 20) 赤松『前掲書』624ページ。
- 21) 城ヶ口墓地を神戸区追谷墓地に全面移転した経緯については, 神戸市神戸財産区編・刊(1941年)『補修 神戸区有財産沿革史』262~292ページ参照。
- 22) 2014年8月21日神戸市追谷墓園第19区にて確認。

- 23) 明治21（1888）年8月18日付『神戸又新日報』第1287号掲載「関戸由義氏死す」より。
- 24) 川嶋禾舟（1933年6月）「関戸由義氏事蹟一斑」『兵庫史談』2巻6号，59ページ。
- 25) 折田年秀（1997年）『折田年秀日記 第二』湊川神社，528ページ。
- 26) 交詢社編・発行（1892年）『日本紳士録 第二版』889ページ。なお，同書第一版（明治22年）と第三版（明治29年）以降の版には「関戸慶治」の記載が確認できない。
- 27) 明治21（1888）年8月18日付『神戸又新日報』第1287号掲載「関戸由義死去」，明治21年8月19日付『同前紙』第1288号掲載「関戸由義死去」より。
- 28) 明治21（1888）年8月22日付『神戸又新日報』第1290号掲載「會葬者へ御禮」，明治21年8月23日付『同前紙』第1291号「會葬者へ御禮」より。
- 29) 岩本啓治（1964年）「村瀬先生の倂」村瀬春雄博士記念事業会編『村瀬春雄博士の面影』同文館収録；日本力行会出版部編纂・発行（1903年）『現今日本名家列傳』427～428ページ「リサンジェー，アン，シアンス，コムメンシヤル 村瀬春雄君」。
- 30) 2014年10月19日猪名川町立ふるさと館にて確認。
- 31) 日本銀行調査局編・刊（1974年）『日本金融史資料 昭和編』第35巻，416ページ。
- 32) 天羽英二日記・資料集刊行会編・刊（1990年）『天羽英二日記 第3巻』129，420ページ。
- 33), 34) 2015年2月28日神戸市神戸追谷墓園第19区にて確認。
- 35) 『松平文庫』収録『士族 二』採録「本多勝三郎（消線）貴一」より。
- 36) 2015年3月18日神戸市鶴越墓園にて確認。
- 37) 福井県立図書館保管『松平文庫』収録『御用日記』[2014年9月18日同館の許可を得て閲覧・撮影]。
- 38) 福井市立郷土歴史博物館保管『礫川文藻』坐右日簿 [2014年9月17日同館の許可を得て閲覧・撮影]。
- 39) W・E・グリフィス著／山下英一訳（1984年）『明治日本体験記』[東洋文庫430] 平凡社，232～233ページ。
- 40) 山内直一編（1910年）『兵庫縣人物列傳 第一編』興信社出版部「神戸學務委員 本多精二氏 神戸市中山手通四丁目一〇一」86ノ1～86ノ2ページ。
- 41) 神戸市文書館架蔵『神田兵右衛門家文書』収録の本多貴一から神田兵右衛門宛書簡年不詳10月14日，11月13日。
- 42) 山内『前掲書』86ノ2ページ。
- 43) 三田商業研究会（1909年）『慶應義塾出身名流列傳』実業之世界社「をおノ部 小柳津要人氏」231～232ページ。
- 44) 『越前藩幕末維新公用日記』697ページ。
- 45) 石橋『前掲書』62ページ。
- 46) 山内『前掲書』86ノ2ページ。
- 47) 松田「事績考」227ページ。
- 48) Library of Congress の“Chronicling of America” Historic American Newspapers より検索。
- 49) 上塚司編（1936年）『高橋是清自伝』千倉書房，68ページ。
- 50) 慶應義塾福沢研究センター編（2010年）『福沢諭吉事典 慶應義塾150年資料集』[別巻二]

慶応義塾, 62~68, 79~83ページを参照。

- 51) 『同前書』100ページ。
- 52) 福井県立図書館保管『松平文庫』収録『御本丸一橋紀州田安京都江戸大坂大津柏崎』採録「鈴木三右衛門養子 関戸左一郎 一三人扶持」。
- 53) 『高橋是清自伝』68ページ。愛媛県史編さん委員会(1988年)『愛媛県史 経済社会5 社会』愛媛県によると、城山は明治元年(1868年)11月24日、外国官判事試補都築莊蔵〔宇和島藩出身〕に対して、日本人ハワイ移民の窮状を訴える「サンフランシスコ新聞抜書訳」を添付した上申書を提出している。
- 54) 長野栄俊(2013年)「岡倉天心の父親について」佐々木美帆・椎野晃史・長野栄俊編『生誕150年・没後100年記念「岡倉天心展」』福井県立美術館, 214~217ページ。また、神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編(1958年)『神奈川県郷土資料集成・開港編』収録「安政六未年開港より 横濱商店時情書 越州屋小左右衛門代 金右衛門」124~128ページは、越州屋金右衛門こと岡倉勘右衛門が福井藩制産局に提出した開店事情に関する覚書である。
- 55) ヴァン・リードの生涯については、渡辺礼三(1986年)『ハワイの日本人・日系人の歴史』[上]ハワイ報知社, 151~160ページに詳しい。
- 56) 長野「岡倉天心の父親について」217~218ページ。
- 57) 『越前藩幕末維新公用日記』513, 531ページ。
- 58) 牛島秀彦(1989年)『行こかメリケン, 戻ろかジャパン ハワイ移民の100年』講談社文庫版, 31ページ。
- 59) 『同前書』39~40ページ。
- 60) 『同前書』15~26ページ。
- 61) 福井県文書館収蔵『松平文庫』収録『新番格以下 五』採録「柳本久兵衛」;熊澤恵里子(2007年)『幕末維新期における教育の近代化に関する研究 近代学校教育の生成過程』風間書房, 282ページ。
- 62) 佐藤百太郎に関する最初期の論及としては、石井研堂(1997年復刻)『明治事物起源 五』ちくま学芸文庫版の第十編「金融商業部 貿易家佐藤百太郎」がある。曰く「佐藤百太郎は、下総国佐倉町の医師佐藤尚中の長男にて、嘉永六年生まれなり。十二歳のとき、横浜なるヘボン博士について語学を修め、慶応二年、十四歳にして、単身米国に渡り、桑港(サンフランシスコ)にて、米人ソーヨの雑貨店に入り、業務の余暇夜学校に通ひ、実務と学業をあはせ学べり。同四年紐育(ニューヨーク)に赴き、商店に勤めながら、日本雑貨の輸入につき、調査すること深く、同七年にいったん帰朝せり。積年の志望を実現せんがためなりし」(450ページ)と。また、富田仁編(2005年)『海を越えた日本人名事典』日外アソシエーツ収録「佐藤百太郎」にも「慶応3年、13歳で私費で単身渡米し、サンフランシスコの商業学校を終え丁稚奉公のような形で働き始める」(330ページ)とある。ヘボン塾での英語修行については、横浜開港資料館・明治学院大学図書館・明治学院歴史資料館編(2013年)『宣教医ヘボン ローマ字・和英辞書・翻訳聖書のパイオニア』横浜市ふるさと歴史財団, 24~25ページも参照。
- 63) 『高橋是清自伝』62ページ。
- 64) 新日米新聞社編・刊(1961年)『米国日系人百年史』410ページ。

- 65) この洋学伝習所＝神戸洋学校については、「撰津国八部郡神戸西ノ町に洋学校を設置、箕作貞一郎を教師とし、学則を定める」[兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 史料編 幕末維新2』兵庫県、1998年収録] 689ページ；大槻文彦『箕作麟祥君伝』[『明治後期産業発達資料』732, 竜溪社, 2004年収録] 46～51ページも参照。
- 66) 早稲田大学図書館蔵『大隈文書』収録。以下では色川大吉・我部政男監修／内田修道編(2000年)『明治建白書集成』[第1巻] 筑摩書房に採録された98『貨幣之儀ニ付奉申上候書付』、99『貨幣之儀ニ付奉申上候書付』を使用した。
- 67) 松田「事績考」221, 222, 227ページ。
- 68) 赤松『前掲書』519ページ。
- 69) 岡田俊平(1955年)『幕末維新の貨幣政策』森山書店, 59～60ページによると、明治元年9月より2年3月の記録『甲州屋忠右衛門所蔵記録帳』の名鑑中に「横濱町五丁目、蚕・糸商小西屋傳藏」とあり、明治3年5月時点の『横濱商人名録』には「南仲通五丁目、小西傳藏、両替商」、横濱商人番付『大港光商君』にも「南中五、小西傳藏、両替商」と記載されているという。岡田は「関戸良平は、生糸商小西屋伝藏の同居親類であったと見て誤りなからう」としている。門屋・小西屋ともに、安政・文久期の横浜商人記録には見られず、慶応年間に進出した新興商人であったと考えられる。また、横浜開港資料館編(1991年)『横浜町会所日記 横浜町名主小野兵助の記録』横浜開港資料普及協会には「小西屋伝藏」に関する以下の記載がある。すなわち、明治3年5月22日「小西屋伝藏店江井筒屋吉右衛門と申者引移之届出候事」、明治3年9月晦日「小西屋伝藏ヨリ喜三郎(中居屋) 婦町いたし候由申出候事」、明治4年10月28日「小西屋おちえとの被参候事」、明治4年12月14日「永山様ヨリ千代田屋寅吉所持鉄火鉢一・鉄瓶一・角火鉢一、小西屋伝藏方江預り有之候間、右は吉田町右寅吉所持品と一時入札可致旨、書面にて御申越有之候事」。
- 70), 71) 『明治建白書集成』[第1巻] 349～355ページ。岡田俊平(1955年)『幕末維新の貨幣政策』森山書店, 59～69ページ；高垣寅次郎(1972年)『明治初期 日本金融制度史研究』早稲田大学出版部, 107～110ページも参照。
- 72) 伊東榮(1916年)『伊東玄朴傳』元文社, 19～22ページ；青木歳幸(2014年)『伊東玄朴』佐賀県立佐賀城本丸歴史館, 98ページ。
- 73) 益田孝著／長井実編・刊(1939年)『自叙益田孝翁伝』99～100ページ。
- 74) 青木『前掲書』99ページ。
- 75) 熊澤恵里子(2012年3月)「他国修行 福井藩教育改革の軌跡」『福井県文書館研究紀要』[9] 4, 25ページ。
- 76) 『伊東玄朴傳』収録「門人姓名録」1～15ページ。
- 77) 『横浜町会所日記 横浜町名主小野兵助の記録』115ページ。
- 78) 伊藤博文関係文書研究会編(1978年)『伊藤博文関係文書』[六] 塙書房「321平松時厚 明治(3)年9月25日(参議宛)」440ページ。
- 79) 松田「事績考」222ページ。
- 80) 平成27年8月19日神戸地方方法務局にて現物を閲覧・確認。なお同局にはこのほかに『攝津国八部郡神戸港加納(嘉納)町地図(朱字ニテ)第二拾四號』・『攝津国八部郡神戸港下山手通一

丁目地図 (朱字ニテ) 第三拾二號}・『攝津国八部郡神戸港下山手通二丁目地図 (朱字ニテ) 第三拾三號}・『攝津国八部郡神戸港下山手通五丁目地図 (朱字ニテ) 第三拾六號}・『攝津国八部郡神戸港下山手通六丁目地図 (朱字ニテ) 第三拾七號}・『攝津国八部郡神戸港下山手通七丁目地図 (朱字ニテ) 第三拾八號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通一丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通二丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾一號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通三丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾二號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通四丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾三號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通五丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾四號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通六丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾五號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通七丁目一地図 (朱字ニテ) 第四拾六號}・『攝津国八部郡神戸港中山手通七丁目二地図 (朱字ニテ) 第四拾七號}・『攝津国八部郡神戸港山本通二丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾八號}・『攝津国八部郡神戸港山本通三丁目地図 (朱字ニテ) 第四拾九號}・『攝津国八部郡神戸港山本通四丁目地図 (朱字ニテ) 第五拾號}も保管されており、いずれの地図にも「今般地租御改正ニ付當町實歩丈量方積精密遂調査候致処図面之通脱漏重複ハ勿論境界不明瞭ノ廉等毫末毎之候也 明治十年 副戸長 姓名 印」の記載がある。

- 81) 喜多文七郎／石阪孝二郎編・刊 (1959年)『兵庫津北風家総支配役 喜多文七郎日誌』36ページ。
- 82) 福井県立図書館保管『松平文庫』収録『御用日記』；福井市立郷土歴史博物館保管『礪川文藻』坐右日簿。
- 83) 『折田年秀日記 第二』39ページ。
- 84) 熊澤恵里子「幕末維新期の福井藩政改革と藩校 地方教育史研究の視点から」『福井県文書館研究紀要』第1号, 38～44ページ参照。
- 85) 東京大学百年史編集委員会 (1984年)『東京大学百年史通史 一』東京大学, 182ページ。
- 86) 慶應義塾 (2001年)『福澤論吉書簡集』[第2巻] 岩波書店, 293ページ「四一四 小幡篤次郎 明治十二年十二月十九日」。
- 87) 交詢社編集・発行 (1983年)『交詢社百年史』 ー ページ。
- 88) 神戸市教育史編集委員会 (1966年)『神戸市教育史第1集』神戸市教育史刊行委員会, 252～253ページ。
- 89) 熊澤「他国修行 福井藩教育改革の軌跡」25～26ページ。
- 90) 緒方富雄 (1980年)『緒方洪庵伝』岩波書店, 184～185ページ。同書188～302ページ「適々斎塾姓名録」には636名の門弟が記載されている。
- 91) 慶應義塾 (2001年)『福澤論吉書簡集』[第1巻] 岩波書店, 251ページ「一三九 島津復生 明治五年十一月七日」。
- 92) 平成27年8月19日神戸地方方法務局にて閲覧・確認。「福澤論吉」名義の地所近くには「関戸慶治」名義の地所のほかに、「廿七 宅 二百十八坪二合三夕 小寺泰次郎」の記載も見える。そのほかに、『福沢論吉事典』407ページ；西澤直子 (1994年)「奥平家の資産運用と福澤論吉 —— 新資料・島津復生宛福澤論吉書翰を中心として —— 」慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』第11巻, 197～220ページも参照。
- 93) 兵庫県立神戸商業高等学校 (1978年)『百年史』(財) 神商同窓会, 23～25ページ。ただし、

- 地所の名義は関戸慶治となっている。その一面と思しき神戸市中央区北長狭通4丁目2ローレル元町ビル西側壁面には「兵庫縣立神戸商業學校發祥地 明治十一年一月十六日神戸商業講習所此所に創設同十九年六月改称」と刻まれた御影石製の記念碑が嵌め込まれている。
- 94) 慶応義塾編(1969年)『福澤論吉全集 第3巻』[再版] 岩波書店, 333~336ページ。
- 95) 原田環(2001年)「井上角五郎と朝鮮」宮嶋博史・金容徳編『近代交流史と相互認識Ⅰ』慶應義塾大学出版会, 59ページ。
- 96) 横浜開港資料館架蔵『早矢仕有的関係資料(文書61)』収録曾我直嗣編『故人交友帖』第1~15冊(積文)曾我有壬所蔵／『名刺帖』丸善株式会社所蔵を2014年8月22日に閲覧・確認。
- 97) 慶応義塾福澤研究センター編(1986年)『慶應義塾入社帳第一巻』慶應義塾大学出版会, 148ページ。
- 98) 福井県立図書館保管『松平文庫』収録『子弟輩』採録「勝次郎弟 明治三午三十二才 久保村純介(助)」。
- 99) 石河幹明(1932年)『福澤論吉傳』[第4巻] 岩波書店, 630~631ページ「米国で日本人を救う」。
- 100) 福井県文書館(2014年)『福井藩士履歴2 お〜く』福井県文書館資料叢書10採録「久保村勝次郎[士族]」308ページ。
- 101) 慶応義塾編(1971年)『福澤論吉全集』[第19巻] 岩波書店収録『慶応三年日記』。
- 102) 『高橋是清自伝』38ページ。
- 103) 早稲田大学図書館所蔵『大蔵省官員録』[明治三, 書写資料] 収録。
- 104) 『兵庫津北風家総支配役 喜多文七郎日誌』49~50ページ。
- 105) 『同前書』85ページ。
- 106) 『同前書』◇順に228, 233~234, 238ページ。
- 107) ジョゼフ・ヒコについては、ジョゼフ彦記念会誌『浄世夫彦』[1973年第1号発刊~]の他に、伝記として吉村昭(1999年)『アメリカ彦蔵』新潮文庫；山下昌也(2007年)『ヒコの幕末漂流民ジョゼフ・ヒコの生涯』水曜社がある。また、ヒコの故郷兵庫県加古郡播磨町郷土資料館は顕彰事業としてヒコに関する企画展・特別展を定期的に開催している。
- 108) 浜田彦蔵著／中川努・山口修訳(1964年)『アメリカ彦蔵自伝(二)』[東洋文庫22] 平凡社, 226~228ページ。
- 109) 「ジョゼフ・ヒコとヴァン・リード」(1858年)と題された写真は、現在播磨町指定文化財に登録され、播磨町郷土資料館が所蔵している。
- 110) 『折田年秀日記』[第二] ◇順に39, 57, 528ページ, 『折田年秀日記』[第三] ◇順に183, 215, 218, 219, 220ページ。
- 111) 『神戸開港三十年史』坤545ページ。
- 112) 早稲田大学図書館所蔵『大蔵省官員録』[明治三, 書写資料] 収録。
- 113) 赤松『前掲書』377~384ページ；西松五郎(1980年8月)『「湊川濯餘」と藤田積中』神戸史学会『歴史と神戸』第19巻第4号。
- 114) 由義は洗礼こそ受けていなかったが、プロテスタントの教義を熱心に信仰していたという(和久松洞[1926年]『松雲神田翁』精華会本部, 100ページ)。

- 115) 赤松『前掲書』45ページ。
- 116) 村野利昭蔵『村野山人文書』収録『関戸由義書翰』3通。
- 117) 赤松『前掲書』48ページ。村野畢生の事業山陽鉄道については、『山陽鉄道会社創立史』野田正穂・原田勝正・青木栄一編（1980年）『明治期鉄道史資料』[第3巻]日本経済評論社収録も参照。
- 118) 川嶋「一斑」62ページ。
- 119) 交詢社編・刊（1902年）『日本紳士録』422ページ「安藤行敬 神戸貯蓄銀行相談役 北長狭通四ノ二ノ一」。
- 120) 赤松『前掲書』647～648ページ。
- 121) 川嶋「一斑」61ページ。
- 122) 『神戸開港三十年史』乾, 374ページ。
- 123) 『神戸市史 本編各説』326ページ。
- 124) 本郷直彦（1913年）『神戸権勢史』平野寶盛堂には「當時知事は中山信彬権知事にして、歩合金事務に係る掛官は、外務局長少参事加藤祐一、少属関戸由義等なりき」（224～225ページ）とある。
- 125) 『神戸市史 本編各説』328ページ。なお、貿易五厘金制度の顛末については、神戸貿易協会編集・発行（1968年）『神戸貿易協会史』41～46ページも参照。
- 126) 川嶋「一斑」61ページ。
- 127) 「同前」62ページ。
- 128) 『神戸市史 本編各説』738～739ページより作成。詳細は兵庫県警察史編さん委員会（1972年）『兵庫県警察史 明治・大正編』兵庫県警察本部, 93～173ページ。
- 129) 川嶋「一斑」62ページ。
- 130) 寺岡寿一編・刊（1981年）『明治初期の官員録・職員録』第1～6巻収録。
- 131) 川嶋「一斑」59ページ。
- 132) 『神戸開港三十年史』乾, 501ページ。
- 133) 宮本又次（1970年）『小野組の研究 前期的資本の興亡過程』[下]大原新生社, 134～135, 551～552ページ。
- 134) 神田乃武編・刊（1910年）『神田孝平略傳』15～17ページ；福島正夫（1962年）『地租改正の研究』有斐閣, 44～56ページ。
- 135) 小代薫（2015年3月1日公開）「神戸開港場における内外人住民の自治活動と近代都市環境の形成に関する研究」[神戸大学博士論文] 50ページ。
- 136) 以下、加納宗七の瀧道敷設と関戸の栄町通敷設については、松田『宗七伝』165～184ページによる。
- 137) 『神戸開港三十年史』乾, 532ページ。
- 138) 『同前』500～501ページ；落合『兵庫県八部郡地誌』附録「神戸誌 一」採録「神戸山部新市街」723ページ。
- 139) 『神戸市史 本編各説』134ページ。
- 140) 平成27年8月19日神戸地方方法務局にて閲覧・確認。

- 141) 川嶋「一斑」61ページ。
- 142) 郵政省（1971年）『郵政百年史資料 第27巻』[郵政建築史料集] 吉川弘文館採録「営繕関係公文書」54神戸郵便役所の建築，278ページ。
- 143) 落合『兵庫県八郡地誌』採録「神戸誌 二」33ページ。
- 144) 『神戸開港三十年史』乾，556ページ。
- 145) 垣貫與祐編・刊（1882年）『豪商神兵湊の魁』[神戸史学会複製1975年] 収録「諏訪山温泉常盤楼」図。
- 146) 小野組の破産については，神戸新聞社（1977年）『海鳴りやまず 神戸近代史の主役たち』[第I部] 神戸新聞出版センター，62～64ページ。
- 147) 神戸市神戸区編（1919年）『神戸区有財産沿革史』神戸市役所，218～225ページ。
- 148) 『同前書』224～248ページ；神戸山手大学・神戸山手短大図書館（2014年4月）「すわやま」図書館だより第23号，10～11ページ。
- 149) 栄町通界隈のビジネス街化については，鶴飼浩平・足立裕司（2007年）「近代における神戸栄町通界隈の歴史的研究」『平成19年度日本建築学会近畿支部研究報告集』877～880ページを参照。
- 150) 川本を介した福澤と九鬼家との関係については，小沢清躬（1948年）『蘭学者 川本幸民』川本幸民先生顕彰会；川本裕司・中谷一正（1971年）『近世日本の化学の始祖 川本幸民伝』共立出版；坂上正信（2001年10月）「幸民・洪庵そして諭吉」『歴史と神戸』第40巻第5号；高田義久（2010年8月）「最後の藩主九鬼隆義とその時代」『同前誌』第49巻第4号を参照。
- 151) 武田晴人（1987年）『日本産銅業史』東京大学出版会，1～22ページ。
- 152) 松田『宗七伝』242～244ページ。
- 153) 多田銀銅山の前史については，小葉田淳（1968年）『日本鉱山史の研究』岩波書店，713～758ページを参照。
- 154) 猪名川町教育委員会（2014年3月）『多田銀銅山遺跡（鉱山地区）詳細調査報告書 —— 役所関連遺跡と生産遺跡の調査 —— 』猪名川町文化財調査報告書5，238ページ。
- 155) ◇順に，猪名川町編纂・発行（1991年）『猪名川町史』第5巻史料編，655～660ページ；川西市史編集専門委員会（1977年）『かわにし 川西市史』第6巻[史料編Ⅲ] 兵庫県川西市，322～324ページ。
- 156) 猪名川町史編集委員会（1990年）『猪名川町史』第3巻[近現代] 猪名川町，268～269ページ。
- 157) 猪名川町教育委員会『前掲報告書』収録図89「水抜坑（明治時代の土地借用文書）」104ページ。
- 158) 藤原正人編集・発行（1962年）『明治前期産業発達資料』[第7巻] 明治文献資料刊行会，52ページ。
- 159) 『同前書』37～38ページ。
- 160) 川西市史編集専門委員会（1980年）『かわにし 川西市史』第3巻，兵庫県川西市，107ページ。
- 161) 武田『前掲書』33～34ページ。

- 162) ◇順に、齊藤精一(1886年7月)「兵庫縣下鑛山概況」『日本鑛業會誌』第17号, 1199, 1201, 1201~1202, 1205, 1206ページ。
- 163) 猪名川町教育委員会『前掲報告書』13ページ。
- 164) 出雲国造こくそう [出雲大社宮司の特称] は南北朝期の動乱を機に千家家と北島家に分裂, 各々千家国造・北島国造を称する。その後, 両家は協定を締結し, 奇数月は千家家が, 偶数月は北島家が, それぞれ杵築大社きづきののおやしほ [明治5年出雲大社に改称] の神事を催すこととなった(島根県の歴史散歩編集委員会 [1995年]『新版 島根県の歴史散歩』山川出版, 98ページ)。だが, 「各神社宮司は一人たるべし」とする明治政府の方針によって, 明治6年3月, 千家尊福と共に出雲大社国造を務めていた北島全孝たけのりは, 岡山県吉備津神社宮司を命ぜられた。改めて出雲大社宮司に任命された千家尊福は, 全孝と相計って, 宗派神道の出雲大社崇敬講社を結成する。明治12年に隠遁した全孝より家督を譲り受けた北島脩孝は, 崇敬講社を千家邸に移して「大社教」[現在の出雲大社教]に改組した千家尊福と袂を分かち, 「出雲教会」[現在の出雲教]を組織したのである(島根県教育委員会編・刊 [1968年]『明治百年島根の百傑』549~551, 562~563ページ)。
- 165) 平凡社地方資料センター(1995年)『島根県の地名』平凡社, 342~343ページ。
- 166) 三菱社史刊行会(1980年)『三菱社誌 15』東大出版会 [第十四巻]「是月摂津國多田鑛山ヲ稼行ス」2~9ページ。
- 167) 『福澤論吉事典』271ページ。
- 168) 以下, 三菱による高島炭鉱買収の経緯については, 慶應義塾(2001年)『福澤論吉書簡集』[第3巻]岩波書店, 360~361ページ。
- 169) 『同前書』6ページ「四九〇 岩崎弥太郎 明治十三年七月六日」, 7ページ「四九一 岩崎弥之助 明治十三年七月六日」。
- 170) 三菱社史刊行会(1980年)『三菱社誌 18』東大出版会 [第二十巻]「十八日 摂津國多田鑛山ヲ堀伴成ニ譲渡シ稼行セシム」85~92ページ。
- 171) 内閣官報局編(1977年)『法令全書 第一八巻ノ二』[明治18年-2], 原書房収録「公示工部省第三拾六號」267ページ。
- 172) 松田『宗七伝』245~246ページ。
- 173) 神戸市文書館架蔵 THE HIOGO NEW 合本より。
- 174) 大阪府編纂『鑛業誌』(大阪府 [1903年]『大阪府誌 第3編』思文閣収録)によると, 慶治が開鑿申請したのは「摂津國豊能郡東能勢村下字川尻杉立鑛山」であった可能性が高い。共同者は「兵庫県人久保清十郎」で, 明治23年開鑿許可が下りた際の所有権は久保になっている(855ページ)。なお, 『同誌』には「府下鑛山の如きは幕末の衰微の餘を承けて試掘或いは借区開坑等を出願するものは壹貳なりき」(838ページ)との記載もある。
- 175) 『アメリカ彦蔵自伝(二)』227ページ。じつはこの当時, 神戸商義社なる兵神財界人の結社があり, 栄町3丁目18番地に本部を置いて, 商権回復や自由民権に関する社員の時論, 海外通信や例会記事等を掲載した『神戸商義社雑誌』(禁売買)を発刊し, また『神戸新報』に「商業演説会」の開催広告を頻繁に掲載していた。神戸新報社を設立した鹿嶋秀麿や白川敏樹をはじめとして, 兵庫県令森岡昌純とその腹心の村野山人・本山彦一, さらに藤田積中や神田兵

右衛門など地生えの財界人が商義社員に名を連ねたが、その大方が交詢社兵庫支社の社員でもあった。ただし、『商義社雑誌』に載せられた例会出席者名簿や会堂建設費寄附者名簿に関戸由義・関戸慶治の名は全く登場しない（神戸中央図書館蔵『神戸商義社雑誌』第4〔1881年3月10日〕, 7〔1881年4月20日〕, 9〔1881年8月20日〕, 10〔1881年9月19日〕, 11〔1881年10月19日〕, 12〔1882年1月10日〕, 15〔1882年5月20日〕号；神戸市文書館架蔵『神戸新報』1881年9月分, 1882年1～5月分；新修神戸市史編集委員会〔1994年〕『新修神戸市史 歴史編Ⅳ』〔近代・現代〕神戸市, 54～62ページ）。穿った見方をすれば、これは「あの男は今完全に落ちぶれて……」というヒコの回想を裏付ける事実かもしれない。

- 176) 新修神戸市史編集委員会（1995年）『新修神戸市史 行政編Ⅰ 市政のしくみ』神戸市, 142～148ページ。
- 177) 『神戸開港三十年史』坤, 492ページ；『神戸区有財産沿革史』46～48ページ。
- 178) 『神戸市史本編各説』788ページ。
- 179) 『同前書』934～935ページ。
- 180) 日本水道協会編・刊（1967年）『日本水道史』143ページ。
- 181) 『福沢諭吉事典』654ページ；慶應義塾（2001年）『福澤諭吉書簡集』〔第1巻〕岩波書店, 161～162ページ「八六 九鬼隆義 明治三年二月十五日」。
- 182) 『神戸開港三十年史』坤, 510ページ。元の正式名称は「女学校（ガールズ・スクール）」であり、明治12年9月「英和女学校」となる。詳細については、神戸女学院百年史編集委員会（1976年）『神戸女学院百年史 総説』神戸女学院, 20～21ページ。
- 183) 明治20年7月27日付『神戸又新日報』第965号掲載「私立女子手藝学校」より。
- 184) 慶應義塾（2001年）『福澤諭吉書簡集』〔第3巻〕岩波書店, 13ページ「四九七 白洲退蔵 明治十三年カ七月十四日」。
- 185) 慶應義塾（2002年）『福澤諭吉書簡集』〔第6巻〕岩波書店, 176ページ「一四一一 田中不二麿 明治二十二年十月十五日」。
- 186) 川嶋「一斑」59ページ。また、『神戸開港三十年史』坤, 529ページ。
- 187) 『神戸開港三十年史』乾, 509～513ページ。
- 188) 本郷直彦編（1929年）『神戸医界叢談』大祐文社によると、佐野病院の住所は「神戸市神戸区北長狭通四丁目三三」（136ページ）である。また、桑原昌（1966年）『生田区医師会史』には「穴門筋に佐野譽内科病院」（16ページ）とある。
- 189) 『折田年秀日記』〔第三〕551ページ。
- 190) これに関連して興味深いのは、『神戸開港三十年史』坤の一節「（新来の移住民は）古郷を棄て、新運命を求めんとして来る者なり、冒険も恐れず、労苦も辞せざる気力ある者と認めざるべからず。彼等の眼中には自己あるのみ、隣人すら之れなきなり。彼等の胸中には利己あるのみ、他人の利害を顧慮する違なきなり。彼らの欲望には錢あるのみ、名誉の如きは問ふ所にあらず。彼等は高尚なる嗜好を有せず、而して壮なる営利の意志を有す。彼等は優美なる思想を有せず、而して燃ゆるが如き貨殖の希望を有す」（308ページ）であろう。これは兵神地生えの住民が全国各地から一攫千金を狙って開港地に流れ込んだ有象無象に向けた眼差しを如実に表している。関戸由義・慶治、加納宗七、旧三田藩九鬼家主従等は、まさにその代表的な存

在ではなかったろうか。

- 191) 一坂太郎 (2008年) 『ひょうご幕末維新列伝』神戸新聞総合出版センター, 10~16ページ
「ジョゼフ・ヒコ (浜田彦蔵) の悲劇」, 235~238ページ 「加納宗七と加納町」, 336~339ページ
「三田藩の人々」。

巻末資料 「関戸由義・慶治略年表」

元号	年	西暦	関戸由義・慶治履歴	関連
文政	10	1827		6/23 加納宗七、紀州和歌山の商家に誕生
	11	1828	不詳 [推測] 関戸良平由義、越前福井藩(松平家領)において誕生	6/25 藤田積中、兵庫の町家に誕生
慶応	3	1867	3/9 由義の長男左一郎、鈴木屋三右衛門と養子縁組、十三人扶持を拝領 [推測] この頃、由義は福井藩家老本多敬義に奉公	4/ 横浜93番米商ヴァン・リード、『万国新聞』に「アメリカへ学問修業交易又は見物遊歴に渡海被成度ものは随分御世話可申候」の広告掲載 12/7 神戸開港 12/9 王政復古の大号令、新政府誕生
慶応/ 明治	4・元	1868	5/13[和暦4/11] 同日付『ハワイアン・ガゼット』紙に、関戸一平慶治と思しき“Dr. Sekido”なる人物がハワイ島を訪問し、特産品、労働制度等を視察との記事掲載 5/27[和暦閏4/6] 同日付『ハワイアン・ガゼット』紙に、“Mr. Bartow”がホノルルに滞在中の“Dr. Sekido”を紹介して、和服を中心とした日本商品を大量に購入との記事掲載 6/17[和暦閏4/27] 同日付『ハワイアン・ガゼット』紙「6/15アイダホ号でサンフランシスコに到着した旅行者リスト」に“Dr. Sekido, Yeguich Yanagimotu, Ogata Tegiro”が掲載 [不詳] 由義が横浜本町四丁目小西屋伝蔵厄介となり振官運動を開始 [伝聞] 由義が兵庫県に洋学校の設立を建白 ⇒8/ 神戸西ノ町の海岸民家に洋学伝習所＝神戸洋学校開設 11/ 神戸洋学校の教授に箕作麟祥が就任、同校の坂本村移転が決定	4/10 神奈川奉行所の認可を得た集団出稼移民42名がグアムに渡航 4/11 江戸城開城、討幕軍入城 4/25 ヴァン・リード周旋によるハワイ移民「元年組」を載せたサイオト号が新政府の渡航許可なく横濱を出航 11/1 神戸村、二ツ茶屋村、走水村を合併、神戸町が成立
	2	1869	[不詳] 由義が「横濱弁天町五丁目門屋幸之助」と連署で『貨幣ノ儀ニ付申上候書付』作成 12/4 由義が民部省通商少佐拜命、朝臣として「源 由義 関戸」を拝称	3/ 横浜石川屋、藩営商館の役割終了
	3	1870	9/ 新潟県為替商社への英国書記官アダムス訪問の件につき、由義と平松時厚県知事との間で軋轡発生 12/5 由義が民部省通商少佐免官 [不詳] 慶治が鯉川筋西側地所に関山小学校を開校	1/ 回漕会社設立 8/ 大阪神戸間に電信開設
	4	1871	3/21 由義の次男春雄が誕生⇒明治16年村瀬家の養子となり村瀬春雄に 3/24 由義が兵庫県外務局少佐として出仕 5/24～31 為替会社で由義と北風氏の間で軋轡あるも和解	3/10 生田川付替工事着工(～6/9) 4/ 戸籍法制定 7/14 廃藩置県の詔書

元号	年	西暦	関戸由義・慶治履歴	関連連
	5	1872	<p>1/28 由義が「関戸良平」の名で松平家に「唐筆1箱・賀茂川千鳥1箱」を献上</p> <p>2/1 由義が外務局勸業課少属免官</p> <p>4/ 由義が貿易五厘金紛争を処理。三井組・小野組による貿易商社の設立に尽力</p> <p>9/16 由義が神戸市中新大道取開掛兼町会所掛を拝命、十一等出仕</p> <p>9/ 由義が旧生田川跡整地につき加納宗七に大道敷設を進言</p> <p>11/ 由義が福澤論吉の依頼で漆川神社前土地を三千四百両で斡旋</p> <p>[推測] この頃、由義長男の左一郎が神戸第一区戸長役場の副戸長を拝命</p>	<p>2/15 土地永代売買解禁</p> <p>3/20 「鉾山心得書」制定</p> <p>7/ 大蔵省達で全国に地券交付</p> <p>11/ 加納宗七、旧生田川跡整地着工</p> <p>12/3 太陽曆採用ともない明治6年1月1日に⇒以降西曆と和曆の月日が一致</p>
	6	1873	<p>2/ 慶治が諏訪山山麓に鯉泉開削し、鯉泉場の開拓を県に申請</p> <p>11/ 栄町通竣工にあたり、由義が石川季遠と共に各町副戸長連署の頌徳表を奉受</p> <p>[不詳] 由義と慶治が共謀して神戸市中各区の共同墓地を統合、城ヶ口に近代的な共同墓地を新設</p> <p>[不詳] 由義が神戸区の築港と水道整備を唱導</p>	<p>3/ 摂津三田藩九鬼家の主従が開発途中の栄町通に輸入会社「志摩三商会」を設立</p> <p>5/ 加納宗七が旧生田川跡整地竣工。幅18メートル、南北1.6キロメートルの龍道</p> <p>[現フラワロードの前身] 開通</p> <p>7/20 民営鉾山に関する統一的鉱業法典「日本坑法」制定</p> <p>7/ 地租改正条例布告</p>
	7	1874	<p>2/9 由義が県庁舎新築に際して自己所有地を396円80銭1厘で県に売却</p> <p>3/ 由義が神戸元町六丁目の駅通寮出張所神戸郵便役所地43坪8合を建物共350円で買い取り</p> <p>7/ 慶治がイギリス人ジョゼフ・エリオットより山手地所を買取り</p> <p>8/31 由義が神戸郵便役所造営に参画</p> <p>10/30 由義が栄町六丁目郵便役所地200坪9合の他東隣地42坪を690円で売却</p> <p>[不詳] 小野組の閉店にともない、同組からの融資の抵当とした諏訪山温泉地が大蔵省国債局に接収</p>	<p>2/ 佐賀の乱勃発</p> <p>5/ 神戸大坂間に鉄道開通、仮営業開始</p> <p>10/7 加納宗七が八部郡小部村堂ノ前における石炭試掘を兵庫県に申請</p> <p>11/ 小野組破産閉店</p>
	8	1875	<p>3/3 慶治が多田銀銅山地帯[民田村鳴出・立鉾・厚朴、広根村字金懸間歩、銀山町珍幸・櫻、南田原北浦・石金]を借区・採掘</p> <p>4/8 慶治がエディ・メイフィールドとの間に北長狹通二丁目の所有建屋・地所の貸借契約を締結</p> <p>6/ 慶治が兵庫県川辺郡国崎村の桐山坑から松ヶ原坑に至る鉾山地帯を同村方総代理から無期限借区・採掘</p> <p>[不詳] 慶治がジョゼフ・ヒコに土地取引の抱負を披歴</p>	<p>5/ ジョゼフ・ヒコ、北風家と合同で製茶輸出開始</p> <p>10/21 加納宗七が神戸港東側に5万5千坪の船溜を建築</p>

元号	年	西暦	関戸由義・慶治履歴	関連
9	1876	8/22 川辺郡銀山町戸長より慶治に「鉱山開坑につき地貨金受取証」交付 11/ 慶治が栄町通火災に際して罹災者に義捐金を寄附	3/ 魔刀令布告 9/9 森岡昌純, 兵庫県令就任	
10	1877	2/5 慶治が神戸京都市間鉄道開業式で神戸商人頭取として祝辞を奉呈 12/28 由義が兵庫県商業講習所生徒募集にあたり, 神戸区北長狭通四丁目四〇番地自邸内の木造瓦葺ペンキ塗り二階建て洋館を校舎として提供 【不詳】由義が九鬼隆義らと共に英和女学校(神戸女学院の前身)に寄附 【不詳】『明治十年内国勸業博覧会出品解説』収録の金銀銅主要鉱業人に兵庫川辺郡民田村の「関戸慶治」が掲載	2/5 阪神間鉄道正式開業 2/ 西南戦争勃発(～9月)	
11	1878	1/4 由義, 松平慶永より端書にて年頭祝辞を受領 2/14 由義, 松平慶永より「海苔1罐送ル」との直書を拝領	3/6 兵庫県商業講習所の開学許可 5/ 大久保利通暗殺 5/ 伊藤博文, 内務卿就任	
12	1879	夏/ 由義が伝染病予防のために硫酸鉄1万ポンドを寄附 9/30 由義が華族会館部長局に慶永を訪問 10/2 由義が松平邸に招かれて晩餐 11/25 由義が松平家より博多帯・半紙・海苔・羽織紐・錦絵などを拝領 年末 福澤より由義に交詢社加入の誘い<12/19 福澤より小幡篤二郎宛書簡「神戸の関戸由義も入社の筈」	1/8 神戸町と兵庫・坂本村が合併, 神戸区が成立 3/ 松山でコレラ発生, 全国に蔓延 9/5 兵庫県商業講習所を元町三丁目六九番地生島四郎左衛門の持家に移転	
13	1880	初冬 東京製靴商・西村勝三による諏訪山温泉地の払い下げ申請に對抗して, 由義と慶治が前田又吉と共に諏訪山温泉地の払い下げを大蔵省国債局に申請 3/ 神戸区選出議員, 諏訪山払い下げを大蔵省国債局に陳情 ⇒小野組が諏訪山温泉地を抵当に由義へ貸与した金額での払い下げを請願 7/ 前半 由義が東京で福沢論吉と面談 10/18 由義が松平家に菓子2箱を献上 10/28 由義が松平家に松茸1籠を献上 11/1 由義が上京して松平家に交香1籠を献上 11/12 由義が松平家より生菓子1箱・鴨1羽を拝領 11/16 由義が松平邸を訪問し, 牛肉缶詰2個を献上 12/30 慶治が上京, 折田年秀と古道具店を訪問	1/25 交詢社発会式 11/ 大蔵省, かつて小野組が関戸に融資した金額の一割五分増の額を以て, 神戸区への諏訪山温泉地払い下げ認可	
14	1881	8/11 由義が交詢社兵庫支社に加入	10/ 明治十四年政変→大隈重信失脚 【不詳】村野山人, 神戸区専任区長就任	

元号	年	西暦	関戸由義・慶治履歴	関連	連
	15	1882	1/8 [推測] 由義より村野山人宛書簡「昨日より俄ニ頭痛痛ヲ発シ水蛭ヲ付候」 12/30 由義が朝鮮行途中の井上角五郎、牛場卓蔵、草郷清四郎らと吟松亭で酒宴 [不詳] この頃、「関戸落魄」の噂流布	6/ 日本銀行条例制定→10/ 正式開業	
	16	1883	6/ 関山小学校廃校 12/31 工部省鉱山課『鉱山借区一覽表』掲載の主要鉱業人格付けから「関戸慶治」の名前が脱落	11/ 鹿鳴館開館式	
	18	1885	3/31 [推測] 由義より村野山人宛書簡「此免并生雲丹国元より持帰り」 4/19 慶治が出雲銅山検査につき、折田年秀に出雲大社国造千家尊福への照会依頼 年末 慶治が「兵庫県摂津国川辺郡広根村字櫻井大金坑借区願」を提出	3/ 福澤諭吉『脱亜論』発表 4/7 森岡昌純、兵庫県令退任 12/ 太政官廃止、内閣制度設置にともない第一次伊藤内閣成立	
	19	1886	4/11 [推測] 由義より村野山人宛書簡「三宮御退庁より御来臨之程」 [不詳] 慶治が猪瀬・国崎で鉱業権を取得し営業開始	10/ ノルマントン号事件発生 不詳 村野山人、神戸区長退任	
	20	1887	2/ 三菱が関戸慶治借区を含む多田銀銅山を買収 8/1 由義が九鬼隆義らと共に神戸元町四丁目私立女子手芸学校を設立 [不詳] 慶治が有志と大阪府能勢郡の鉱業権を共同取得、採掘許可を申請	5/ 加納宗七逝去	
	21	1888	8/17 午前9時神戸市北長狭通四丁目自邸において由義逝去 8/18 『神戸又新日報』に長男左一郎の名で由義の死亡記事と死亡広告掲載 8/19 午後三時出棺、城ヶ口墓地に由義埋葬→のちに追谷墓地第19区に改葬 8/22・23 『神戸又新日報』に左一郎による会葬者への御礼広告掲載 9/23 神田兵衛門・小寺泰次郎・村野山人の発起で、湊川神社において関戸由義・藤田積中のための神道・仏教・キリスト教による追善例祭開催	1/ 山陽鉄道会社創立 1/ 藤田積中逝去	